とあるＩＦの幻想殺し

NNY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とあるＩＦの幻想殺し

【Ｎコード】
Ｎ３９９６Ｕ

【作者名】
ＮＮＹ

【あらすじ】
絶対能力者《レベル６》シフト実験で一方通行（アクセラレータ）に勝利し、
絶対能力者《レベル６》となった
上条（悪）「この右手で、殺してやるだけさ」のその後の話・・・

プロローグ（前書き）

いまあ、まず皆さん警告をすると・・・
上条（悪）の二次創作なので、嫌だという人は戻ることをオススメします。
それでもいいという方のみどうぞ。
あと文才は皆無ですのであしからずｗ
ジョジ●風になるのを防ぐために解説は最小限にし、
残りは解説編で解説させていただきます。

プロローグ

ここは東京西部に位置する完全独立教育研究機関『学園都市』。東京都のほか神奈川県・
埼玉県・山梨県に跨る円形の都市。総面積は東京都の約3分の1に相当する巨大都市で、
総人口は約２３０万人（その8割は学生）。
基本的に学生は、それぞれが通う学校で「時間割り（カリキュラム）」をはじめとする、宿題・試験・補習などの学習を行い、夏休みなどの長期休暇、部活動、放課後の自由時間などを過ごすといった一般的なライフサイクルを送っている。都市内では、それぞれレベルが『７つ』あり、
生徒の6割を占めている測定不能や効果の薄い力を持つ無能力者《レベル０》

スプーンを曲げる程度の日常では役に立たない力を持つ低能力者《レベル１》

低能力者（レベル１）とほとんど変わらない程度の力を持つ異能力者《レベル２》

日常生活において活用可能で、便利と感じられる力を持つ強能力者《レベル３》

軍隊において戦術的価値を得られる程の力を持つ大能力者《レベル４》

学園都市に7人しか存在しない単独で軍隊と戦える程の力を持つ超能力者《レベル５》

そして、いまだ存在しないと云われている学園都市に1人しかいない絶対能力者《レベル6》

これは、そのとある絶対能力者《レベル6》、上条当麻の平行世界（パラレルストーリー）である。

プロローグ（後書き）

どうだったでしょうか？
とりあえず、しばらく様子を見て叩かれなかったら
続けたいと思います。

居候（前書き）

まず軽くキャラ紹介的なものを書かせていただきます。

居候

「はあ・・・」

学生が帰宅するには遅い時間帯に一人の少年がため息をつきながらが歩いていた。
どう見ても小学生にしか見えない担任の教師の補習を受けていたようだ。
つい最近まで学校に通っていなかった少年だが、居候のシスターに学校に行くように言われてまた学校に通い始めた。
名前は上条当麻。ここ学園都市唯一の絶対能力者《レベル６》であり、唯一の多重能力者（デュアルスキル）。
８月２０日、彼は研究者から絶対能力者《レベル６》シフト実験に誘われ、一方通行（アクセラレータ）と対峙し、見事これを倒して絶対能力者《レベル６》となった。
余計な騒ぎを防ぐためと、スキルアウトから守るためにバンクには無能力者《レベル０》として登録されている。
しかし、学園都市の無能力者の間では噂レベルで広まっており、実験関係者などの一部の人間には知られている。

「ただいまー」

「「おかえりー（とミサカはご主人様に返事をします）」」

「なんでお前がいるんだ？」

「「？」」

「『？』じゃねえよ！俺が間違っているみてぇじゃねえか！！」

「今日からここに居候させていただくミサカ上条号です。とミサカは自己紹介をします。」

この妙な語尾をつける中学生くらいの少女は以前研究者が上条を実験に誘う際に彼を試すように作られた検体番号２００００２号で、本来彼に殺害されるはずであったが、上条に生かされ、このまま生きても仕方がないので上条号として生きていくことにした。

「家族が増えるんだよ！やったねクールビューティ！」

「やったねインちゃん！とミサカは某鬱漫画風に返します」

「おいやめろ」

「それと、９月からミサカはあなたの高校に転入します。とミサカはご主人様に報告します。」

「高校に転入って・・・おまえ中学生だろうが」

「そっちの高校には小萌先生がいるからミサカはただ年齢を偽るだけで入れます。とミサカは作戦を説明します。」

「勝手にしろ・・・」

「それと、あなたにお願いがあるのですが。とミサカは頼もうとし

ます。」

「なんだ？」

「ミサカに名前をつけてほしいのですがとミサカはお願いします。」

「名前？」

「はい。ミサカがお姉さま《オリジナル》のクローンだということがバレては困るので。
とミサカは説明します。」

「そうだな、そうなったら面倒だ。それじゃあ、『あああああああ』でどうだ？」

「ダメですよ。そんな名前じゃ戦闘のときにテンション下がるでしょう？
とミサカは魔王と戦うことを想定します。」

「魔王って何だよ・・・いねぇよそんな奴・・・わかったよ、それじゃあ『上条　美静』でどうだ？
ビリビリと正反対な正確だし、インなんとかも『クールビューティ』って呼んでいるしな」

「インなんとかじゃなくて、インデックス！！何回も言わせないでほしいかも！！」

「いいじゃねぇか！お前の名前覚えにくいんだよ！」

「それはとうまが馬鹿なだけなんだよ・・・」

この純白の修道服を着ている十代ちょっとの少女は以前上条に助けられている。
脳内に十万三千冊の魔導書が詰め込まれていて、そのためにイギリス清教によって『首輪』という
一年ごとに記憶を消去しないと死んでしまう術式をかけられていた。

「『上条　美静』ですか・・・いいですねそれ。とミサk、美静はあなたの名づけた名前に
満足します。」

「そうか。よし！飯にするか！」

「ごっはんー♪ごっはんー♪」

「今日の晩御飯はなんですか？と美静はわくわくしながら尋ねます。」

「そーめん」

「「えー…（と美静は俺の期待を返せと言わんばかりにがっかりします。）」」

「しょうがねえだろ！！この間福引で嫌がらせのようにもらったんだから！
ちなみにあと1か月分はあるから覚悟しとけよ！」

「「そんなー！」」

居候（後書き）

書いてる途中で気がついたんですけど、
私原作もっていないんですｗｗ
だからアニメのようにはしょることもあります。
ごめんなさい
ちなみに一応原作は読みました。（数冊だけど）

解説編その1（前書き）

とりあえず本編で書かれることがなかった説明を解説していきます。

解説編その1

この話のテーマは『運命の修正』元ネタのラストで『こうして彼らは、正しい歴史の中に還っていく。』とあるが、それでも完全に『正しい歴史』に戻っているわけではなく、時間をかけてゆっくり修復して『正しい歴史』をたどることができるくらいに歪んだ運命を修復していくその過程を描(えが)いている。

上条当麻

物語のメイン主人公

本来幼稚園を卒園後学園都市に送られることで『正しい歴史』となるが、

この物語では上条刀夜がそうしなかったために運命が変わってしまい結果、上条の不幸に巻き込まれた両親を死なせてしまい、性格が歪んでしまう。

他の人を自分の不幸に巻き込こまないように鍛錬しており、

聖人を相手にしても体力がもてば勝つことができる。

能力は二つあり、原作と同じ幻想殺し《イマジンブレイカー》（冥土帰し命名）と

原作でもそれらしいのが存在するが原作よりも性能が優れている神の導き《アドバイス》（インデックスと美静命名）

幻想殺し《イマジンブレイカー》の方は原作と違い、

上条はすでに異能の力を掴んでそらすといった技術を習得している。

神の導き《アドバイス》は厳密に言うと能力ではなく、右手の出す不幸の影響で覚醒した第六感であり、

相手の悪意や敵意をもった攻撃などを予知することができる。

ただし、ギャグなどで出てくる攻撃は予知できない。（インなんとかの噛み付き、吹寄の頭突、美琴の電撃など）

インデックス
上条家の居候一号
元ネタで上条に助け出されるが、竜王の息吹（ドラゴンブレス）によって重傷を負ってしまい、冥土帰し《ヘヴンキャンセラー》によって修復されるが、
その後遺症として杖を突いている。上条の優しさに気づいており、上条を慕っている。
上条の居候になることは、ステイルは反対したが上の命令で居候になった。

上条美静
上条家の居候（二万）二号
レベル２の欠陥電気（レディオノイズ）としてバンクに登録されている。
９月に上条の義妹として上条の通っている学校に通うことになった。
オリジナルより若干髪が長く、それを後ろで束ねている。
原作で言う１００３２号のポジションだが、１７６００号４割（スネーク）、２００００号（変態）１割混じっている。
好物はカロリーメイトと上条のカロリーｍおっと誰か来たようだ

御坂美琴
運命が変わってしまった上条と接触して運命が変わってしまった中で一番変わらなかった。
原作と違うところは、上条に「勝負しなさい」ではなく「今日こそ殺す」
などの敵意（のようなもの）を向けている（後にツンデレ）。他はほとんど変わらない。

一方通行（アクセラレータ）
物語の準主人公
例の実験で上条と対峙したことで何かに気づき、黒翼が発現する。
実験で上条を倒し、経験と精神の成長を経ることで絶対能力者《レベル６》
になることができたが、上条に敗北したために絶対能力者にはなれなかった。
使おうと思えば自分から黒翼を発動できるが、制御がきかずリスクも高いので使えない、
原作同様、天井によって脳にダメージを負うが、インデックスが杖をつく役を担うことで
ここでは杖が必要なくなる。

白井黒子
上条から守るために美琴から教えられ、
大能力者《レベル４》で唯一上条が絶対能力者《レベル６》であることを知っている。
人を見る目があるため、原作以上に上条とは険悪になっているわけではない。

解説編その1（後書き）

とまあ、大体こんな感じです。
後で設定を追加するかもしれません。

塾生（前書き）

本当は原作第二巻を買って読んでから書こうと思ったんですけど、
それは何時になるのかわからないのでとりあえず原作がなくてもア
ニメを見ればなんとかなるところまで書きます。

塾生

「不幸だ・・・」
「まさか参考書が３６００円とは思わなかった・・えっ！マジ３６００円？」

「そんな何回も言わないでくれる？とうま・・・
３６００円があったら何が買える？とうま」

「うま●棒が３６０本、缶ジュースが３０本、お前の食費の４分の一とか・・・」

「もういいよ・・・聴いた私が間違ってたんだよ・・・」

「そもそもあなたが日頃から勉強していれば、こんなことにはならなかったのでは？
と美静はだらしがないあなたに呆れます。」

「わかってるよ！だけど、最近まで学校なんて通ってなかったから仕方ないだろ！？
通ったのは最初の三日だけ・・・ん？インデックス？」

「あそこでは？」

「・・・・・」

「なにを見てんだ？って・・・・・・３６００円分のアイスなんて食えないだろフツー」

「とうま!私は暑いなんて一言も言っ「わかったよ、アイスが食いたきゃ素直に言えばいいじゃん?」

「とーま!この服は主の御加護を視覚化した物であって――――」

(まったく、こんな暑っ苦しい中に暑っ苦しい格好したシスターに暑っ苦しい説教とは・・・)

「とーまー!ちゃんと聞いてる!?ちなみに私は「じゃあ、暑いからアイスでも食っていこうぜ」

「とうま!!ちゃんと聞いてた?!私は修行中の身だから嗜好品の摂取は禁じられ「じゃあ、食わなきゃいいだろ?」

「うー!でも!修行中の身だからダメだけど、あくまで修行中の身だから一人前の振る舞いはできないからね!
したがって、急に口の中にアイスが入ってくることもなきにしもあらずなんだよ　と　う　ま!」

「かみやーん!」「ん?」

「なっかなかに素敵な交渉中なとこなんやけどなー」

「ちなみにその娘だれぜよ?」

「」

「あれーかみやん?どうしたん?まさか記憶喪失になったとかじゃ?」

「なわけねーだろーが」

「ジョーダンやがなー！記憶喪失なんてー不思議系電波少女の特権やでーかみやんみたいな男がなったら気色悪いやろー？やっぱほらーそこのかみやんの隣にいる中学生の娘みたいな娘じゃないとー」

「私は不思議系電波少女ではなく、妹系ドM少女です。と美静は訂正します。」

「何ー！？かみやん！最初っから言ってくれればそんな感じの本貸してあげたのにー！」

「ぶっ殺すぞテメー！つーかお前も何まじめに変な訂正してんだよ！何だよ！？妹系ドM少女って！？」

「やだ、あなたったら・・・昨日あんなに攻めたのに・・・まだ足りないんですか？」

「何！かみやん！まさか君はあーんなことや、こーんなことをこの娘にやったんかー！」

「俺にそんな趣味はねー！！！そんなことより、土御門！！てめー二度と俺の前に現れるなっていったろーが！！」

「あれー？そんなこと言ったかにゃー？俺は馬鹿で嘘つきだからわからないぜよー」

「ったく・・・」

「で？そのちびっ娘は誰ぜよ？」

「あ！もしかして女装？ぺったんこすぎるしー」

「ぶちっ！」

「いや、確かにこいつは幼児体型だけどれっきとした女だ」

ぶちぶちっ！！

「とーま？」

「あっ」

「とーま？私に何か言うことは？」

「」

ーアイス屋にてー

お客様各位
誠に申し訳ありませんが、
店内改装のためしばらく休業とさせていただきます。

ビキビキビキ！！！

ーマクロナルドハンバーガーにてー

「シェイク♪シェイク♪シェイクが三つ♪」

「悪いにゃーかみやーん！」

「ゴチになりまー！」

（なんで・・・？）

「いったい何があったらこんなことに？と美静は笑いをこらえながら哀れみます。」

「うるせー」

「とうま！とうま！こっちこっち！」

「おー、よく開いて・・・ウォ！？」

そこには、巫女姿の少女がテーブルに突っ伏していた。

「く。食い倒れた」

（うわっ・・・いかにも怪しい・・・ぜってー不幸がまってる！つーか、今頃ナレーター出てきたよ！）

「かみやーん」

「ん？」

「ジャンケン！」

「「「ほい！！！」」」

「「よっしゃー「よっしゃーじゃねぇよ！！何勝手に決めてんだよ

！」

「頼んだでーかみやーん」

「わかった、わかったからその気色悪い目はやめろ」

「で？食い倒れたって何？」

「ハンバーガーを食べ過ぎて。うぷ。気持ち悪い」

「何でそんなに食ったんだよ」

「ヤケ食い・・・帰りの電車賃６００円・・・」

「そんで？」

「全財産５００円」

「ｗｈｙ？」

「買いすぎ。無計画。」

「誰かに借りればいいじゃん」

「おおっそれはいい案」

「おい！こっち見んな！期待の眼差しを向けんな！」

「あと１００円」

「無理！貸せないね！」

「倍返しでどう？」

「十倍！」

「・・・・わかった。十倍返しで」

「なんとまあ哀れな・・・と美静は軽蔑の眼差しを向けます。」

「プライドなんて考えてる余裕なんてないくらい我が家の家計は厳しいからな・・・」

「「苦労してるんだなー」」

「ところであなたは誰？巫女さん？」

「私。巫女さんじゃない。魔法使い」

「魔法使いぃぃぃ！！？曖昧なこといってないで、専門と、学派と、魔法名と結社名（オーダー）をなのるんだよ！お馬鹿！
大体！そんな格好するんだったら、せめて東洋系の占星術師くらいのホラを吹かなきゃダメなんだよ！」

「じゃ。それで」

「んぎぃぃぃぎぎぎ！！！！」

「そいつが巫女さんじゃなくて魔法使いなのはわかったからちょっと黙ってろ」

「とーま！なんか私のときと比べて優しいんだよ！」

「どこが？」

「道端で行き倒れている私をスルーした挙句に服までぬがせて！」

「へっ？！それってどういうことなんや！？かみや・・・ん？」

いつの間にか周りに怪しげな大人達がいた

「なんだこいつら？」

「塾の先生」

「先生？」

「それじゃ・・・」

少女はそう言うとその大人達と一緒に帰っていった

「なんで塾の先生が熟生の迎えに来てんねんなー」

「いかにも怪しいですね・・・私が行って調査してきましょうか？」

「いい、ほっとけ」

～～

「はあ・・・」

「どうかした？」

「お前が服脱がされたなんて言うから・・・一緒に住んでることがばれたらどんなに面倒なことか・・・」

「だってとうまが・・・」

（にしても、土御門の野郎・・・ぜってーインデックスのこと知ってるだろ・・・）

「とーまー！とーまー！見て見てー！ねー！」

「にゃーにゃー」

「捨て猫・・・のようだが？」

「とーま「却下」

「とうま、私はまだ何も「飼うのはだめ！却下！」

「むー！どうしてスフィンクスはダメなの？」

「学生寮ペット禁止、スフィンクスを・・・って早速名前つけんな！愛着沸いちゃうだろうが！」

「やーだー！！飼う飼う飼う飼う飼う「ダメだ！！！」

「にゃー」

「ほら！驚いて逃げちまったろうが！」

「とーまのせいでしょ！大体この国は猫に対してひどいことを・・・魔力の流れを感じる・・・」

インデックスがなにやらぶつぶつ言っている

「とうまは先に帰ってて！私は調べたいことがあるから！」

「帰っててって言われてもなぁ・・・ん？おい、どうした美静？」

「ルーンだよルーン、人払いのね・・・久しぶりだね、上条当麻・・・」

塾生（後書き）

いやーほとんどアニメの台詞でしたねー（笑）
いや、さすがに別ルートで出会えなんて無理ですｗ
ちなみにこの回は三沢塾へ進入するまでは原作なしで書いていこうと思います。

吸血鬼（前書き）

ちょっとペースが遅すぎたので投稿します。
それと先に言っておくと、御使堕とし《エンゼルフォール》の回は上条さんの両親が死んでしまい話にすらならないので書きません。ただ、私は火野神作が嫌いなので彼を殺します。詳細は解説編で

吸血鬼

「久しぶりだね、上条当麻・・・」

（え～っと、誰だっけ？こいつ・・・）

普通なら魔術師など変わった者、ましては殺し合ったことのある相手は印象に残るはずだが、
上条の場合はそんな変わったことが日常茶飯事なためにステイルのことはすっかり忘れていた

「ふん。挨拶もなしか・・・まあいい、やっぱ僕達はこうであるべきだ
たった一度の共闘で友達と思ってもらっちゃ困る、しかも殺されかけたんだからね・・・」

（あ～。あんときのヤムチャ魔術師か・・・）

「禁書目録《あの娘》なら心配するな。そこら辺にルーンを刻んだから
それを感じ取って調べにいったんだろう」

「ふーん。で？何の用だ？」

「Ｈｕｈ，　Ｄｏｎ't　ｓｍｉｌｅ　ｗｉｔｈ　ｅｖｅｒｙｔｈｉｎｇ.　Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ　ｔｈｅ　ｄｉｅ？」

《いちいち笑うな。ぶっ殺すぞ》

ステイルはそういうと右手からまるでガソリンを噴出させてそれに

火をつけたような炎剣をだし
それを一切の躊躇もなく上条へ炎剣を振り下ろした

「おっと！」

上条はまるで来るのがわかっていたかのように右手で炎剣を掴み、
右手が炎剣に触れると同時に炎剣はまるで岩をガラス製の剣で斬りつけた時のように
ガラスが割れるような音とともに粉々になった

「いきなり炎投げつけてくるたぁ御挨拶だな」

「そうそう！その顔だよ！やっぱり？君”と？僕”の関係はこうでなくてはね！
だから言っただろう？たった一度の共闘で日和ってもらっては困るんだよってね」

二人とも笑みを浮かべていた。友人同士の楽しい会話の時の笑顔でもなく、
ドラマで殴りあった学生同士の笑顔でもないお互いを見下しあっている笑みだ

「で？何をするつもりだ？殺し合いなら大賛成だ」

「そうしたいのは山々だが違う、内緒話だよ」

ステイルは懐から封筒を取り出した
会議などで重要な書類をいれるような封筒だ
ステイルはそれを弾くように飛ばすと封筒は上条の手元へゆっくり収まった

「受け取るんだ」《Ｄ　ｅ　ｂ　ｏ》

ステイルがそう呟くと封筒の封が裂け、
必要な書類だけが封筒から飛び出して上条の前で
ふわふわ浮かんだ

「三沢塾って知ってるかい？」

「あの宗教じみた塾か？そこに何の用だ？」

「そこに女の子が監禁されててね。それを僕が助け出す役がある」

「うわぁ・・・ついにやっちゃったか・・・」

「君の言う通り、いまの『三沢塾』は科学を軸にした真興宗教だ。
教えについては知らないし、正直知ったことじゃない。もう潰れた
ようなものだしね」

「？」

「乗っ取られたのさ。小悪党ばかりが集うインチキ宗教が
本　物　の　魔術師――いや、錬金術師にね」

ステイルは「ざまあみろ」とでも言うかのように鼻で笑った

「だが、重要なのはその錬金術師が『三沢塾』を乗っ取った理由さ
一つ目は簡単だ、『三沢塾』って要塞（システム）を再利用しようとしたんだろう
けどね、」

「錬金術師のそもそもの目的は、その塾に監禁されている吸血殺し《ディープブラッド》なんだ
元は、塾で巫女としての役割のために監禁してたらしいけど。」
「かねてから“あれ”を狙っていたのに“奴ら”が派手に動いたせいで
吸血殺し《あれ》を学園都市から持ち出す計画がパーになった」
「つまり、あの『変人達』から手柄を奪い返したと？」
「そうだ。奴からしてみれば・・・いや吸血殺し《あれ》の獲得は全ての魔術師の悲願だね」
「どういうことだ？」
「あれは『ある生き物』を殺す能力さ。それだけじゃなく、実在するかどうかもわからない『ある生き物』を生け捕りにできるかもしれない」
ステイルは少し間を空けていった
「吸血鬼のことだよ」
「吸血鬼？」
・・・・・・・・・・・・・・
『貧弱ゥ！貧弱ゥ！』

『ロードローラーだッ！！』

『俺は人間をやめるぞォーーーーー！』

‥‥
‥‥‥
‥‥‥‥

「違う！そっちじゃない！貴様絶対まともな想像してないだろ！？」

「人の心読むなよ・・・でー、その吸血鬼が本当にいるのか？

「魔術師（ぼくたち）でさえわからない・・・吸血殺し《ディープブラッド》とは、
すわわち吸血鬼を殺す力だ。ならばまず吸血鬼と出会わなければならない・・・そのためには
まず吸血鬼と出会わなければならない。そのために吸血殺し《そのこ》を抑えておいたほうがいい」

「それで結局何なんだ？何が言いたいんだ？」

「せっかちな奴だ・・・つまり僕達はこれから吸血殺し《ディープブラッド》を奪還するために
『三沢塾』へ特攻しないとまずい状況にある」

「ふーん。がんばればいいじゃん」

「何他人事みたいに言っているんだい？君も一緒に来るんだよ。
それと書類はちゃんと暗記しておけよ一度目を通したら燃えるようになっている」

「はあ!?何で俺がてめーら魔術師のお手伝いをしなきゃいけないんだよ!?」

「ちなみに拒否権はないよ?拒否しようものなら君の側にいる禁書目録(インデックス)を回収させてもらう」

「いや、むしろ助かるな。食費が浮くし」

「はあ・・・なんで君みたいな奴にまかせちゃったんだろう・・・仕方ない。そういえば君、女の子にお金を貸してたけど、その娘の住所は知ってるの?」

「あっ!!」

「その娘は『三沢塾』に住んでいる。正確には監禁されているが正しいけどね」

「ってことは、あの女が・・・」

「そう。吸血殺し《ディープブラッド》だ」

吸血鬼（後書き）

やっぱ小説を元に書くと説明が長すぎていけないですね。
無駄に長くなる上に読む気がしなくなるしから
ちょっとばかし台詞を変えるなどして遊びます（笑）
こんな話もあることがありますが、よければこれからも
よろしくお願いします。

神父（前書き）

すいませんちょっとネタが思いつかないもんで（笑）
基本的に原作の場面を悪条さんならこうするだろうと
考えて書くつもりですが、それだけだとつまらないかもしれないので
たまに原作から少し離れたことも書きます。

神父

「「「ただいまー」」」

「と言いたいところだが。これから上条さんは超ハイテク施設行ってっくっからー」

「私も行「やめとけやめとけ。お前にとってわけわからない物ばっかりだからな！何か壊されちゃさすがの上条さんもかなわない！じゃ、そーゆーことで二人とも留守番頼むわ。晩飯は冷蔵庫に入っているからチンして食べてくれ。あと、冷蔵庫で涼むなよ」

「う、うん」

「時にインなんとか。お前の腹の辺りが膨れているのは何故でせう？」

「それは、先程二人で“軽く”食事をとったからです。と美静はわざとらしい演技をします。」

「わざとらしい演技って・・・お前達何か隠してんだろ？言っちまいなよ、怒らないから」

「ち、違うよ。主に誓ってシスターが嘘を吐くはずが――――『みー』

インデックスがいい終わる瞬間、子猫の声が聞こえてきた。

「おい！！やっぱりさっきのスフィンクス拾ってきたんだな！？出せっ！さっさと出せっ！！！」

「まあまあ、いいじゃないですかあなた猫くらい。と美静は怒る夫を宥めます。」

「いいわけないだろ！？ただでさえ今月きっつぅ～いんだから！あと、いつからてめぇは俺の妻になったんだよ！？」

「あらあら、あなたもう忘れたんですか？もう三年になるじゃないですか」

「ちょっととうま！どういうことなの！？三年前ってことは小学生に手を出したの！？」

「出してねえよ！数日前知り合ったばっかだよ！！あと、話を戻すが。スフィンクスはダメだ！」

「ばかとうま！この猫は絶対飼うって決めたんだもん！うえぇぇぇん！！！」

「あーらーこーらー泣ーかしたー泣ーかしたー」

「ぐぬぬっ！わかった！わかったから黙れ！！飼うよ！飼えばいいんだろ！？」

（このままじゃバイトする羽目になって勉強どころじゃなくなりそうだ・・・）

十数日後、上条が思ったことが現実になることを上条はまだ知らな

い・・・
〜〜〜

「何やってんだ？」

「ん？見てのとおりルーンを張っているんだよ？」

「何のため？」

「僕達が『三沢塾』へ借金返済、もとい特攻している間に他の魔術師達から襲撃を受けたらいけないからね・・・魔女狩りの王（イノケンティウス）を置いていけば逃げ出す時間は稼げるだろ・・・まったく、世話の焼ける・・・」

それを聞いた上条はニヤニヤしていた。

“あること”気づいたらしく「なるほどなるほど・・・」と呟いている。

「ははーん？さては、お前インデックスのこと好きなんだろ？」

「なっ何を急にっ！！あの娘はただ保護する対称なだけで・・・別に恋愛感情とかは・・・」

ステイルは急に赤くなりだして叫んだ。

ステイルが必死で弁解するが、それをさえぎるように上条は先へ進むように言った。

「はいはい、お前がインデックスのことをすきなのはわかったからさっさと行くぞー」

だが、顔は相変わらずニヤニヤしているまんまだ・・・

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「それじゃあ、『敵地』に乗り込む前に『敵』のことについて触れておこうか」

「まず敵の名前だが・・・名前はアウレオルス＝イザードだ」

「アウレオルス・・・」

「なんだい？驚いているのかい？だが、あれは末裔だ。伝説に聞くほどでもない・・・」

「アウレオルスねぇ・・・」

‥

‥‥

；‥‥

‥‥‥‥

「フィオナーッ！！！！」

「アゾート！！」

‥‥‥‥

：：
：：
：：

「いや！違う！貴様またもやまともな想像してないだろ！？それは、本物だ！！
いや・・・ゲームだから偽者だけど・・・」

「だから人の心読むなよ・・・お前もＤＥＭＥＮＴやったことあるのか？」

「そんなことはどうだっていい。パラケルススという人物は知ってるはずだ」

「いや、知らん」

上条は即答した

「即答か・・・世界で一、二を争う錬金術師さ・・・」

「ってことは強いのか？」

「本人は大したことはないが・・・
吸血殺し《ディープブラッド》を押さえつけるだけの『何か』があることは確かだ。最悪、『ある生き物』を飼いならしている可能性もある・・・
それと、奴の力についてだが・・・」

「君は頭の中で描いたものを現実世界に引っ張り出せたらどうなると思う？

『世界の全て』を己の手足のように使えたとするならば・・・」

「そんなことができる奴とは戦いたくねえな・・・『世界の全て』を相手なんて・・・
俺の幻想殺し《イマジンブレイカー》と神の導き《アドバイス》をフル活用したところで勝てるかどうかもわからない
もしかして、そいつの能力ってそれか？なら、俺は降りるぜ。まだ、死ぬ気はないしな」

「まあ、人の話は最後まで聞けド素人め。だから、大丈夫だと言ったはずだ。
・・・・・・・・・・・・・
錬金術はまだ完成されていない学問なんだ
例えば、夜空に浮かぶ星を一つ一つ語ってみろと言われたら
それは何年かかると思う？きっと、百年や二百年じゃできないはずだ」

「つまり、呪文自体は完成しているが、それを詠唱し尽くすには人間の寿命じゃあまりにも短すぎる
誰もが思いつくような・・・例えば、呪文から無駄な部分を省いたり、祖父母から親へ、親から子へ、
子から孫へと代々受け継ぐ形で詠唱するなど・・・だがそれをしないのは成功例がないからだな？」

「気持ち悪いくらいに物解りがいいじゃないか。そうだ。だが、逆に寿命をもたない『奴ら』なら
たとえ長すぎる呪文だって詠唱できる。『奴ら』はそういう所も脅威なのさ・・・」

「まぁ、今のアウレオルスはそこまで脅威じゃない。精々、『三沢

塾』《要塞》にトラップを仕掛けて
侵入者を拒むのが精一杯さ」
「何だ？お前そのイザードって奴知ってんのか？」
「まあ、同じ協会の人間だからね。こっちはイギリス清教で、向こうはローマ正教
顔見知りだが友達じゃない」
「必要悪の教会《ぼ　く　た　ち》が異例中の異例なら向こうは特例中の特例、隠秘記録官（カンセラリウス）だ」
「簡単に言えば教会のために――――」
「あーあー、お前の長ったらしい説明はどうでもいいから
そんなことより、見えてきたぜ。お姫様の捕らえられているお城がよぉ・・・」
上条が示した先には夕日に照らされるビルが待ち構えていた・・・
～～～
「しかしまあ、なんとも不規則だな。このビル」
塾を見る限り何の変哲もない進学予備校だ。不気味な宗教団体なんてわからないだろう。
出入りする生徒達を見ても何の違和感もない。ただの進学予備校だ。
「で？どっから行くんだ？まさか堂々と進入なんて特攻とは聞いた

がマジでするなんて――――ってマジで行くのかよ」

「なんだ？他に得策があるとでも？」

「いや、ないけどさ・・・お前らなら気配をそのわけのわかんない魔術とやらで消せんじゃねえのか？」

「いや、たとえ僕達が透明人間になろうが『僕』が魔術を使った痕跡は隠せないからね」

「ハリー・ポッターでいう17歳未満の魔法使いが魔法を使ったばれるのと同じですか？」

「そんな、魔術に対する冒涜のような小説は映画は読んだり見たりしないからわからないが。まあ、そんなとこだね」

ステイルがなにやら不機嫌そうに答えた。

「つまり、お前は発信機ってことかな？」

「君の場合、魔術をキレイに拭き取っちゃうから僕よりバレやすいけれどね。
僕のほうは魔術さえ使わなければバレはしない」

「っつーことはアレか？俺達は発信機ぶら下げながら敵の本拠地におっ邪魔しまーす！すんのか？」

「そのために君を呼んだんだろう。死にたくなきゃ、死ぬ気で右手を盾に突き進むんだ」

「それって無策の代償が俺にかかっただけじゃん」

「生憎、魔女狩りの王（イノケンティウス）は君ん家であの娘と共にお留守番だからね。僕の
武器はこの炎剣だけさ。さて、そろそろ行こう」

そう言ってステイルは上条を盾にするように押しながら自動ドアを抜けた。
入り口をくぐり抜けて見たのもは、ごく普通のロビーだった。

（つか、俺ならまだしも、こいつが怪しまれないってどういうこった・・・）

二人はまったく周囲の注目を集めてはいなかった。部外者だとしても皆入塾者だと思うからだ。
だが、長身で香水くさくて煙草を吸っている神父がいたら絶対注目を集めるだろう。というか怪しまれるだろう。
しかし、周りはまるで二人がそこにいて当然な感じ、否。“いないかのように”歩いている。

「あれは・・・？」

皆普通に歩いている。だからこそ、ある一点が浮かび上がる。
エレベータ付近の柱になにやらロボットのようなものが寄りかかっている。
少し近寄って見てみると西洋の全身鎧を戦闘機っぽくしたようなロボットだ。
だが、そのロボットは機能はしていないようだ。手足はまるで針金を金槌で叩いたように薄く、折れている。
そして、関節からは黒いオイルのようなものが流れていた。

そして、何よりも不気味なのは周りが“これ”に気づいていないことだ。
こんなものが転がっていたら誰もが騒ぎ立てるはずだ。しかし、周りは誰もロボットに
目を向けようとも、話題にしようともしていない。皆見たくないわけでも、目をそらしたいわけでもなく、
それが当たり前のように生活している。

「ん？それがどうかしたのかい？まさか、ビビったわけでもないよね？君なら見慣れているはずだ」

「ああ、掃除ロボットぐらいなら見かけるがこんなロボットは学園都市には――」

「何をいってるんだい？それは『ただの死体』だよ」

「・・・・・・・は？」

上条はもう一度そこに崩れ落ちた“それ”を確認した。
金槌で打った針金のように薄く、折れている。
その関節からは黒いオイルのようなもの・・・ではなく、『血』流れている。
臭いもオイルなどのきつい臭い・・・ではなく、『死体の臭い』だ。
間違いない。あれはロボットなどではなく鎧を着た『人間の死体』なのだ。
いや、『死体』ではない。上条がもう一度調べてみるとわずかに兜の隙間から
呼吸の音が聴こえた。

「おい、救急車呼ばなくていいのか？こいつまだ生きているけど」

近くにいた生徒に尋ねたが、まるで聴こえてないかのように無視された。

「・・・・・・・・・・・・・・・そげぶ!!」

不思議に思い、その生徒を殴ってみるがまったく反応がなかった。
いや、むしろその生徒をさわれなかった。拳を肌に食い込ませることすらなかった。

「ここはコインの表と裏だ。何も知らない表の生徒達は侵入者に気づくこともないし、
侵入者が表の住人に干渉することもできない」

そういうとステイルは煙草をビルの柱に押し付けた。だが、ビルの柱には煤一つもつかなかった。

「まずいね。このビル自体がコインの表のらしい。もう、僕達は自分の力でドアを開けられないし、出入り口の
扉も同じく開けられない。閉じ込められたね」

「ところで、こいつどうする?生きてるっちゃあ生きてるが、肺は肋骨に突き破られて、内臓はほぼ潰れて、動脈もぐっちゃぐちゃだ。どうする、止めを刺してやるのが優しさか?」

上条は足を上げ、鎧の顔面辺りを蹴ろうとしている。壁に押し付けて頭を“鎧ごと”潰すつもりのようだ。

「そうだね。だが、死人を送る役目は神父(ボク)の役目だ。君のじゃない。」

ステイルはそういうと死にかけの死体の前に屈みこみ、英語で何かを言った。
すると、その死にかけの死体はよろよろと右手を差し出し、英語で何かを言った。
そして、その右手は床を打った。ゴンッという音がロビーに鳴り響いた。

「――――――――――――――――――――――――――――――

行くよ――――――――――――――――――――」

そういったステイルは何か怒っていた、アウレオルスにでも、『三沢塾』にでもなく。

「戦う理由が増えた・・・・・

それと・・・上条当麻・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ん？」

「僕は・・・君を・・・・・・・・・」

「―許さない―」

神父（後書き）

上条さんマジ悪条さん
というわけでやっと上条（悪）がでました。
いや、でも少し違うかな？やっぱもっときつくしたほうが
悪条さんっぽくなるだろうか？

そっくりさん《ダミー》

「あー、疲れる」

「それはそうだろ。建物に干渉できないんだから足に来る
衝撃は通常以上に強い。だから、筋肉に通常以上の負担がかかる

「なあ、エレベーターって使えないのかな？」

「使えるわけがないだろう？ボタンを押してドアを開けることもで
きないし、
誰かが乗るときに入ったとして大勢の生徒が入ってきたらどうする？
そうなったらまず圧死は免れないよ」

「・・・・。そうえいば携帯ってつながるのかな？」

そういって上条は携帯電話を取り出して自分の部屋にかけた

(下手したら死ぬかもしれないのに・・・呑気なものだ)

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ステイルと上条はとある階に来ていた。
超音波と赤外線で調べて外から測定した実寸と食い違いがある。
つまり、ここにはステイルの言っていた隠し部屋がある。

「ここらしいんだけど」

「ここらしいって言っても開かないのなら意味もないし、
第一ビルに干渉できないんだからそんなことをしてもわかるわけが

ないだろ」

「念のためだよ。いざとなればアウレオルス＝イザードを脅し、無理なら殺せばいい」

「殺したら意味ないだろ。結界の処理をできる程度の半殺しとか」

これは『戦場』の会話だが一般市民が顔色ひとつ変えずに殺すなどを口にしている。もはや異常者だ。

「それにしても、科学宗教がどんなものかと思ったけど、意外に大したことはないようだね」

「ああ、確かに危険度は低い。ずっと前に俺に勧誘してきた変な宗教の奴みたいに危険度は少ない。予備校だから“信者”は勝手に入ってくるし、生徒から“集金”することもない、変なテロを起こすわけではない・・・だがな」

「全員他人を蹴落とす話、ここで勉強しない奴は“クズ”、そんな話“しか”していない。貼ってあるポスターもまるで『幸福の手紙』だ。ここは間違いなく・・・・・・・・・科学宗教の溜まり場だ。おそらく、ここの塾ではレベル５ですら見下している」

上条は悪党だ。それは本人も自覚していること。しかしそれは優しさ故の悪である。当然このように自分達の勝手な考えに酔って弱者を痛めつける集団が嫌いである、もちろん自分が被害にあった

ことがある
ということもあるが、断言できる。この塾は？クズ”の溜まり場だ。

「行くぞ」

そういってそこから立ち去ろうとしたが、何かおかしい
コインの表にいるはずの住人がコインの裏の住人である
こちらを見ている。最初は大きな声で塾をボロクソに言ったからと
思ったが、
すぐにコインの表裏のことを思い出した。

「支天の翼は輝く光、輝く光は罪を暴く純白――」

一人がポツリと呟いた。それに続き二人目の声が重なり、さらに三
人目、四人目
と重なっていった。おそらく他の場所でもそれは行われている。
ビルには数千人の合唱で満たされていた。
生徒の眉間から青白い球が飛び出してきた。それが床に落ちると酸
性の液体で
何かを溶かしたように煙が上った。

「それじゃあ、それ頼んだよ」

ステイルの言葉で気がつき、顔を上げると目の前に何百の今の球体
があった。

「いや、これは逃げたほうがいいだろ・・・」

そう言ってステイルの後を追った

「ちょ・・・ちゃんと相手にしろよ！何のための盾なんだ！」

「やかましいっ！あんなのを退治するなら阿修羅マンと対峙したほうがマシだ！！」

「ならば！とっておきの秘策がある！」

「よし！使え！さっさと使え！」

「うん」

どん

「えっ」

気づいたら上条は階段を転げ落ちていた。

「ニヤニヤ」

上ではステイルがニヤニヤ笑っていた。
擬音付で・・・・

「じゃあ、がんばってね♪」

そういってステイルはどこかへ行った
球体達はステイルを追わずに何故か上条のほうへ突っ込んできた

その時、上条はステイルの言ったことを思い出した

『僕は魔術を使わない限りばれることはないが、
君は建物の魔力を消しゴムみたいに消しているからすぐバれる』

「やられた！」

ステイルの策（笑）を悔やんでいるうちに例の青白い球体は迫ってきていた。
上条はそれに気づき下に逃げようとするが階段の下にはすでに三沢塾の生徒がいた

（いや、こいつらは今は俺たちと同じコインの裏の住人だ）

上条は右手を握り生徒に突っ込もうとしようとしたとき、
突如少女の頬が吹っ飛び、指も吹っ飛び、鼻も吹っ飛んだ

（超能力者に魔術は“使えない”か）

以前インデックスに教えられたこと
そもそも上条には超能力はおろか、魔術も使えない

「はっ！自分の体がやばいってわかってんのに“それ”を続けるたぁ大した信仰心だな！インチキ宗教信者らしく無様に散れ！」

上条がそういった瞬間、その生徒の眉間は弾けとんだ
誰が見ても死んだようにしか見えない

「さてと、面白いもんも見れたし、さっさと吸血殺し《ディープブラッド》こと

姫神秋沙を見つけるか」

しかし、球体達を見てみると球体達は上条を飲み込もうとせずにその場で止まっていた
やがて動き出すと球体は床に落ち、そのまま消えていった

カツン

足音がした。上条はそれを誰か確かめるために階段の踊り場から確認した
別に錬金術師（てき）か姫神（みかた）どっちでもよかった
錬金術師（てき）なら脅して吐かせればいいし、
姫神（みかた）なら探す手間が省ける
階段下の通路に立っていたのは吸血殺し《みかた》だった
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「ちょっとベルト貸して」

「あ？ああ」

姫神は上条のベルトを使い、ひどい出血をしている箇所を止血している

「いいのか？お前を監禁していた奴らの仲間なんだぞ？」
「この人は何も知らずに『三沢塾』に入って
知らない間にこんなに染められただけ。この人自体は悪くない」

「それでも、こいつの罪は消えない。上条さん的にはこのまま
ほっといて死ぬまで観察してもよかったんだけどね。」

「・・・・・・・・・・。とりあえず終わった。あとは整形手術
をすれば傷口はわからない。
お尻の皮をもってくればいい」

「ならこいつのケツの皮剥いじまおうか?」

「だから。この人自体は悪くないし。あなたに何かしたわけでもな
い」

「ただ宗教団体には恨みがあるだけだ・・・それよりさっきの処置
は見事だなお医者さん?」

「医者じゃなくて。私は魔法使い」

「どの辺が?」「この辺が・・・」

スタンガンが内蔵された警棒

「サンダガしか使えねえじゃん」

「これがブーム」

「あっそ。だがもういいだろ?帰るぞ」

「何で?」

「お前に貸した１００円の十倍をまだ返してもらってない

ここにはお前の財布はなさそうだから・・・ん？」

ずるずる

何かを引きずるような音がする
その不快な音源は憎悪をこめた何かをわめいている

「少年、なぜここに？お前も侵入者か？お前も奴の仲間か？」

「仲間っつうか、犬猿の仲だ。それとお前の持っているそれって」

「これか？ただの『材料』だ！」

「あんまいいの作れないじゃない？」

「だから困っている！」

「かわいそう」

突如隣にいた姫神が会話に割り込んできた
姫神はそのまま無表情のまま続けた
「気づかなければ本物でいられたのに・・・」

「それをいうなあぁぁぁ――――うがっ！！」

アウレオルスらしき人物の頭が誰かに踏みつけられた

「やかましい！耳障りだ！とりあえずお前がボスなんだろ？
あとはお前を殺せばこいつも連れ出せるし、俺も帰れる
だからさっさと死ね」

メキッメキッパキッメキッ

今にもアウレオルスらしき人物の頭は砕けそうだ
だが、そのとき彼の頭が解放された何がおきたかわからなかったが
左足にくる激痛で理解した

グチュ　グチュ　べきッ　バキッ　グチャ

「ア、があぁっぁぁが、あがあっがっがああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ」

左足の傷口に挿してある棒が強い力で押し込まれいている
肉やら血管やらが混じった音や、棒を押し込んで骨が折れた音がす
るが
彼にそれは聴こえない
しばらくそれが続いた後開放された。しかし、棒はすでに内臓を貫
いている

「こっちはよお・・・わけもわかんねえ青白い球におわれるわ――
―」

「ア、あ、あああがぎゃ、あああああっだがああああああああがああウ

あああああああああ、、あ、あああうあ、、あ」

こんどは左腕に挿された棒を押し込まれている
棒が彼の肩から突き出したところで上条は押し込みを止めた

「お前の張った結界とやらで疲れるわ――」

グりゅ　ぐちゅぐじゅ　ぐり　ぐちょ

「ゲフっ！ウゲっ！！おえっ！あ〝あ〝あ〝あああああ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝」

左足から僅かに突き出した棒を弄り、腹の中をかき回しながら言った

「俺がここで不幸な目にあってるのも全部テメェのせいだ！！」

左足の棒から手を離し、上条は右足をアウレオルスらしき人物
の頭の上に置いた

「い、生　、ぎ　だい　たす、」

アウレオルスらしき人物はなきながら言った。今、自分を殺そうとしている人物が
少しでもまともだったなら短い時間しか生きられないとわかっていても
彼を逃がしただろう。だが、目の前の人物は冷徹に言い放った

「それはプリキュアにでも言うんだな！！」

グシャッ！！

何かが潰れる音が通路に響いた

そっくりさん《ダミー》（後書き）

さすが悪条さん！俺たちにできないことを平然とやってのける！
そこに痺れるゥ！憧れるゥ！
というわけで今回も悪条さんがやってくれました
少しやりすぎかな？元ネタと悪のベクトルが違うかな？
まあいいか

錬金術師（前書き）

最近詐欺条さんの小説を見たんですが、すごすぎます・・・！
文章も上手い、話も上手い、原作と平行線で沿った話上手すぎます！
俺もあーゆー風になりたいです。
というわけで書きます。三沢塾編ラストスタート！！

「さて、魔王も倒したことだし、さっさとお姫様を外に連れ出しますか」

「この人・・・・生きたいって言ってた。でも殺した。何で？」

「別に、ただの八つ当たりだ」

先程、上条はアウレオルスを殺した。殺したのは別に彼のせいで苦労したからでもなく、
ただムカついたから・・・・

ふと上条は疑問に思った

「なあ、さっきアイツにまるでアイツが偽者みたいなことといったけどアイツ偽者なのか？」

「そう。偽者。本物は鍼を常備しているし。攻撃ももっと多彩」

「当然。私もこのとおり生きている。だから貴様らは塾（ここ）からでられない」

突如かけられたどこか聞き覚えがあるがどこか違う言葉で納得した。

「なるほど、つまりあれか？さっき俺が殺ったのもまた、お前に踊らされた犠牲者の一人に過ぎないってことか」

上条はそれに余裕を持って答えた

「当然、彼女は必要だ。回収させてもらう」

「悪いが姫神（そいつ）を連れ出すことに決めた。断らせてもらう」

上条はアウレオルスの股間を足で蹴り上げようとしたが

・・・・・・

「私に触れるな」

振り上げた足はまるで強化ガラスにあたったように弾かれた

「っ！何が！？」

わけが解らない。アウレオルスは何かをする仕草を見せなかったし、何かを用意しているようにも見えなかった

用意しているものといえば姫神のいってたように鍼をもっているくらいだ

今度は右手で殴りかかってみた

しかし、

（右手（げんそうごろし）が弾かれた！？異能の壁じゃないのか！？）

右手(イマジンブレイカー)は蹴りと同じように弾かれた

何があった？幻想殺しの故障？これは科学？それともステイルの言
っていた・・・いや、アレは
不可能なはずだ

上条が混乱しているとアウレオルスは鍼を取り出し、首に突き刺し
て言った

「案ずるな殺しはしない。ただ――――」
・・・・・・・・・・・・

「ここであったことは忘れろ」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜

「ここは？」

公園のベンチのようだ

「何してたんだっけ・・・？家に帰って、インなんとかが三毛猫(スフィンクス)を
飼うのを許可して・・・それで
ダメだ、思い出せない。なんか頭もすっきりしねえ」

（頭に煙草の煙が入っているような気分でガンガンする。）

頭を叩いてみた。

パキィィン

「あっそういえば千円返してもらってねえ」

そういって上条は三沢塾へ走っていった
途中何かがおかしかった
人が一人もいなかった

（もしかして人払いのルーンってやつか？何のために？まさかステイルの奴、錬金術師の髪を馬鹿にして全裸で放り出されるなんて嫌がらせでも受けたのか？）

そう考えていると三沢塾が見えてきた
だが、建物の周りをへんてこりんな鎧を着た連中が取り囲んでいた
おそらくエレベータ付近に転がっていたローマ正教の奴の仲間だろうと上条は予想した

「あんたらローマ正教やなんちゃらか？」

「そうだ。私はローマ正教一三騎士団――「自己紹介はいいから用件を教えろ」

「・・・・・・・・・・これからグレゴリオの聖歌隊にて聖呪爆撃を行う
せっかく拾った寿命を縮めたくなければ即刻退避せよ」

「あーそうなの？じゃあがんばってねって言いたいんだけど１時間いや３０分ほどまってくんねかな？中に

友達がいてさビルに入ってから死亡フラグ建てまくってるから心配でさ」

「断る！攻撃を開始する！」

「待ーて待て待て！今のは違う見栄張っただけだ！実はこの中にいる奴の借金を回収しに来たんだ
あれがないと上条さんの明日からの生活に影響が」

「知らん！攻撃を開始する！」

そう言って全身鎧の奴は合図のようなものをした瞬間
まるで映画や漫画、ゲームのように紅い槍のような物が三沢塾を貫いた

「・・・・これがお前らの正義か？」

「そうだ。正しき目的のためならば手段は正当化される。流れる血は明日の礎と思え」

建物に亀裂が入っていくと人がそこからばらばらとこぼれ落ちた。
まるで蟻の巣を掘り返したようだ。しかし、すぐに変化に気づいたビルの周りにあった粉塵がビルに吸い込まれていく
周囲を見てみると吹き飛んだ瓦礫がビルの傷口に吸い込まれていくあっという間にビルが修復された

（『三沢塾』だけでなく、周囲のビルまで修復されているあたり、これはただ『修復されている』んじゃなく
『巻き戻されている』んだろうな・・・ならさっきの攻撃はどうなる？）

横ではそれを悟った鎧が膝をついている

「ま。俺の幻想殺しを打ち破ったんだから当然だな。俺は危ないからお前れの言うとおりとっとと退避させてもらうぜ。」

鎧が上条のほうを向いた

「多分俺の不幸に巻き込まれたんだろうなあんたら・・・まあ、疫病神を怒らせちまった身から出た錆ということでね」

そういって『三沢塾』のほうへ走り去った

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「にしても不思議だな。さっき吹き飛ばされた奴どころか、俺の目の前で破裂した奴まで生きている」

「やあ、君がいるってことはここは日本ってことかい？しかし、何故日本に？」

階段を何階かあがったときに不意に声をかけられた

「いいぜ！お前が俺にした仕打ちを忘れたと言うなら！」

「へ？」

「まずはその幻想を！───」

「くっ！魔女狩(イノケン)───」「ぶち殺す！！！！」

祝☆記憶復活記念！

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～

北東の最上階にアウレオルス＝イザードは佇んでいた

彼の背後には机があり、そこには一人の少女が眠っていた

「私は一人の少女を助けたかった」

「少々訳あってイギリス清教と内密で接触していた。そこで一人の少女とであった

そう、このＩｎｄｅｘ－Ｌｉｂｒｏｒｕｍ－Ｐｒｏｈｉｂｉｔｏｒｕｍ─禁書目録(インデックス)だ」

「一目見たときからわかった。私はこの娘だけは救えないと

常人では発狂しかねない１０万３千冊の魔道書の猛毒に侵され、猛毒(それ)を抜くためには一年ごとに記憶を消去しなければならない、そんな過酷な荷物(うんめい)を背負わされても他人のために微笑むことができる少女を救いたかった。だから私は魔道書を書き続けた

そして、私はある日あることを思いついた。彼女を吸血鬼にすれば彼女は死なないと」

「なるほど、君の目的は黄金練成《アルス＝マグナ》の完成ではなく、
禁書目録（あのこ）を救うために吸血殺（ディープブラッド）をさらって吸血鬼をおびき寄せようとした」

「なるほど・・・今年からのパートナーが俺で」

「二年前が僕そして、三年前は彼で役割は『教師』だった」

「ならば何故私の邪魔をする？」

「そんな方法では彼女を救えない。失敗するかもしれない手術に彼女を託すことはできない」

ステイルは横にいる上条を見て言った

「ほら、言ってやれよ。何故あの手術が成功しないのか、あの手術にどんな欠陥があるのかをね」

アウレオルスは上条を見た。そして聞いた

「例えばお前、もう治った病気を取り除く手術をしてどんな意味がある？」

「？・・・どういうことだ？」

「その飯の意味さ。すでに救われたんだよ・・・彼女は。この代のパートナーにね・・・」

「そん、な、馬鹿な、」

「ああ信じられないね。僕だって信じたくないよ？でも事実だ。君が三年かけてもできなかったことを彼は三日でやった」

「そんな、いったいいかなる手段で・・・」

「それはちょっと言えないけど、彼の能力は幻想殺し《イマジンブレイカー》人の手に余る能力だ」

「待て！それでは・・・」

「わざわざ全世界を敵に回して彼女を救うことを三年間考えていたけど無駄骨だったね・・・お疲れ様」

それを聞いた途端、彼の何かが崩れた

「は、はは、は、ははは、はははははは、ははは」

そんな彼をみてステイルはポツリと呟いた

「壊れたね」

上条が後に続いて言った

「壊れたな」

上条がそういった瞬間、突如アウレオルスが笑いを止め、彼らを睨み付けた

「倒れ伏せ！侵入者ども！！」

上条は彼がそう言う直前にゾクッと何かを感じ彼がそれを言った瞬間に右手で体に触れた

バキン

「おっと！そうはさせるか！」

まっすぐアウレオルスの元へ突っ走っていき、

「体を壊せ」

彼がそう言うと

「うっ！」

胃の中のものを吐き出しそうになるがすぐに胃の辺りを抑えると嘘のように吐き気が消えた

「倒れ伏せろ」

しかし、すぐに先程のことをやった

「はは、簡単にはコロさん！じっくり楽しませてもらう！」

そういって鍼を取り出した

「待って」

目の前に姫神が立ちふさがった。しかし、目的を失った今彼女がどうなろうとかまわない

「邪魔だ。死ね」

その瞬間姫神秋沙が崩れた
それには死因がなく、“ただ死んだ”
上条はとっさにそれを抱えると
姫神は生き返った彼女の背中を触っている右手でわかった

「アルス＝マグナを打ち消した？馬鹿な！！」

上条は深いため息をついた

「はぁーぁ。一瞬でもお前を不憫だと思った俺が馬鹿だったよ・・・
お前は
最早どうしようもないアホだ」

上条は右手のパキパキ鳴らしながら言った

「いいよ。お前がインデックスと笑い合っている理想を今も見てるんだって言うなら・・・」

そして睨み付けながら

「その理想(げんそう)をぶっ殺す！」

言った瞬間駆け出した

「窒息死」

アウレオルスが言った瞬間上条は自分の喉に触れた

パキン

「きかねえよ！」

「圧死」

突如頭上に車が現れ、上条がそれに触れた途端、

パンッ

車は風船がはじけるように消えた

「感電死」

呟いた瞬間、上条の周りを電気が取り囲んだ

「この攻撃には慣れてるんでね！！」

バギン

そう言って周囲を取り囲んだ電気の一部を触るとまるでアメガラスを割ったように電気は粉々に崩れた

「おいおいどうした？もっとカオスな状況を作り出されるかと思ったけど」

「ふん、その「恐いんだろ？」む？」

「お前、その能力（ちから）が恐いんだろ？」

「だからどうした？ただそこまでする必要などないだけだ
さて、貴様のその右手は黄金練成《アルス＝マグナ》を打ち消すらしい」

「なら右手で触れないものだとしたら？
銃をこの手に。弾丸は魔弾。用途は射出。数は一つで十二分」

アウレオルスは己の首筋に鍼を刺した

「人間の動体視力を超える速度にて、射出を開始」

バンッ

パキン

「いかにして人間の動体視力を超える魔弾に触れた」

「別に、ただお前が銃を向けた延長線上に右手をかざしただけだ」

首に突き立てた鍼を投げ捨て

「ならば。先の手順を量産。一〇の暗器銃にて連続射出の用意」

「まずい」

「準備は万端」

魔弾の軌道を予知できるといっても人間の動体視力を超える速さを
十個も触れるわけがない

「一〇の暗器銃。同時射出を開始せよ」

その瞬間後ろへ吹き飛ばされた

「がっ！・・・は！・・・」

「鍼だ！上条当麻！奴の弱点は――――」

「宙を舞えそして内から弾けよ魔術師」

ぼん

瞬間、血、肉、骨、内臓、筋肉、全て撒き散らされドーム状に広がっていった
人間プラネタリウムの完成である
しかし、彼は生きていた。心臓がいまだにびくびく動いているのが証拠だ

「まさに、芸術だな」

「さて、続きをしよう。沈め少年」

アウレオルスはすでに鍼を首につき立て、呟いた
その瞬間、上条の足元が水あめのように液状化した
上条はそれに思わず触れた

パキン

「しまった！」

液状化した床は右手に触れた途端、もとの床にもどったが
沈んだ足はそのまま固まった。幻想殺し《イマジンブレイカー》が仇となった。幸い靴下まで沈んだために靴下を脱げば抜け出せる
しかし、アウレオルスはそれを許さず次の鍼を首に突き立て、

「内容を変更。暗器銃による射撃を中止。刀身をもって外的の排除の用意。
その刀身を旋回射出せよ」

ブシッ

ボトリ

（なるほど、そういうことか）

「さて、あとは「あははははあははーあははっははははははははーあはははは」なっ！」

上条が突如笑い出した

「ははっはあは一あはははははははははっははは」

アウレオルスは一瞬気が狂ったと思ったが違った
あれは気が狂った笑いではなく、勝利を確信した笑い、つまり『正常』だ

「先の手順を量産。用途は乱射。十の暗器銃にて、刀身を持って外的の排除の用意。
全ての刀身を旋回射出せよ」

ガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキンガキン

しかし、一つも上条にあたることはなかった

射出した刀身はすべてあらぬ方向に飛んでいき、壁に刺さった

（馬鹿な！どうやって反らした！？）

「くっ！断頭の刃を無数に配置。速やかにその体を解体せよ」

少年の頭上に無数のギロチンが出現した

一つにつき重さは１００キロはありそうだ

（大丈夫だ！あれは避けられない！反らされない！確かに頭上に落ちるように命じた！

そう！命じた！そう命じた！）

ギロチンが少年の頭上に落ちたとき、ギロチンは全て一つ残らず粉々に砕け散った

錬金術師は鍼を取り出そうとするが、全て床にばらけてしまった

（しまった！あれがなければ――なければ？っ！やめろ！考えるな！）

考えが止まろうとも目の前に迫る少年は止まらない

「なァ～」

「ひぃっ」

「まさかお前、俺の幻想殺しぶった斬ったぐらいで俺を止められる

とでも？」

（まさか、我が黄金練成《アルス＝マグナ》が効力を失うなど・・・！いや、待て！考えるな！）

その時、上条の右腕の切断面から透明な何かが噴出してきた
その透明な何かが形作ったのは腕などではなく、

――――――――――

「なるほど、そういうことか・・・」

（これは私の黄金練成《アルス＝マグナ》でできたものでない。断言できる）

右手から生えてるそれは大きく口を開け

（むしろそのままで戦えばよかった・・・あれはただ異能を消す能力（ちから）などではなく）

その顎が錬金術師の頭に向かい

グシャ

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「あんたに腕くっつけてもらうのはこれで二度目だな」

「それにしても毎度毎度綺麗にくっつくものだねー君ってもしかしてファンタジー世界から来たの？」

「くっつけたのお前だろ？」

「それはそうと君よくここに来るけどもしかしてナース属性？」

「前にここに来たのはお前が呼び出したからだろうが！　つーかなんでナースに合うために利き腕ぶった斬らなきゃなんねぇんだよ」

「なんだやっぱり同士じゃないのか・・・まあ、結構な付き合いだからうすうすわかってたけどね」

そう言い残しカエル顔の医者は部屋を後にした。それに入れ替りに誰かが入ってきた

「君と馴れ合うつもりはないけど、一応来たよ」

「Ｎｏ　ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ」

「黙れ。へたくそな英語使うな。それにしても右腕（きりふだ）ぶった斬られた極限状態であんなこと思いつくなんて君は本当にどうかしてるね」

「我ながらハリウッド俳優になれるんじゃないかと思うよ」

「だが、一つ気になることがある。いくら動揺したとしてもすぐに動揺の効果が現れるとは思えない、何故刀身が反れたかだ」

「ああ、それならちょろ～っと心あたりがあるな」

「ふーん。それは聞かないでおこう・・・」

「いいのか？」

「別に聞いても無意味だしね」

「つまんねえなー」

「そんなことより君に伝えることがある。君の罪についてだ」

「罪？」

「アウレオルス＝イザードは死んだ」

「死んだ？」

「そう。胸から上がなくなってたんだよ
しかも傷口はまるでマネキンを切ってそこに体の中身の写真を貼ったように
血が一滴も垂れてないんだ・・・君は腕をぶった斬られて、僕は人肉プラネタリウム、
そして彼は不気味なマネキン死体・・・吐き気がしそうだ。僕はもう帰るよ
気分が悪くなった」

そういってステイルは病室から退室した
そしてまた入れ替わりで誰かが入ってきた

「よー上条当麻ー！元気かー！」

「お前は土御門んとこの・・・舞夏？」

「覚えててくれてうれしーぞー！そんな上条当麻にプレゼントだー」

「これって・・・ゲコ太っつったっけ？なんでこんなもん・・・」

「お前が持ってればお前の何かの役に立つだろうとなー」

「ふーん、まあとりあえずもらっとくわ」

「おう！それじゃあこれから用事あるからまたなー！」

土御門舞夏退出、御坂美琴入室

「おっす！なーんだ・・・生きてたのか・・・残念」

「今日は変な奴からの見舞いが多いな・・・」

「ほれ、見舞いの花束」

「なんで菊の花なんだよ・・・死ねってか？俺に死ねってか？まあいい
それはそうと、あの時のあの妙な現象お前だろ？」

「え？なーんのことかなー？」

「御坂・・・ここに学園都市製のライターとゲコ太人形がある・・・」

「はい、やりました。何時から気づいてたの？」

「腕ぶった斬られてすぐだ。あの刀身の中にかすかに青白い“線”が見えた、おそらくお前が磁力で飛ばしたんだろ？それにアイツが鍼を落とすとき、アイツは確かに一本鍼を掴んでいた。だが他の鍼がその鍼にくっつくように鍼がばらけた。お前が磁力でまとめたんだろ？」

「ご名答・・・でも感謝はしてよね？あれがなかったらあんた死んでたわよ？」

「それじゃあこのゲコ太あげるよ」

「ん♪確かに！じゃあねー」

そしてまた誰かが入れ替わりに入ってきた

「またかよ」

「とーま！とーま！さっき売店でマスクメロン味のポテトチップが売ってたんだよ」

「んな得体の知れないモンで目を輝かすなよ・・・」

「でも、意外に美味しかったですよ？と美静はあの時の絶望を分け与えようします」

「もう、突っ込みきれんわ、その後尾・・・」

「そういえばとうま、ひめがみあいさの件なんだけど・・・色々話し合った結果
『教会』にかくまうことになったんだよ」

「どーせ『歩く教会』とか言い出すんだろ？わかってんだよ」

「むーせっかく話（ストーリー）を考えてきたのに」

「ノリの悪いご主人様ですねと美静は落胆します」

「ね？みーちゃん！」「ね？インちゃん！」

「お前らがいきピッタリなのはわかったからっさと家帰れ上条さんはもう疲れた。寝たい」

「「はーい（と美静は渋々帰ろうとします）」」

ガララッ

「ふうー、厄介払いもできたししばらくのんびり寝・・・る・・と・・し・・なんでいんだよ」

入り口には戸籍上ではたったいま帰ったと思った妹の上条美静が立っていた

「うへへ・・・やっと二人きりになれましたねと美静は舌嘗めずりをします」

「おい」

「ご主人タマ〜！！」

見事なルパンダイブだ
それよりも現実でルパンダイブができるのが驚きだ
上条はこのわずか０．５秒の中で考えた

「テメェの腹は読めてんだよ！！」

ドゴッ

美静の見事なボディブローがきまった。

「グフッフッ！これが・・・・ご主人様の・・・愛と美静ｈ「俺の愛にこんなサディスティックな愛があってたまるかーッ！！」

吸血殺し《ディープブラッド》編

完

錬金術師（後書き）

美静「やれやれ通報されたか、見事な推理だったよ・・・当麻さん・・」

というわけで三沢塾編が終了したわけですが
次は8月31日の話ですが、金欠気味なんで
番外編を書かせてもらいます
随分謎が残りましたね。質問があったら感想にてどうぞ

番外編：能なしカラス爪をトグ（前書き）

番外編を書く前に本編の謎を解明していきたいと思います。
吸血殺し《ディープブラッド》編です。
番外編では上条さんが幻想御手（レベルアッパー）に
軽くかかわる話です。関わるといっても、被害者（加害者）との戦
闘だけですが・・・・・
ちなみにこの話を書いたのは、元ネタで美琴が上条さんを追いかけ
ているうちにＢ－ｒａｎｋフラグが立ったというのがちょっと納得
できないので書きました。ただ追いかけているだけじゃＣ－ｒａｎ
ｋフラグすら立たなそうだからね！

番外編：能なしカラス爪をトグ

本編でアウレオルス＝イザードが死亡したことについて、
原作では記憶を失いその後にステイルが顔を変えて
開放したが、この物語では死亡している。
死亡したのは、アウレオルスが気づいてはいけないものに気づいて
しまったから
この物語の上条は原作よりも何段も成長しているため、あのときに
幻想殺し
の正体のようなものがでた。それをアウレオルスが気づかないはず
もなく、
また歴史が狂ってしまうために運命修正のために殺された。

それでは本編をどうぞ

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「お姉さま、グラビドンってご存知ですか？」

「グラビドンって・・・重力子のことだっけ？」

最近発生している爆破事件の話をしていたら黒子がそう聴いてきた

「どのケースも爆発の直前に急激な重力子の加速が衛星によって観
測されていましたの。アルミを起点に重力子の爆発的な加速させ、
一気に周囲に撒き散らす。つまり“アルミ”を爆弾に変えていたと
いうことですわ」

黒子が持っていたアルミ缶を指差しながら言った

〜〜

「何であんたがここに？」

「いちゃ悪いか？」

「お兄ちゃーん！あ！常盤台のお姉ちゃんも！」

「って、『お兄ちゃん』ってあんた妹いたの！？」

「違ぇよ。俺はこのガキが洋服店探しているって、それで行き方教えてやったら一人じゃ行けないって言ってよ。無理やり案内させられたんだよ」

「ははーん？スキルアウトをボコボコにしてたあんたでも小さい女の子にはかなわないってわけ？」

「なんだよそのニヤニヤは・・・・こういう自分から近寄ってくるマイペースな奴は苦手なんだよ」

「あんたも苦手な奴とかいるのねー」

「ねーねーお兄ちゃん！私あそこ行きたい！」

「あいよ」

「じゃーねー！お姉ちゃーん！またねー！」

「うん、バイバーイ・・・・・・・・・・・・はぁ・・・」

「どうしたんですか？」

「・・・・・なんでもない・・・」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～

『初春！今すぐそこから逃げなさい！』

「え？何でですか？」

『虚空爆破（グラビトン）事件の被害者は全員が風紀委員（ジャッジメント）だけですの！犯人の真のねらいは――――』

「おねえちゃーん！」

「ん？」

「めがねのお兄ちゃんがこれをじゃっじめんとのお姉ちゃんに渡してくれって！」

ぐしゃっと人形がへこんだ
それを見た初春はそれを女の子からひったくって投げ、女の子を庇うように抱いた

そして人形はどんどん縮まり、

そして爆発した。

パキィィィィィン

〜〜〜

くらい路地裏を一人の少年が歩いていた

「いいぞ・・・どんどん強い能力(ちから)を使いこなせるようになってきた・・・・！」

「もうすぐだ・・・！もう少し数をこなせば・・・！！あんな奴ら全員まとめて吹き飛―――「ばせんのか？テメェみてぇなマヌケに・・・」

「え？・・・！？お前！あの時入っていった奴！！吹き飛ばされたはずじゃ・・・」

「あれれー？テメェ程度の奴がこの俺を殺せるとでも思ってるのか？ダメだダメだぁそんな妄想(げんそう)はぶっ殺さなきゃなぁ？」

「お、おい！待て！動くな！動くとこいつを爆発させるぞ！」

少年はそう言って空き缶をとりだした。上条はおそらくそれは爆弾

だろうと予想した
それを見た上条はガンッ！と横にあるゴミ箱を蹴った
その音を聴いた少年は思わずビビッてしまった

「はい！動いたよ・・・上条さん、今動いたよ」

「この野郎！！」

少年が逆上し、空缶を放り投げた
少年が投げた空缶はすぐに縮み、一点へ収束しそれで・・・

パキィィィン

それを上条が掴んだ途端、空缶は一瞬で膨らみ、
空缶は“ただの”空缶にもどった

「どういうことだ・・・最高出力だったはず！！お前・・・その能力・・・
いったい何なんだ！！！！」

メガネの少年がヒステリックに叫ぶと上条はニヤッと笑い答えた

「幻想殺だ。」

上条は拳を震えるほど強く握り、手首が反対側からでも見えるくらい振りかぶって

「以後よろしく！！」

グシャ

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「うわ～こいつはひどいじゃん。すぐに病院へ搬送したほうがいいじゃん」

「それにしても・・・一体だれが？」

「さあね、わかったことは・・・こいつは世界一怒らせてはならない奴を怒らせたってことは確かじゃん」

「その人を知ってるんですか？」

「そんなのわかるわけないじゃん」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「またお前か・・・」

「いいの？名乗り出なくて・・・名乗り出ればあんた英雄（ヒーロー）よ？」

「その英雄（ヒーロー）を悪人呼ばわりしてた奴はどこのどいつだよ？」

そういってアイツは去っていった

ムカつく・・・

（幻想御手（レベルアッパー）・・・こんなの・・・無い方がいいよね？）

その時、

「幻想御手（レベルアッパー）譲ってくれるんじゃなかったのか！！？」

上から今私が消そうとしたものの単語が聞こえてきた

「さっき値上がりしちゃってさー、もう十万もってきてくれよ」

「だったら！金を返してくれよ！！」

ドゴッ

スキルアウトが男の腹を蹴るのを見た

「ウダウダ言ってねえで金もってこいよ！」

おそらく男がスキルアウトに騙されたのだろう

男はまだリンチされている

「なあ、お前らのレベルがどれほど上がったのかそいつで試してみるか？」

リーダー格のような男が言った。あの幻想御手（レベルアッパー）は本物だろう

とりあえず風紀委員（ジャッジメント）か警備員（アンチスキル）に・・・

充電切れ

こんな時に・・・！

でも・・・仕方ないよね？こっちは一人、あっちは三人。おまけに私は中学生・・・

そうだよね？

「やめなさいよ！その人怪我してるじゃない！」

何をしているんだろう？こいつらはさっきレベルアッパーを使ったようなことを言っていたのに・・・

ガン

「今、なんつった？」

ガシッ

リーダー格の男が汚らしい手で私の頭を鷲掴みにした

「ガキが生意気ゆーじゃねえか？何の能力（ちから）もねえくせに・・・
ごちゃごちゃ指図する権利はねえだろ」

そうだ。
私は無能力者（レベルゼロ）
向こうは幻想御手（レベルアッパー）を使ったとはいえ、能力者
所詮、無能力者＜能力者。この公式は誰かが証明しなくとも証明されている・・・

「おい！なに見てやがる！見せモンじゃねえぞ！」

その声に気づいて男の視線のあとを追った
そこには・・・

「別に、ただ面白そうだから見物してただけですよ。さっさと消えますよ」

私と同じただの腑抜けがいた

「はっ！だよなー・・・テメエ見てえなガキが俺たち三人を相手にできるわけがねえよなぁ・・・
それよりよぉ、お前幻想御手（レベルアッパー）って知ってっか？知ってるよなー？」

「は？」

「今なら１０万で売ってやるよ！どうだ？」

「十万？その値段じゃあその幻想御手とやらに加えて二十万円よこせよ」

「おいおい、まさかお前信じてねえな？」

「いーや信じてるよ。つーか知ってる。一回それを使った奴をボコボコにしたからな
それに俺がそれを使ったところでレベルは上がらねえしな・・・」

「はあ？なに言ってんだお前？わけわかんねえー」

「テメェのその市松模様みたいな歯のほうがわけわかんねえよ」

「「「「ぶっ！」」」」

言った男と言われた男以外その場にいる全員が噴出した
言われた男は漫画みたいに歯をギリギリしている

「てめぇ！おい！お前らこいつで試してやれ！！！」

「じゃあ俺が先にやるぜ」

ブワッ

念動力（テレキネシス）か
すごい・・・鉄柱があんなに浮かび上がってる
鉄柱はその人に向かって一直線に飛んでいく
でも、その人は表情一つ変えずにそれを潜り抜けるように避けた

「おいおい俺の念動力(テレキネシス)をなめてもらっちゃあこまるぜ」

突然飛んでいた数本の鉄柱が花のように開いたかと思うと
今度はその人を取り囲むように浮かんでいる
無理だ。あんなのを避けられるはずがない・・・
私はただ声も出せずにただその人に鉄柱が飛んでいくのを見ていた
しかし

ガキンッ

鉄と鉄がぶつかり合う音だけが響いた。最初はその人が鉄柱に貫かれたのかと思ったが
違かった。避けたのだ。手足、首、肩あらゆる部位を動かして最小限の動きで回避していた
すぐさま鉄柱は宙に浮かび、蛇のようにその人に突進したがその人はそれを横に回避したと思ったら
最後尾の鉄パイプを掴み、それを引き抜いた。
そうすると、ほかの鉄はまるで楔を抜いた梁のように崩れ落ちた
その人は鉄パイプを振りかぶってただ一言

「ついてねえよなー・・・お前ら・・・」

そう言ってパイプを勢いよく投げた

ガンッ

パイプはその念動力(テレキネシス)にあたらずに頬すれすれで通過したが

その後ろにいたもう一人の顔にクリーンヒットした

「まず一人目・・・いや二人目か」

重い鉄パイプが顔の横をスカッて正常でいられるはずがない
念動力（テレキネシス）は下半身の関節が全て外れたようにへたり込んだ
おまけに失禁している。完璧に戦意喪失したようで、もう襲ってくる気配はない

「おい、お前レベルはいくつだ？」

私も気になったことだ。幻想御手（レベルアッパー）を使った能力者二人を一蹴してしまうなんて
きっと高位能力者に違いない。でも、彼の言ったことは私の予想をはるかに裏切った

「ん？上条さんはただのレベル０だけど？」

そんな・・・念動力（テレキネシス）を打ち破ったのにレベル０！？

「嘘吐けよ。どうせ肉体強化かなんかだろ？」

「まあ、信じないのなら別にいいけ・・・どっ！」

その人は残るリーダー格の男にむかって突っ込んで行った
右手を振りかぶりそのまま男の顔に拳を叩き込んだ、はずだった

「消えた！？」

「違う！避けて」

気がついたら叫んでいた。
消えたはずの男はいつの間にかその人の横に移動していた
しかし、その人はまだ前を向いたままだ
男は容赦なくその人を蹴り上げようとした
今度こそやられた。そう思った矢先

ガッ

「ぐはっ！・・・一体何が！？」

男はいつの間にか仰向けに倒れていた
私にもわからなかった。でも、あの人を見てみると私は彼が何をしたのかがわかった
膝を上げていた。おそらく男が蹴り上げた足を逆に膝で蹴り上げ、男の蹴り上げの勢いを利用して転ばしたのだろう。
そうこう考えていると、その人は男を容赦なく踏みつけようとした。
しかし、降ろした足が踏んだのは地面だった
わざとじゃないようだ、本人も驚いている。リーダー格の男はそのまま体を回転させ、その人を転ばした
後頭部から真逆さまだ。死ぬ！そう思った瞬間その人は体を後ろに回転させ、見事着地した。いわゆる
バック宙だ

「へっ、アブねえアブねえ！それじゃあ今度はこっちのターンだ！」

男がそういうと男は右フックを繰り出した
でも、彼は避けるそぶりを見せなかった。その代わり左手を出し、

相手の右手の手首に当ててそれをいなした。

「トキ先生直伝!!なんてね」

そのまま右ストレートを顔に叩き込もうとしたが、やはり当たらなかった
そんな攻防がかれこれ2，3分ほど続いた。いや、主に彼が防御に回っている

「おいおい、どうした?避けてばっかじゃいつかバテて終わるぜ!!」

男が両手で彼を捕まえに来たが彼はそれを両手で掴み、巴投げの要領で後ろに投げた
彼はすぐに起き上がり、男にむかって思いっきり蹴り上げた

ガイーン

カランカラン

男はその蹴りを間一髪で避けた。その蹴りはそのまま男の後ろにあった水道を蹴り上げた
当然水道管ははずれ、水が勢い良く噴出し、すぐに大きな水溜りができた

「はあ、もう面倒だ。終わりにしようぜ」

一瞬戦闘放棄しようとしたと思ったが、彼が指をパキパキ鳴らしているあたり

これでキめるつもりのようだ

「終わりにする？さっきっから防御しかしてねえのにどうやってやるつもりだ
だいたい、お前は俺の能力（ちから）の正体に気づいてねえのによ」

「お前のソレはお前の周囲の光を捻じ曲げてテメエの位置をズラしてんだろ？
最初の一発の俺のストレートが妙な軌道を描いたときに気づいた」

「それがどうした？だからってどうすれば俺にお前の攻撃が当たるんだってんだ？」

「こうするのさ」

バギッ

「えっ？」

ここで初めて男が殴られた
男はそのまま胸ぐらを掴まれこう言われた

「市松君　つ　か　ま　え　た　」

ゴンッ

バキッ

まず頭突きを喰らい、掴まれていた胸倉を引かれ、強烈な右ストレートを喰らった

「ふぉ、ふぉふぁえへ、いっふぁいなふぃふぉしひゃがっふぁ（お前、一体何をしやがった）」

「水溜りだ」

水溜り？

さっき水道が壊れて大きな水溜りをつくったのを思い出した

でもそれがどうした？

「テメェの起こした水溜りの波紋からテメエの位置を特定した」

なるほど、そういうことか・・・（つまり、あの男の能力（ちから）の射程範囲外に発生している波紋の輪の中心点にいるから、そこから特定したんだ）

すごい・・・あんな闘いの中でそんなことを思いつくなんて・・・

「で、でふぉ、掴まれふぁとき、俺の隣に像をつくったはずだ！いったいどうふゃって！？」

「俺の右手は特別でね、異能の力なら問答無用で打ち消しちまう。幻想殺しだ。お見知りおきを・・・」

「ふぁんだよ・・・なんだんだよ・・！！お前、無能力者なんだろ？無能力者《レベル０》は能力者のいいなりだろうが！！能力者よ

りも弱いのに・・・!!!何でだよ!!」

「無能力者＜能力者なんて公式、誰が証明したってんだよ?ああ、いいぜ。お前がそんな固定概念に捕らわれているってんなら・・・まずはその概念(げんそう)をぶっ殺す!!」

グシャッ

なるほど、幻想御手(レベルアッパー)が意味ないっていうのはそういうことか・・・私は努力すれば能力(ちから)が開花するかもしれない。けど、彼の場合は能力を開花させるどころか種を打ち消してしまうから一生無能力者(レベルゼロ)・・・一生蔑まされるんだ

そんなことを考えているとツンツンのその人は男の懐からさっきリンチされていた人が渡したであろう十万円と幻想御手(レベルアッパー)が入ってるであろう音楽再生機を取り出して音楽再生機のほうを先程のリンチされていた男の人に投げた

「使えば?」

ツンツンの人はそれだけ言うとどこかへ立ち去ろうとしたハッとなり、私はその人を呼び止めた

「あの・・・さっきはありがとうございます」

「何だよ、まだいたのか?逃げてりゃいいものを・・・」

「また襲われても大丈夫なように・・・」

「あっそがんばれよ」

「あの・・・何かお礼をさせても――「俺はただ獲物に群がっているカラスが喧嘩ふっかけてきたからぶっ殺しただけだ。テメェらもさっさとどかねえと踏んづけちまうぞ」

彼は私を押しのけ、どこかへ行ってしまった
とりあえず、私は幻想御手（レベルアッパー）を受け取った男の人に聴いてみた

「それ・・・使うの？」

「いや・・・使わない・・・僕は今まで勘違いをしていた！そうだ！無能力者＜能力者なんて公式誰が証明したって言うんだ！――――」

怖い人だったけど・・・この人は救われた・・・もしかしたら

悪い人じゃないのかも、と思った
（悪い人じゃないのかも）

でも
（でも）

私はそこでのびているスキルアウトたちを見て思った

善い人でもないのかもしれない、と私はずっと前に読んだ漫画の台詞（セリフ）を思い浮かべた

（善い人でもないのかもしれない）

私はさっきの彼の言葉を思い出した

「無能力者＜能力者なんて公式誰が証明したってんだ?」

私の言訳(げんそう)を彼はぶち殺した

私は結局あのスキルアウトと何も変わらなかった、私があのリーダー格の男と一緒に幻想を殺されたのが証拠だ・・・

後日、御坂さんにこのことを話してみると、御坂さんは何かを知ってるようだったが結局教えてもらえなかった

番外編：能なしカラス爪をトグ（後書き）

スキルアウト「見事な推理だったよ・・・上条君・・でも一つだけ間違ってることがあるよ。僕もまた、大きい幻想御手（レベルアッパー）に踊らされただけの犠牲者の一人に過ぎないってことさ・・・」

というわけで番外編の幻想御手編終了っと！元ネタの人には悪いけどこうでもしないと美琴が悪条さんにフラグがたってもしっくりこないものでして・・・（汗）

想い人（前書き）

はい！８月３１日の話は～じま～るよ～！！

想い人

さて私、上条当麻はただいま全力疾走中です。はい。
何故走っているかって？それはですね・・・・

――――――――――――――――――――――――――――――

プルル　プルル

「はい、こちら上条です」

『こちらビリビリ！って私には御坂美琴っていう名前があるっていってるでしょうが！』

「お前が言ったんだろ！で？用件は？」

『あ！そうそう！今すぐ常盤台の寮の前に来て１０分以内に来たらホットドックおごってあげるから』

それを聞くや否や上条は受話器を放り投げて家を飛び出した

――――――――――――――――――――――――――――――

で、今に至る

「あと、３分！！」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

さて私、御坂美琴はただいま海原光貴に絶賛付きまとわれています。

（アイツはまだかな・・・あっ！来た！！）

「どる〜ん！待った〜？」

「てめぇにかかわってる暇はねぇ！」

そう言って美琴が呼び出したことを忘れたそれは走り過ぎ去っていこうとしたが、

「待てや！コノヤロー！！！」

美琴は走っているそれに飛びついた。美琴・・・お前ならアメフトやれるよ・・・

ドサッと音・・・・ではなく、ズゴォォォォっという音を立てながら御坂美琴に上条当麻は倒された

まだハッキリしない意識の中、二人は周囲の黄色い声や、真っ黒い声を聴いた

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「んで・・・お前はその海原って奴をあきらめさせるために俺に恋人の役をやってほしいと？」

「そうなのよ・・・理事長の孫って言うんだから蔑ろにはできないし・・・男の知り合いって他にアンタしかいないいからさ・・・って

いうか、恋人とのデート中に学校の宿題やるってどういうことよ?」

「俺、これ終わらなかったら留年するんだ・・・・・・・」

「いや、そんな死亡フラグ風に言わなくても・・・それに、その答え間違ってるし、つーか全部間違ってるし」

「えっ?まぢ?」

「ちょっと、貸してみて」

数分後

「ま、落ち込まない、落ち込まない!さ~て喉も渇いたし、ジュースでも買ってくるわ!」

「・・・・・勉強しよ」

ふと、顔を上げると先程の海原光貴がいた

「その、御坂さんとはどのような関係で?恋人ですか?あっ、そこの答えは3です」

「いや、恋人じゃねえ。ただお前に諦めてほしくて俺に恋人の役をやらせてる」

「やはりそうですか・・・あっ、そこは12です。問5と同じやり方です」

「にしても。他に男の知り合いがいないっつっても、何度も自分の顔を殴ったり、無理やり純潔を奪った男を選ぶあたり、どうやらアンタ本当に好かれてない様だな」

「ええ、自分はもともと学力は全然でして、、能力を利用してカンニングして成績をとっているので、努力家の御坂さんはそれが許せないのでしょう・・・でも、何故あなたは私にネタばらしを？」

「俺はアンタの味方でもないが、アイツの味方でもねえ。だが、ばらしちまったほうが面白いと思ってな」

「なんというか、不思議な人ですね」

バンッ

美琴がいた

「ちょっとこっち来て・・・」

「あんたね！何勝手にネタばらししてんのよ！？」

「だから言ったろ？そっちのほうが面白いからだ。それに、お前の男の知り合いって俺とアイツくらいだろ？この際慣れといたほうがいいんじゃねえの？」

「だからって・・・」

「それに、アイツは善人だ・・・悪人じゃねえ。」

「んぅ・・・・わかった！それじゃあ、今回の恋人ごっこはこれにて終了！それじゃ！次は殺しに行くから！！」

「満面の笑みでんなこと言うなよ・・・」

満面の笑顔でそう言うと美琴は走り去っていった

帰宅途中、海原に会った

「またお会いしましたね」

「御坂ならいないぜ。帰ったよ・・・・・・・ところで」

お前は誰だ?

「バレてしまいましたか・・・・何故お気づきに？」

「こちとら、そんな殺気を敏感に感じ取れねえんじゃとっくのとうに死んでるような人生を送ってるんでね」

「なるほど、バレバレでしたか・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・

なら死んでもらいます」

海原（偽）が懐から取り出した黒い石のナイフをこちらに向けた瞬間

後ろで車がバラけた

「変装に攻撃・・・多重能力者（デュアルスキル）でしかできないことをやってるってことは

お前・・・・・・魔術師だな？」

海原（偽）は無言でナイフを構えた

「YESってか？くそっ！」

上条が走り出したとき、隣にあった標識がバラバラに分解された

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

プルル　プルル

「はっ、はい！」

『インデックスか？当麻だ！単刀直入に聴く！黒い石のナイフを使った魔術ってあるのか！？』

「黒い石のナイフは黒曜石・・・多分、トラウィスカルパンテクウトリの槍」

『名前なんて言われてもどうしようもないんだ！その魔術の効果は！』

「もともとはアステカの神様の名前・・・その槍は金星の光を浴びたものを全て殺すって言われているんだよ！とうまなら光を予知すれば右手で防げると思う・・・」

『できるか！！黄猿でも呼んでこい！！』

「他に何かある？」

『奴の変装もそのアステカの魔術なのか！？』

「変装ってだけなら――――」

『――――相手の皮をちょっと剥いで護符を作れば姿形をマネることもできる』

「そうか！それだけわかれば十分だ！」

『ちょっととうま！』

ピッ

「さて、行き止まりか・・・」

後ろでは海原（偽）が例のトラウィスカルパンテクウトリの槍を構えている

「させねえよ！！！」

ブワッ

セメントの乗っかったシャベルを振り回し、セメントの粉が舞った

「左に注意しな！」

「っ！！」

バキィィン

「それがお前の素顔か・・・イカしてるじゃん」

「どうも！そして死んでください！！――――！？！！？」

「鏡はしっかり磨いとけ」

「セメントの粉！！くっ！」

「ぬぐってる暇があったら武器として使え！！」

「いいえ、距離的には問題ありません」

「ああ！そのとおりだ！！」

上条はナイフを蹴り上げ、落ちてきたナイフを殴った

パキンという音とともにナイフは砕けた

「さ・て・と、話してもらおうか」

上から鉄骨が落ちてきて大きな音を立ててもなお表情を変えずに言った

「何故魔術にかかわりのない御坂に近づいたかを・・・」

「気づいていないんですか？十万三千冊の魔道書図書館を専有、超能力者（レベルファイブ）や、そのほかの強力な魔術師を味方につけ、既に『上条勢力』という脅威ができあがっているんですよ？つまり、自分の標的はあなた個人ではなく、『上条勢力』全員・・・」

「それで誰かに変装して互いの信頼関係を崩そうとしてか？」

「そうです、そのとおりです！」

「別に、そんな勢力・・・崩れたところでかまわねえよ・・・許せねえのは――」

「テメェが俺に嘘を吐いたことだ！！」

ガンッ！！

「がっ・・・！！」

「結局、テメェが御坂のことを好きだってのは嘘だったってこと「嘘じゃありませんよ！！！！」あ？」

「自分だって・・・今すぐにでも止めたいんですよ！こんなこと！！」

「・・・・・・・」

「でも、上があなた達が危険だと判断してしまったから・・・」

「オーケーわかったよ。その願いかなえてやるよ」

「え？・・・ぐあっ！」

海原（偽）の顎に強烈なアッパーカットがキマった

――――――――――――――――――――――――――――――

「自分は・・・負けたんですか？」

「ああ、お前の負けだよ。もう襲わなくてもいいだろ」

「いいえ、多分これからもあなたも御坂さんも狙われるでしょう・・・あなたは守ってくれますか？彼女を、何時どこでも駆けつけて守ってくれますか？」

「あいつが自分の不幸でどうなろうと知ったこっちゃない」

「そんな・・・！「でもよ」え？」

「俺の不幸に巻き込まれ立ってんだったら話は別だ・・・守ってやるよ・・・」

「やっぱり・・・あなたはわからない・・・あなたは一体何なんですか？」

「少なくとも人間じゃねえな」

それだけ言ってその場をあとにした

恋人ごっこ編　完

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「あ～、宿題わかんねえ」

家に帰ってさっそく宿題にとりくむも全然終わらない
気分転換にファミレスへ当麻、美静、インデックスの三人で行き、
ただ今上条はファミレスで宿題をやっている

「あなたは何か頼まないのですか？」

「俺はレストランで食事をすると高確率で食中毒になるから食わねえ」

「そうですか・・・・それでは美静はこの白玉クリーム餡蜜をお願いします」

「俺、ちょっとトイレ行ってくる」

「お供しましょうか？と美静は「必要ねえ」

――――――――――――――――――――――

窓の外、そこに上下共に黒のスーツを着込み、ネクタイまでが黒色に統一されていた。

その体躯は、みっちりとした筋肉で覆われており強靭である。

黒塗りのスーツの大男、その男の名は闇咲逢魔。

「見つけたぞ・・・開戦の狼煙を上げん。断魔の――」

ガシッっと突如横から腕を掴まれた

「お客さ〜ん。お触りは禁止ですよ〜何つっ・・てってあれ？」

いつの間にか目の前から闇咲が消えていた。横を見てみるとインデックスが闇咲に捕まっていた

「あーあ、また魔術師かよ・・・」

〜〜〜

闇咲とインデックスはとある高級ホテルの屋上にいた
インデックスはロープで縛られて身動きができない状態だ

「驚いたな。短時間で結び目を二つも解くとは」

「縄は日本が生んだ独自の拷問だけど、こんなものじゃ私は何も喋らないんだよ」

「いや、君を拷問する気はない。君の中にある魔道書、その一冊を手に入れるためだ」

「まずは増幅のための結界を張らねばなるまい」

「その必要なねぇ・・・な」

「よくここがわかったな」

「いや、ただ高い所から見ればわかるかなーって」

「単純だな」

「大きなお世話だ。で、インデックスに何のようだ?魔道書を使うってんだったら止めとけ・・・死ぬぞ?」

「百も承知だ」

「なら、どうぞ?」

闇咲が術式を発動させてからすぐに異変が起こった
術式にはなにも間違いはなかったしかし、闇咲の命は蝕まれていった
魔道書の毒だ・・・激しい頭痛に声すらでなかった

「とうま！とめてあげて！！」

「いいんじゃねえ？百も承知なんだろ？」

「でも・・・！と美静は「自分の命を大切にしないような奴に言われたかねえよ・・・・・」っ・・・！」

闇咲の限界はもうすぐそこだった
その時、何かが術式を破壊した

パキィィィン

術式を破壊したのは上条だった

「わかっただろ？お前程度の奴じゃ無理だったんだ「悪いのか？」
あん？」

「この命を引き換えに、誰かを守りたいと思うことが悪いのか？」

「そうだな・・・俺から見りゃお前は悪党だよ。悪党だった奴が今度こそとかほざいて誰かを助けたいなんてことができるわけじゃねえんだよ。間違いないな、経験した俺が言ってんだから間違いなんてないな」

「そ、そんなこと――――「帰るぞ！」え？とうま？」

「これ以上付き合ってらんねえ。だから帰るぞ」

「そんな！とうま！この人の助けたい人は呪いだからとうまの右手（イマジンブレイカー）で」

「そんなの知るかよ。んなくだらない幻想ぐらい自分でなんとかしろ」

別に上条が非情な訳でもない。ただ闇咲に自分と同じ末路をたどってほしくないだけだった
上条がまた立ち直ることができたのは奇跡に等しい。上条もそれを知っている
だから上条は闇咲が闇に堕ちないように・・・・

そして自身もまた恐れていた。その呪いが破壊したら何か起きる仕組みで、闇咲の大切な人を殺してしまうかもしれない
最悪の場合、死よりもヒドイことになってしまうことを・・・・

今宵、一人の女性の死が確定し、一人の男の幻想が破壊され、男は現実を見た・・・・

想い人（後書き）

なんというＢＡＤ　ＥＮＤ・・・ッ！！
すいません！悪条さんがどうしても女の人を助ける理由が思いつかなかったもんで、仕方なく上条さんが闇咲さんを見捨てるＥＮＤにしていしまいました。この回が好きな人、本当に申し訳ありません！！！

転入生

9月1日　早朝

「今日から学校かよ・・・はあー」

「どうしたんですか?そんなにため息ついて。学校楽しみじゃないですかと美静は不思議に思います」

「俺があの高校に入学して、一応オリエンテーションまでは通っていたのは知ってるよな?」

「はい。ですけど、それがどうかしましたか?と美静は尋ねます」

「数学のオリエンテーションの時、生活指導の教師をボコボコにしてよお、すんげー気まずいんだよ・・・」

「気まずいというか、あなたに沈められたその生活指導の先生は気まずいどころじゃないんじゃないですか?と美静はあきれながら突っ込みます」

「いや、大丈夫だろ。かなり屈強だったし」

「それにしても、何故あなたは捕まらなかったんでしょう?と美静は不思議そうに尋ねます」

「さあ?気に入られたんじゃねえ?おっと、もうこんな時間か。行くぞ美静」

「ねえ、とうま。本当に行っちゃうの？」

「学校に行けって行ったのはお前だろ？」

「そうだけど・・・」

「んじゃあ、行ってくっから留守番してろよ？」

「うん、いってらっしゃい・・・・・・・・・・・・はあ、退屈だな」

しばらくしてインデックスはあることに気づいた

「とうま・・・お昼ご飯・・・・・」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「上条ちゃん！来てくれたんですね！先生嬉しいですよ！！それで、そっちの娘が上条ちゃんの（義理の）妹さんの―――」

「上条美静です。よろしくお願いしますと美静は学園都市の七不思議の正体に愕然とします」

「七不思議って・・・先生は！！―――「はいはい。さっさと教室いきましょーねー」上条ちゃん！先生を子供扱いしないでください！！」

「これで美静は四つの学園都市の七不思議の正体を知ったわけですねと美静は残る七不思議に期待します」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～

ガラガラ

「おい、上条だ・・・」

「マジだ」

「あ！上条君だ！」

「本当だ！来てくれたんだ！」

教室に入るとクラスメートたちはヒソヒソと上条についての会話に変わった
上条を恐れる会話もあれば上条に憧れてるような会話もあった

「人気者やなーかみやん！羨ましいでー」

「どこがだよ。明らか俺に怯えてるじゃねえか」

「そんでも女子にも話題にされてるんやでー」

「俺は悪口言われて喜ぶようなドMじゃねえんだよ」

ガラガラ

「それではHRをはじめますよ。始業式の前に、みんなにビックニュース！なんと！転入生が二人もやってくるのですよ！」

それを聞いたクラスメートたちは「おおー！！」と盛り上がった

「しかも二人とも女の子！！おめでとー野郎どもー！そして残念でしたー子猫ちゃんたちー！」

その知らせを聞いてさらに盛り上がる野郎達と子猫達。予想通りの反応だ

（二人？一人は美静だとして、もう一人は誰だ？）

「そして、片方はなんと上条ちゃんの妹さんなのですよー！」

いっせいに全員が上条の方を振り向いた

「上条の妹だってよ・・・やっぱコエーのか？」

「いや、兄妹ってのは上がバカだと下はちゃんとしているから大丈夫だろう」

「上条君の妹だって仲良くなれば上条君に・・・」

相変わらず上条に対してマイナスな会話をする男子に対し、プラスな会話をする女子には

やはり、上条は気づかない

「それでは転入生ちゃん達！どうぞー！！！」

テンションの高い小萌先生の声と同時に入ってきたのは・・・・・・

（インデックス・・・・・・・・・）

「あっ！やっぱりここがとうまの通っている学校なんだね！！」

「どっから入って来たですか！？転入生はあなたじゃないでしょ！出てった出てったです！」

小萌先生に連れて行かれたインデックスと入れ替わりに転入生らしき人が入ってきた

「ちなみに本物の転入生は私姫神秋沙と――――」

「私、上条美静です。と美静はジミーに続いて自己紹介をします」

（ジミーって・・・何時の間に仲良くなったんだ？）

（（お互いに同じ臭いを感じて話してたら息投合して））

（こいつら・・・俺の脳内に直接・・・・）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「何でお前がここにいるんだよ！？」

「だって！とうまったらお昼ご飯を作ってなかったんだもん」

「今日は始業式なんだから午前中には帰れるだろうが」

「そんなのわからないもん！」

「常識だろうが」

「それじゃあとうまは――――「お前は今から魔術に関しての常識を言うだろうが、まあイギリスの学校の始業式のことについては知らないが、専門知識の常識と一般常識の違いってわかるか？」

「うっ！それじゃあ――――「次はイギリス清教とやらの宗教の常識を言うだろうが、お前の言う常識が一般市民の常識という保障はないぞ？そしてお前は一般のイギリス清教徒の常識を言うだろうが、俺は聖書は暇つぶしに何度か読んだことがあるし、内容もある程度は覚えている」

「」

「ま、まあ。それくらいでいいじゃないですか？」

上条の攻撃に石化してしまったインデックスを見兼ねた隣の少女が二人の仲裁に入った

「そういえば、そちらの方は？と美静は説明を求めます」

「その人は友達、良くわからないけど友達！」

「良くわからないって、良くわからない友達がいるか」

「むっ！よくわからなくても友達は友達なんだよ！！」

「あっ、私は風斬氷華っていいます」

「上条美静ですと美静は本日二度めの自己紹介をします」

「あ、よろしくお願いします」

「上条当麻だ」

美静に対してはオドオドしつつも挨拶をしたのに対して、上条の自己紹介のときは怯えた

「まあ、当然の結果ですねと美静は納得します」

「うん、当然なんだよ」

まあ、当然だよな

「うっせ、ナレーターが話しかけてくんな！」

「誰に言ってるのとうま」

「ナレーター」

「「えっ」」

「なにそれこわいと美静はメタ発言にドン引きします」

しばらく沈黙が流れた・・・・・

「上条ちゃん！美静ちゃん！何やってるんですか！！」

「んあ？始業式終わった？」

「終わってません！！！体育館に上条ちゃん兄妹がいないから心配して捜したんですよ！！」

「ちっバレてたか・・・」

「それはバレますよ！！せっかく久しぶりに学校に来たんですからちゃんと始業式にも参加してください！！
それに美静ちゃんも折角の初日なんですからちゃんと参加してください！！」

「すいません先生、私は校長先生の挨拶アレルギーなんで勘弁してください。と美静は嘘の言い訳を言います」

「嘘の言い訳って自白してるじゃないですか！！！！それに何でこの場には上条ちゃん以外に男の子がいないんですか！？何で上条ちゃんの所にはいつも女の子がいるんですか！？」

「女運が悪いから毎回得たいの知れない女が来るけどな！！！！！！」

「とうま！ひょうかが得たいの知れない女だって言うの！？」

「充分得たいが知れねえよ！！」

ガリッ

「んぎゃぁぁああぁぁぁああぁあぁぁあぁあぁあぁぁあああぁあ
あぁぁぁ！！！！！！！！！」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「待たせたな。んじゃあ飯でも・・・あ？・・・・・・・」

「どうしたの？とうま」

「・・・・・・いや、気のせいだった何でもない。悪いが・・・ちと用事を思い出した。ゲーセンでも行って時間潰してくれないか」

「う、うん・・・・・？」

「んじゃ、行ってくる」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「あなたが侵入者ですのね？私はこの町の治安維持を努めさせていただく風紀委員の《ジャッジメント》の、白井黒子と申します。自身が拘束される理由はお分かりで？」

「探索中止、手間かけさせやがって」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「あの『ニガー』・・・いかにも怪しい風貌だったな・・・おそらく魔術師だろうな。

いまのうちに仕留めておくか・・・あ」

「ハロー！！そして死ねー！！」

突如放たれた電撃に慣れたように右手を突き出した

パキィン

「あー、ビリビリか・・・」

「だから御坂美琴だって。用件はおわかりでしょうねって・・・聴いてる？」

（上手く利用できそうだな）

「な、なによそのニヤニヤ顔は！」

「お前短パンはき忘れてるぞ？しかもスカートが腰に入ってるぞ？」

「へっ！？」

上条に言われてあわててスカートを確認するがスカートは腰に入っておらず、短パンもちゃんと履いていた

それで視線を前に戻すと

「あーばよー！とっつぁ～ん！」

いつの間にか上条が遠くに離れていた

「こ、の、く、そ、野郎ーーーー！！！！！！！！！！！！！！」

美琴は懐から巾着袋を取り出すと中から鉄球を取り出し、上条に向けて放った

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

一方白井黒子は侵入者が出した巨大な何かに掴まれていた

（まさか、外部の人間で能力者！？まずいですわ！！）

巨大な何かはそのまま黒子を握りつぶそうとしたが

ドガァァァン

突如放たれた橙色の閃光が巨大な塊に当たって開放された

「これは・・・お姉さまの・・・！」

そう期待して放たれた場所を見るが・・・

「いや～やっぱ自分で突っ込んだほうが百倍安全だったな」

上条当麻だった

「あ、あなた！！一体どうやって・・・!?!?しかも、今のはお姉さまのレールガンじゃ・・・！！」

「んあ？白井か。ああ、確かに今のはビリビリのレールガンだが」

「なるほどね。つまり、あたしは上手く利用されたわけね」

「・・・・・！！？お姉さま！？何故こんな所に！？」

「俺が持ってきた」

「持ってきたって・・・物みたいに言わないでくれる？それにしても何よ今の？能力者？」

「外部の侵入者だろ？おいオセロ！今の侵入者ってのは黒人のゴスロリ着た女なんだよな？」

「はいですの。捕まえたと思ったら突然そこの黒い塊が出てきまして・・・しかし何故外部の者が能力を？」

「そうか・・・やはり魔術師か・・・とりあえず、美静に連絡を」

そう呟いて上条は携帯をとりだした

「美静か？今どこにいる」

『地下のゲームセンターですが？と美静は回答します』

「そうか、そこで待ってろ」

「どうかしたの？」

「その侵入者のことだが、目的に心当たりがある」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

『ふふふふ・・・みーつけた・・・』

「こ、これは・・・？」

「土より出でる人の虚像。神殿の守護たる石像（ゴーレム）を無理矢理に英国の守護天使に置き換えてる」

「あの・・・何を言ってるのかさっぱりなんですけど・・・」

「ふふふ・・・さ♪パーティを始めましょ・・・・土の被ったドロクセェ墓の中で存分に泣きやがれ」

転入生（後書き）

風斬「この子・・・もしかして電波・・・？」

ここから先、次の場面につなげられなかったんでいったんここできります。

侵入者（前書き）

はい、９月１日後編はじまりなのですよ～！
そういえば、私はどこを最終回にするのかをまだ決めていないのですが
短くて０９３０事件編、長くてＷＷ？編なんですが、面倒くさいんですよねー（テッラ風に）
一応アッークア戦までは考えているのですが、ミ（サ）ーシャ＝クロイツェフが天使になっていないのでＷＷ？編はどうしようもないんですよねー（テッラ風に）

侵入者

（今あそこにいるのはインデックスと美静、そして風斬の三人か・・・）

「おいパンダ！一応聴いとくが、お前の能力で三人は移動できるのか？」

「いえ、一度に運べるのは二人が限界ですの」

「そうか、だったらまず銀髪の白い修道服を着たシスターを避難させ、次に残った女二人を避難させろ」

「わかりました」

そういい残して空間移動（テレポート）で消えた

「聞こえたな！まずインデックスを避難させるから、お前は風斬を守れ！」

『了解しました。と美静はパ●ー砲を構えながら返答します』

「何故にパ●ー砲！？」

『この間見たジ●リを見て感動したので前々から製作していました。と美静はジ●リの良さを強調しながら答えます』

「それで最近お前の奨学金が増えたのか・・・まあいい、とにかく風斬を守る。いいな？俺も今そっちに向かう」

ピッ

「今向かうってアンタ、出入り口はふさがれてるのよ？空間移動(テレポート)でアンタを運べないし、第一アンタは民間人だから黒子も絶対に連れて行かないだろうし・・・」

「ちょいとねー」

上条はニヤリと笑った

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「あのー、何で二人運べるのに一人だけ運んだんですか？」

「敵の目的はあの娘の殺害と思われますのであの娘を優先し、一人残すより二人残したほうが良いとおもったのでしょう。それに美静は多少の戦闘の知識がありますので、と美静は解説します」

その直後、急に美静が何かを警戒しだした

「来たようです。」

「ヤレヤレ・・・そこそこ腕は立つけど、品がないわね」

「あなたは警備委員(アンチスキル)を全滅させたのですか？と美静はそうでないことを祈りつつ問います」

「だから行ったでしょ？そこそこ腕が立つ程度じゃ、エリスは壊せ

ない・・・」

「一応確認しておきます。あなたの目的は？と美静は嫌な予感を感じつつ確認します」

「あたしの目的はそこの虚数学区の鍵・・・まあ、ぶち殺すのはそこの餓鬼でなくてもいいけどね」

「虚数学区の鍵・・・・・・・・とは？と美静はさらなる嫌な予感を押しのけて問います」

「論より証拠・・・エリス！！」

エリスと呼ばれた石像は突如動き出し、床をを殴った

「！！下がってください！！」

あわてて風斬を突き飛ばし、すぐさま石像にグレネードガンを放ち、腕を吹き飛ばした

「さすがに一発で・・・とはいきませんね・・・・」

「まったく、危なっかしいお嬢さんね。エリス！」

女の言葉と共に石像の腕は元通りに戻った

そして、その腕は振りかぶっていた

「早く！伏せて！！――――」

ガスッ

聴きたくない音が響いた

「大丈夫ですか!?・・・・!」

あわてて近寄ったが、

「これは・・・一体?」

彼女の頭の中身がなかった
中身がないといっても、脳が飛び散ったわけでもない
彼女の頭は陶器のように割れていて、その中に何かが浮いていた

「えっ?何?これ・・・?」

頭を抑えた風斬が違和感に気づいた
風斬が横の窓ガラスを見ると
突如悲鳴を上げて走り出した

「待ってください!!そっちは――」

ドガッ

腕を振るった石像に吹き飛ばされた

しかし、彼女は死んでおらず、マリオネットのようにぎこちなく立ち上がり、悲鳴を上げながらどこかに走り去っていった

「一体、今のは？と美静は状況を飲み込めずに呆然とします」

「つまり、アイツはエリスと同じ化け物ってことさ」

そう言って女は彼女のあとを追った

「つまり――――」

「つまり、風斬は・・・ＡＩＭ拡散力場の集まりってことだ・・・」

「あなたは・・・」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

「ふふふ、何なのかしらね、虚数学区の鍵とか言われてどんなものかと思えば、正体はこんなモンかよ。こんなものを大事に抱え込むなんざ、科学ってのは狂ってるよな？」

「どうし、て、こん、な、ひどい、ことを！？」

「え？何？まさかアンタ、死ぬのが怖いとか言っちゃう？おいおい、いい加減気づきなさいっての。

テメエが人間のはずがねえだろが、ほら・・・」

女の合図で石像が横の壁を殴り、壁は砕け、石像の腕も砕けた

「私があなたにしていることってこの程度のことでしょ？つまり、あなたはエリスと同じ化け物ってことが・・・テメエの居場所なんてどこにもないってことが・・・」

石像の腕が再生された
それを見て、先程自分受けた致命傷が自動再生されたことを思い出し、涙が出た

「泣くなよ、あんたが泣いたところで気持ちが悪いだけなんだし！」

石像の腕が振りかぶられ、
そして、

パキィィィィン

突如石像が崩れだした
その様を眺めていると一瞬石像の足元に人影が見えた
煙ですぐに姿が見えなくなったが、煙が晴れてきてそこに立っていたのは・・・

「化け物・・・ねえ・・・」

上条当麻だった

「風斬が化け物、それなら異常なほど不幸を

呼び寄せる俺のほうがもっと化け物なんじゃねえのか？」

「なっ！」

突如目の前に現れた上条当麻に動揺し、

「安心しろ、手加減はしてやる」

ドカッっと鈍い音と共に女は吹っ飛んだ
彼女が地面を転がると同時に石像が動きを止めた

「オーケー、あとはこれを壊すだけ・・・」

「んふふふふ、ふふふふ」

笑い声に振り向くと女が床に魔方陣を書いていた

「もう一体作るのか」

「いや、一度に二体は持たせらんねえのさ、けどなぁ・・・そいつを利用すれば」

突如魔方陣が光りだし、そこに大きな穴ができた。女の姿はない

「やばい・・・！逃げられたか・・・」

「あの・・・なにがですか？」

「あいつは・・・条件さえ満たせば誰でもいい。つまり、インデックスを殺しに行ったわけだ」

「え!?それじゃあ、警備員（アンチスキル）の人たちに頼めば・・・」

「アイツはこの都市の住人じゃねえ、逮捕される。おい、そこらの警備員（アンチスキル）からロープをかっぱらって来い」

「いいえ・・・その必要はありません。私が行けば・・・」

「・・・・・・・・」

「私はあの化け物に勝てなくても、少なくとも囮ぐらいにはなれます・・・私が殴られてる隙にあの娘が逃げてくれれば――――」

「それじゃあ、インデックスはどうなるんだよ」

彼女は上条の言葉に怖気づき、思わず後ずさった

「アイツが友達を見捨ててスタコラサッサと逃げる奴に見えんのか？」

「ち、ちが」

「違わねえだろ、所詮その程度だったんだろ？お前らの友情なんて、お前にとってインデックスとはその程度の奴だったんだよ」

「違います!!!勝手なことを言わないでください!!!!」

「じゃあなんで、一緒に逃げるっている選択肢はないんだ？」

「いいんです！私はあの化け物に殴られても死ななかった。化け物に立ち向かえる・・・それでいいんです・・・！」

それだけ言い残して風斬は穴の中に飛び込んでいった

「まったく、世話の焼ける・・・」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

上条当麻は魔術師の女を追っていた。あの後、警備員(アンチスキル)から盗ったロープで降りた。

だが、上条が急に止まった。

そして、止まった時に目の前に柱が倒れてきた

「よう、『ニガー』。あのデカブツはどうした？」

「先に追わせてるわ。今頃、標的のもとに、それとももう肉塊に変えちまってるかもな。ま、念のため時間稼ぎさせてもらうわ・・・

地は私の味方。ならば地に囲われし闇のそこは、我が領域！！」

「トンネルごと潰すってか？ならお前はどうする？まさか安全を考えずにやってるわけじゃぁ、ねえよなぁ？」

「ええ、私の安全を確保してからやってることよ。全て崩れろ！！

泥の人形のように！！」

「だったら、もうちょっとカムフラージュしろよ。こんなことじゃ

あ俺の前だと安全を確保してないのと同じだぜ？」

パキィン

女の床にあった魔方陣に触れると女の頭上の壁が崩れた
あわててトンネルの崩壊を止めるが・・・

「Ｙｏｕ' ｒｅ ｍａｋｉｎｇ ｔｈｉｓ ｔｏｏ ｅａｓｙ!!」
スキだらけだ!!

「はっ!!?」

バギッ

彼女の顔に鋭い拳が突き刺さり、トンネルの壁に叩きつけられた

「悪いが、テメエに付き合ってる暇はねえ」

「くっ!ちくしょうっ・・・!戦争の・・・火種を作らなくちゃ、
ならねえんだよ・・・」

ガラ

「えっ」

ガラガラ

「ちょっと・・・それ、は、ない、でしょ・・・？」

ガラガラガラガラガラガラ

ドシャァーァァン

悲鳴は聴こえなかった・・・・・いや、彼女が生き埋めにされる瞬間、
わずかに悲鳴が聴こえた・・・
悲鳴をあげる前に生き埋めにされたのだろう

「あんだけ崩しゃあ、こうなるだろ。俺を生き埋めにするどころか、
逆に生き埋めにされたな・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「ま、俺と長時間一緒にいたこともあるけどな」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

風斬・インデックスｓｉｄｅ

（化け物の相手は同じ化け物がしなくちゃ・・・・！！
私はもう、あそこには戻れない・・・この時間はもう二度と帰って
こない・・・）

石像が抑えられている手とは逆の腕を振り上げた

（だからって・・・だからって！見捨てることはできないっ！！だ
って・・・）

「だって、友達だから！！！」

石像の腕は容赦なく放たれる

そこへ一つの影が現れる

「えっ？」

「よかったじゃねえか・・・お前の住んでる世界、まだ救いがあるじゃん」

上条が放たれた石像の拳を殴りつけた
パキィィィィンという音と共に石像は殴られた所からヒビがはいり、崩れ落ちた

もう、優しい幻想はおしまい・・・

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「よかったのですか？アナタは追わなくて」

「俺みたいな奴にアイツを慰めることは言えねえ・・・俺ができるのは、
精々善人を羨みながら、邪魔する奴の幻想をぶっ殺すだけだな」

「でも、あなたは変わったじゃないですか？絶対能力者進化実験（レベルシックスシフト）を終わらせたとき、あなたが“お姉さま”に一生逃げ続けると宣言したときに・・・」

「変わってねえよ・・・何もな・・・もう変わろうとも思わねぇ・・・」

そう、彼は“何一つ変わっていない”彼の持つ強さ以外・・・

侵入者（後書き）

相変わらず話のキリ方がわからないですね。
しかも、文章能力は一向に上がらず、不幸だ
まさか、悪条さんの代わりに言う羽目になるとは・・・

誘拐犯

私上条当麻は今、学園都市の外にいます。何故かって？
それはですね・・・いつも通り学校から帰宅してみると、隣人の土御門の義妹の土御門舞夏からインプロンプトがさらわれたらしい、舞夏に預けられてた犯人の手紙には『午後七時までに廃劇場『薄明座』跡地まで来い』とのこと・・・犯人の特徴を聴いたところ、「長身で髪が真っ赤で目の下にバーコードがあって、くわえ煙草と耳に大量のピアス」と、アイツしかいねえよな・・・
で、結局今に至るわけよ。そして、一つだけ腑に落ちない点がある・・・それは――――

「それにしても何で科学側の人間である美静にも外出許可証が出ていたんでしょうね？と美静は魔術側に対して疑問を持ちます」

そう、こいつにも外出許可証が・・・
ちなみに私服です！！

「知るかよ・・・今回は科学側がかかわっても大丈夫な事件なんじゃねぇ？」

「それより、まだ着かないんですか？と美静はあなたの方向音痴にあきれます。」

「あのー」

不意に声をかけられた

「ん？」

声のしたバス停の方に顔を向けると、

「学園都市に向かう為には、このバスで良いのでございましょうか？」

真っ黒い服を着たシスターがいた

うん、絶対かかわったらいけないな・・・！

そう硬く決意した時に・・・

「学園都市行きのバスはありませんよ。それと、そとからの交通機関も切断されています。向こうにゲートがあるので底前歩いて行けば入れますと美静は丁寧に道案内をします」

案の定、美静が道案内をしやがった

美静が話し終えて数秒後にバスが到着した

「お忙しい中ご助言いただきありがとうございました」

そう言いつつさっき説明を受けたばかりにもかかわらずシスターはバスに乗ろうとする

「バスはダメっつってんだろ！！」

思わずつっこんでしまった・・・

「あぁ、そうでございましたね」

そして、笑顔で戻る。

「だから、あそこのゲートから入るの！！」

「すいません、ご迷惑をおかけして」

笑顔で去ったかと思ったら、そのシスターはまたバスに乗ろうとした

「おいぃぃ！！！てめえ！！さっきっから人の話を笑顔で受け流してんじゃねえよ！」

そしてまた、笑顔で戻る

とりあえず、また乗らないようにバスに発車するように言った

「一つ聴きたいのですが、あなたはＩＤを持ってらっしゃるのでしょうか？と美静は確認をとります」

「ＩＤ？」

やはり知らなかったようだ

「悪いけど学園都市にはＩＤがなきゃ入れねえよ」

「そうでございますか・・・ご迷惑をおかけしました」

そう言って去っていったシスターの方を見てみると
やはり、ゲートの方に歩いていた

これがあと、十数分くらい続きます・・・

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「聞かせてもらおうか?誘拐ごっこの理由を」

「なんだバレてたのか・・・いや、大丈夫だ。君達に行方不明の人の捜索を手伝ってもらおうと思ってね・・・
でも、もうその必要はない。君の隣にいるそのシスターをこっちに引き渡してくれれば」

「Ｓａｙ　ｉｔ　ａｇａｉｎ.」

「だーかーらー、そこのシスターが行方不明のオルソラ＝アクィナスだ。はい、お疲れ様。君は帰っていいよ」

「おいおいおいおいおい、この暑い中歩いてきた俺の立場は・・・?」

「お疲れ様って言ってるだろ?なんだ?カキ氷でも奢れと?」

上条と美静はお互いに顔を見合わせた。二人とも額に血管を浮かべて・・・・

「いやいや、そう簡単に引き渡されてはこまるのよなぁ・・・」

突如上から声が聴こえた

「オルソラ＝アクィナス、お前はローマ正教に戻るよりも、我ら天草式と共にあったほうが有意義な暮らしを送ることができるとよ・・・」

上空にマリが浮かんでいた

「天草式っ！」

ジャキン

という鉄がこすれる音と共にオルソラのいる地面から三本の剣が生え、その剣が三本同時に動き、オルソラの地面が三角に斬れた。その三角に斬られた地面が沈み、オルソラが地面の下に落ちた

美静があとを追おうとするが、インデックスの杖で制止された

よく穴を見てみると、そこにはおびただしい数の西洋の武器が向けられていた

美静が電撃を穴に放ったが、すでに逃げられていた

「また、魔術師か・・・」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「現状、オルソラ＝アクィナスは天草式の手にあります。今回の天草式の数は、推定で５０人弱で今は地上に上がっちまってる可能性も・・・」

「つまり、何にもわかんないってことかな？」

「魔力の痕跡から天草式の動向を追っていやすが」

「天草式は隠れることに特化した集団、簡単にはつかまらないよ」

「でも、うちの包囲網を突破しちまえる方法なんて――」

「特殊移動方・・・縮図巡礼・・・日本国内限定の術式なんだけどね・・・簡単に言えば、日本中に特殊な渦が四十七箇所あって、その間を自由に行き来できる」

「じゃあ、何をのんびりしてんですか！」

「急ぐ必要がないからだよ。縮図巡礼には星の動きが大きく影響してくるの。きまった時間じゃないと、特殊移動方は使えない。まだ四時間半くらいの余裕はあるよ。当麻、地図のでるピコピコかして」

「ああ、ほらよ」

上条が携帯の地図を床に置く

「この包囲網で渦を使えるのはここだけ」

携帯の画面を指差しながらインデックスが言う

「それでは、我々が囮になって、正面から天草式と激突します。その間にあなた達がパーク内を探索して、法の書とオルソラを確認できたら確保しちまってください」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

パーク前

「ステイル、一つ聴いていいか？」

「なんだ？」

「あいつらは法の書とオルソラの確保とかいってたけど、別にオルソラだけでも確保すれば法の書なんてただの本だよな？」

「ああ、確かにオルソラがいなければ宝の持ち腐れだ」

ドォォン

突如、遠くで爆音が聴こえた

「始まったようだ」

「俺はこっちへ行く、美静は向こうで、お前らはそっちを行け」

「そうかい、ならこれを持って行け。死にたくなければね」

そういいながら何かをステイルは上条に投げたが、

「Ｎｏ，ｔｈａｎｋ　ｙｏｕ．」

投げられたそれを上条は叩き落とした

「なっ！？」

「俺は死なねえよ」

そう言って去っていく上条の背中を見ながら、唖然とする三人

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「早速おいでなすったね。」

目の前に若い男女が現れた。一見、一般市民にも見えなくもないが、手に持ってる色々な種類の西洋の武器がそれを台無しにしている

「やれやれ、ツイてねえなー、――――――お前ら・・・・・本当にツイてねえよ」

上条はいつも通り右手をパキパキと鳴らす

いきなりこちらに振られてきた剣をヒョイッとかわし、相手の女の懐に飛び込むと、女はすかさず後ろに跳んで上条に向かって剣を振り下ろすが、それを左手で止められて腹に重いボディーブローが入った

バンッ
と何か破裂したような音がした気がするが気にしてはいけない
上条は掴んでいた左手を剣の柄の方にずらし、剣を奪い取った
上条が剣を奪い取ると、残った二人が両サイドから攻撃を仕掛けて来たが、上条は片方を剣で地面へ受け流して相手の持っている武器を叩き折って、もう片方の敵に先程武器を無力化した相手を投げて、二人まとめて蹴り飛ばした

この間、わずか４秒

「さーて、つぎへ行、うぉっ！！」

次へ行こうとする上条へ突然体当たりがあたって押し倒された

「・・・っててて・・・ん？オルソラ？」

「んーっ！んーっ！」

何を言ってるのかわからないのでとりあえず口に張られている物を剥がした

「あ、あなた様はバス停でお会いした・・・」

続いてオルソラの手を縛っている縄を解いた

「何故こんな危険な場所に？」

「『助けに来た』それでいいだろ」

「本当に助けに？」

「そうだ」

「法の書など関係なく？」

「俺には価値なんてわからないしな」

「それはお世話様でございました」

「ああ、あとは０：０５まで隠れとけば大丈夫だ」

「そうさせるわけにはいかないのよなー」

オルソラがビクッとかたを震わせた

「お前が頭か?」

「建宮斎字、よろしくなのよな。それにしても、さっきのは見事だったのよな」

「見てたのか?ずっと」

「ああ、驚いたのよな、部下が複数でかかっても五秒も持たないとは・・・」

「あんたも大変だな、あんな無能な部下を持っちまって」

「今なんか言ったか?」

建宮がドスの利いた声で言うが、それに対して意地の悪い笑みからまったく表情を変えずに続ける

「だから、無能だっていったんだよ。ホント、部下が部下なら上司も上司だよな・・・神裂が何故抜けたかがわかったよ・・・ま、アイツも充分無能だったけどな」

「おい、今言ったことをすぐに撤回してほしいのよなぁ」

「俺は本当のことを言ったまでだぜ?どうやって撤回するんだよ?」

「そうか、別に我々は我々が侮辱されても構わない、だが女教皇(プリエステス)様を侮辱することだけは許さないのよな!!!」

「はっ!侮辱だと?俺はただ本当のことを言っただけだろ?ああ、

もっと言ってやるよ！神裂は上司（うえ）の言うホラを真に受けてまだ十代前半の女の子を平気で痛めつけるアホだ！！その上そのホラを善良な市民に教えて核心をついたことを言った善良な市民をボコボコにしようとした・・・女教皇（プリエステス）失格なんだよ！！！」

「黙れ・・・」

「お前らもそうだ！何がｓａｌｖｅｒｅ０００《救われぬ者に救いの手を》だよ！！目の前の救われぬものを二人も不幸にしたくせによ！！！」

「黙れッつってんだよお！！」

向かってくる建宮を見てもまだ笑っている上条

「ほら！そうやってすぐキレてこっちに向かってきやがる！！」

そんなことを言っている上条の頭に容赦なく建宮のフランベルジェが振り下ろされる・・・
が、その動きが止まった

ピシッ

何かにヒビが入る音がした

「あ、あ・・・ぐあっ」

建宮の右手首に上条の左拳が入っていた
さっきの音から右手首にヒビが入ったようだ
振り下ろして急に止められた勢いで持っていたフランベルジェを手放してしまう
上条はそれをすかさず後ろ手でキャッチし、柄を両手で持って建宮の鳩尾に叩き込んだ

「ぐっ・・・は・・・」

建宮は吐血して体がくの字折れた、というより折りたたまれたそれによって下がった額にフランベルジェの柄を上条は思いっきり叩き込んだ
頭蓋骨が砕ける音と見事な放物線を描き、建宮は昏倒した

「聖人ってスゴイ、改めてそう思った」
上条はどこかの寺生まれの人の友達のような台詞（セリフ）を吐き捨てた

誘拐犯（後書き）

Tさん「呼んだ?」NNY「呼んでねえよ」
何か建宮のセリフって難しいですよね
まあ、ローラよりは簡単ですけどね
ちなみに、ローラの口調があまりにも難しかったので1日かけて半分ほど書いたローラの台詞（セリフ）を全部没にしたのは内緒です（^―^;）

異端者（前書き）

親にマイＰＣのネットを切られましたｗ
だから今後の夏休み終わりまで投稿が遅くなることがあります。
しかし、宿題を終わらせればＰＣ復活するのに宿題を終わらせてない俺がいる。
あと最近、鏡に対して何か特別なものを感じる俺ガイル
ダレカタスケテ

「話してもらおうか、何故オルソラを攫ったのかを」

「何故それを聴くのよな」

「オルソラを引き渡すとき、なぜかオルソラは怯えていたからだ」

「お前さん、『法の書』を解読させるためとは考えないのか？」

「そんなもん・・・はじめっからないんだろ？」

「ほお・・・どうして気づいたのよな？」

建宮が関心したように言った

「元々『隠れる』ことを主としているお前らが、そんな大それた目立つモンを必要とするはずがないだろうが」

「ああ、そうだ。我等は『法の書』なんぞ初めっから盗んじゃいねえのよな」

「話を戻す、何故オルソラを攫った」

「我々は彼女を匿っただけなのよ」

「匿った？」

「そう、十字教最大宗派である彼らが、十字教の終わりなんて思わ

んよな。だからローマ正教はオルソラを殺すことにした、彼女はそれに気づき、我等天草式に助けを求めてきたのよ」

「で、どうしてオルソラは助けを求めた相手であるお前らから逃げたんだ？」

「彼女は、最後まで我々を信じきることができんかったのよ・・・見返りに『法の書』の解読方法を求めてくると・・・」

「それじゃあ、何が理由でオルソラを」

「理由（そんなもの）なんてねえのよ、はなっから。我等はあの方の、女教皇（プリエステス）様の背中を見てきた。だからこそ我等は道を誤らず、力の使い方を間違えず、常に正しい道を歩んできた。だから我等は助けを求める彼女に手を差し伸べたのよ」

その時、遠くでオルソラのものと思われる悲鳴が聴こえてきた

「つまりオルソラは」

「そう、オルソラ＝アクィナスは我々でも、ローマ正教でもなく、お前さんを信じていたのよ」

しばしの沈黙・・・
それを破ったのは上条の笑い声

「フフ、ハハハ、アハハハハ、なんだよ、こりゃ傑作じゃねえか・・・今まで自分の不幸に巻き込んで他人を不幸にしてきたが、まさか俺が無理矢理作った不幸であいつを不幸にしちまうなんたあ・・・笑えるじゃねえか・・・！ああ！！笑いが止まらねえよ・・・！！」

ちょうどその時、建宮を回収しに来た者が現れた

「異端の首謀者の身柄を預かりに参上致しました」

猫目のシスターが建宮のほうを見た

「神の敵はそちらですか？」

「ああ」

上条の“右手”が建宮の肩を触った

パキィン

建宮の体に貼り付けてあったルーンが消えた

「なっ」

「おっとワリィな間違えて解除しちまった」

わざとらしい演技で上条がほくそえんだ

「何のつもりですか！！」

「いやー、本当なんだよ、本当に間違えちゃったんだって」

ニヤついた顔で上条が言った

それを見て上条らが裏切ったことを悟ったシスターは持っていた木製の車輪を地面に叩きつけた。叩きつけられた車輪は爆散し、その破片が上条を襲った。

通常なら避け難いが上条はそれを難なく回避した

「おいおい、随分とヴァイオレンスな攻撃だな」

「ええ、反逆者にはピッタリの攻撃でしょう」

爆散したはずの車輪に破片が集まり、また元通りに木製の車輪に戻った

ピィィィィィィィィィィィィィ

遠くで笛の合図が鳴った

「退却命令・・・シスター・アンジェレネ！」

アンジェレネと呼ばれたもう一人のシスターは「はい！」と返事をして、去って行く猫目のあとに続いて退却していった

「やれやれ、これでお前さんはローマ正教に狙われることになったのよな」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

夜道を上条、インデックス、美静、ステイル、建宮らが歩いていた

「つまり、オルソラは神の教えを信じているからジャイアニズム魔女裁判にかけて強引なやり方で教会を追い出して殺すってのか」

「そういうことだ、ここらか先は僕らイギリス清教の出る幕はないんだ」

「ああ、そうだな。俺もわざわざ自分から不幸になりにいくなんてのはごめんだ」

「そう肩を落とすな。イギリス清教には戦争を起こす理由なんぞなくても、天草式（こっち）には大有りなのよな。連中の所にごめんくださいして、うちの馬鹿共を助けるついでにオルソラ嬢も助けといてやんよ」

「そんな装備の一人で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ないのよな」

死亡フラグを吐き出して建宮はその場を立ち去った

「僕らもここらで解散としよう。君ら三人は学園都市へ戻れ。行くぞ」

「そういえば、ソーメンの汁を切らしていたんだ。ちょっと、行って買ってくる。お前らは先に学園都市に帰還しろ」

「場所はわかってるのかい？」

「その辺走っとけばいずれは着く」

インデックスらから離れた後、上条は携帯を調べていた

――

『オルソラ教会？』

『はい、彼女は三ヶ国の異教地で教えを広めたという功績で、自分の名を冠する教会の建設を特別にいただいたんで、たしか、このあたりだったと思いますよ』

――――――――――――――――――――――――――――――――

――

〈オルソラ教会にて〉

オルソラ教会についた上条
しかし、途中で何かかに阻まれた。どうやら連中は結界を張ってあるようだ
こういう場合はどうするか？決まっている・・・

（正面から堂々とだッ！！）

心の中でそう叫ぶと上条は行く手を阻むソレを殴りつけた

パキィィィィィン

「ゴメェンクゥダサァァァイイ！」

バギッという音がして教会の扉（ドア）は吹っ飛んだ
中には大勢のシスターがこちらを睨んでいた
数は大体２５０－５人くらいだろう。たった今吹っ飛ばした扉（ドア）に巻き込まれたようだ

「ただの素人が何で?と思いましたが・・・結界に対して絶対的な能力(ちから)があるわけですね」

「幻想殺しだ・・・以後よろしく・・・」

「で、何のようです?ああ、報酬ならそこの女を剥いちまってもいいですよ?」

「それはいいものだけどよ、俺はそんなことよりやりたいことがあるんだよ」

ダッと上条がアニェーゼに向かって一直線に駆け出した
この状況で相手がやることは一つ、殴ること。しかし、それは同時に開戦の合図でもある
アニェーゼは咄嗟に腕でガードをしたが上条が繰り出した拳にそのガードごと吹き飛ばされた
拳は直接顔には当たらなかったが、殴られた腕で間接的に顔を殴られた。上条は開戦の合図としてアニェーゼを殴ったため、アニェーゼは鼻血をたらすぐらいで済んだ

「貴様ッ!何のマネだこれは!!」

「理由なんざねえよ、ただ手前らにむかついたからだ。強いて理由を挙げるとするならば、罪滅ぼしのためだ・・・・・・・・助けるんだよ、このオルソラ=アクィナスを・・・」

「この状況であなた一人で何ができるかを・・・見せてもらいましょうか!!」

アニェーゼの言葉を合図にほかのシスターたちがいっせいにに武器を構え始めた
上条はただの学生だ。しかし、ただの学生ならビクビク心の底で怯えるようなこの状況に心を１ｍｍも動かさず、むしろ笑っている、両手を広げて上体を反らし、笑っている・・・・・・

「あーあー、いいねえ・・・！今日は気分がいいっ！！ほら、さっさとかかって来いよぉ！！」

シスターたちがいっせいに上条に襲い掛かるが

ドゴォォン

教会の壁に突如爆発が起きて大きな穴があいた
そこにいたのは

「勝手に始めないでほしいのよなぁ」

建宮（たてみや）　斎字（さいじ）だった
さっき一緒だったときはフランベルジェをまともに持つことができないダメージを負っていたが、仲間の魔術によって回復している

「ああ、そういえば忘れてた」

「おいおい、それはひどいんじゃないのか？こっちはお前さんが動く前に決着をつける手筈だったんだが、恐ろしいな・・・お前さん・・想像以上に馬鹿で恐ろしいのよな。戦闘ができる集団のアジトまで一人で、しかも丸腰で来ることを些かの躊躇も持たないとは、そういう馬鹿は嫌いじゃないけどな」

（はぁーあ、どいつもこいつも、魔術サイドには馬鹿ばっかりだな）

異端者（後書き）

以上、法の書：中編でした
本当はここでステイルらを出すつもりでしたが、オルソラに首飾りをかけていないので出しませんでした

裏切者（前書き）

ふと、思ったんですけど、この物語の上条さんは原作一巻の上条さんと同一人物であり、原作二巻以降の上条さんとはまた、別人である。

そう考えると、すごく悲しいですよね

裏切者

教会内での戦闘が始まった

（とにかく、まずオルソラを安全な場所に・・・）

オルソラを抱えている上条に後ろから敵が攻撃を仕掛けてきたが、上条は身をかがめて、その反動で足を思いっきり後ろに上げ、敵の武器を吹き飛ばして敵の集団に向かって蹴り飛ばした。突然横から味方が飛んできて集団がばらけてしまい、敵はそのまま倒された。

上条は教会の出口へ進むが、その行く手を遮る敵が数人いた。もともと腕での技が中心の上条に足技を中心にするスタイルは向いていない。本来、人間の足は移動に使うものであり、攻撃に使うものではない。（と作者は考えている）おまけに今はオルソラを抱えているために攻撃の精度も著しく落ち、オルソラに配慮のある攻撃をする必要がある。よって、使える攻撃は限られるため。相手にできるとしてもせいぜい三人を倒して四人目に不意打ちされるのが関の山である。そうこうしていると、いつの間にか目の前に槍を持った女性が飛び出し、あっという間に敵の集団を倒した。

「助かった。またな」

（上条にしては珍しく）軽くお礼をして上条はその場を去った

外へ出てみると結構な人数が待ち構えていた。

やはりオルソラを護衛しながら闘うのは上条向きではないため、逃げることにした。

逃げて逃げて逃げて逃げて、そしてたどり着いたのは小さな建物。

「とりあえず、ここならしばらくは見つからないだろ」

バリケードを張ろうとしたところ、ちょうど建宮が入ってきた

「たくっキリがねえのよ」

「おい、建宮！」

「ん？」

「ちょっと頼みたいことがある・・・」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ギィという音を立てて扉が開いた

「待　た　せ　た　な　」

「・・・・・・・どう考えても、あれだけの数の中で自由に動けるとは思えないんですけどねぇ」

「簡単。オルソラは他の奴に託した。そして、後はみんなでがんばってくれてる」

「それって単なる囮作戦でしょう？オルソラは言ってましたよ？『彼らは信じることで行動する』と、まったく笑っちまいますよね？結局あなたも誰かをだまして行動していると」

「いや、むしろ俺と一緒にいることが危険なんだよ。お前らわかってねぇだろ？俺をそばに置いとくのがどんなにアブないことか」

「それなら、さっさと片付けられちまってください」

アニェーゼが護衛に腕で合図をだして護衛たちは戦闘態勢に入った

「来たれ十二使徒の一つ――――」

建宮を回収しに来たシスターと一緒にいたシスターが呪文を唱え、金貨袋三つに小さな羽が生えて宙に浮いた。宙に浮いた金貨袋はそのまま上条に向かって一直線に落ちてきた。中には金貨がぎっしり詰まっているため、結構な重さがありそうだ。しかし、金貨袋は上条に直撃せず、二つは上条によって解除され、もう一つは地面にめり込み、上条の足で踏まれていた。

「たしか、金貨袋はマタイの象徴、マタイ伝承をモチーフにした魔術か・・・って、俺ってなんでこんなマイナーなことはしっかり覚えてて、勉強のことは覚えてないんだ?」

自分の馬鹿さにげんなりしつつ、足元の金貨袋に右手で拾い上げて解除し、金貨袋はただの重い金貨袋になった。

「さて、ネコババはいけないし、ちゃんと落とし主に返してあげよう!ほら、お嬢ちゃん!落としたよ!」

上条は金貨袋を軽く振りかぶって小さいシスターに投げた。金貨袋はシスターの頭に向かっていき・・・

「きゃいんっ!!」

見事におでこに当たって倒れた

「運がよければ生きてるだろ。オーケー、残りの奴ら。さっさとかかって来いよ！」

数秒間の間をおき、残りのシスターたちがいっせいに襲い掛かってきた。上条はまずその中の一人を蹴り飛ばして団体を崩し、それに目が行ってしまった一人に掴み掛かって頭突きを喰らわせて、また襲い掛かってきた一人に向かって突き飛ばした。体制を立て直した数人の中の一人に拳を突きさし、残り三人で二人を延髄チョップで昏倒、残った一人の鳩尾を殴って昏倒させた。

「さて、残りはテメェだけだ」

「司令たる私を潰せば全攻撃を潰せると？いいでしょう、ちょうどこっちも退屈しちまっていたところなんですよ。万物照応。五大の元素の元の第五。　平和と秩序の象徴『司教杖』を展開。偶像の一。　神の子と十字架の法則に従い、異なる物と異なる者を接続せよ」

カーン

杖で床を叩く音が響いたとき、上条は股間に何やらいやな汗を感じた。

「ノォォォォォォォ！！！？」

神裂との闘いを思い出してあわてて股間を右手で押さえると右手で何かを壊したと感じた

「おまっ危ねえだろ！何なの！？魔術側の女どもは上条（かみじょう）さんの下条（しもじょう）さんに恨みでもあるんですか！？！？」

「戦闘において得体の知れない相手を一撃で沈めようとするのは当然のことでしょう？」

「他に急所あるじゃん！！なんで金●！？」

「そうですか、なら他の場所を打ってあげちゃいましょう！」

カーン

また同じ音が鳴り響いた。

右側にいやな予感がした上条は頭の右辺りに手をかざした。案の定、右手が何かを打ち消した。

しかし、右手が右側に行ってしまったということは、左側はスキだらけ。アニェーゼはそこを狙って再度杖を叩き付けた

カーン

上条は左側に右手をかざそうとするが

ドゴッ

という音がして上条は右に吹っ飛ばされた。

それを見逃さずにアニェーゼは杖を叩く、上条が吹っ飛んでいった方に攻撃が行き、上条はドア付近まで吹き飛ばされ、次は背中を打たれて前に吹っ飛んだ。上条はめちゃくちゃに動くマリオネットのように弄ばれていた。何度目かの後、上条は体勢を立て直して次の攻撃を避けようとするが、

ドカッ

「ぐはっ！！」

吹き飛ばされた

「単調に避けられちまうなんてことはありませんよ。動きを先読みして攻撃をしかけちまえば、獲物は自分から攻撃を位に行くのですから」

そう言って上条をアニェーゼは嘲笑う

（先読みか・・・なんだ・・・俺の神の導き《アドバイス》の予知より精度悪いじゃねえか・・・だが、目の前が真っ暗だ・・・予知ができねえ・・・どうすれば・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ああ、こうすればいいのか・・・・・）

上条はアニェーゼに向かってダッシュした。

「なんですか？あきらめちまったんですか？ならお望みどおりにしてさしあげましょう」

上条は走り続ける。アニェーゼが杖を叩きつけ、その音が鳴り響いても走り続けている。

はずだった

カーン

ドガンッ

「っ！？」

上条の頭蓋骨を砕くはずだった衝撃は上条の目の前に落ちた

（そんな！奴はずっと同じスピードで走り続けてた！だから衝撃が来るころにはあそこに立ってたはず！）

パキィィン

気がつくと上条がすぐ目の前まで迫っていた

バキッ

「ぐッ！」

上条の男女平等パンチで後ろに飛ばされた

「何故？ってか？簡単だよ。昔読んだ漫画で体勢を変えずに後ろに下がる技術をムーンウォークの要領でやった。相手の正面にいて、相手の頭をかち割ることを考えいていた奴に俺が後ろに下がってるなんてわからないだろうからな」

ここで付け足すように言った

「まあ、人の頭をかち割るのに頭に注目していたから、ムーンウォークの要領でやるってのは意味がなかったけどな」

上条の黒い笑みでアニェーゼは昔を思い出した

（また、戻るのか？あそこに？）

ゴミ捨て場でうずくまっていた映像がアニェーゼの頭の中に鮮明に映し出された

「いや、だ、」

「あ？」

「戻って、たまる、か、」

「・・・・・・お前がどんな人生を送ってきたかなんて俺は知らねえ」

「戻ってたまるかっ！！」

「お前の負けだ。アニェーゼ＝サンクティス、あきらめてもう一度やり直せ！！」

上条の拳がまっすぐアニェーゼの顔に向かう。一直線に

「ぎっ！いっ！・・・」

突き刺さった。後ろに思いっきり吹き飛ばされ、偶像に打ち付けられた

「もっと派手にキメたかったなぁ」

無表情で上条は呟く

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「んっううぅ・・・・んあ？」

上条が病院で目が覚めるのはこれで三度目である

「起きましたか」

「神裂か、何のようだ？」

「えっと、オルソラ＝アクィナスのその後の動向について伝えに来たのですが」

「で、どうなった？」

「オルソラ＝アクィナス及び、天草式はイギリス清教の傘下に入ることで話がおさまることになりました。これは、ローマ正教の報復、暗殺を防ぐという役割が大きいようです。オルソラが持っていた偽の解読法を公開し、これが誤訳とわかれば彼女が『法の書』がらみで追われることはないでしょう。それと・・・」

「ん？まだあるのか？」

「今回は、迷惑をかけて申し訳ありませんでした。一度だけでなく、二度も救っていただいて・・・」

「何言ってやがる。お前らが助かったのは俺が私情でオルソラを救ってたまたまお前らも助かっただけだ。それに、俺は私情で動くの

は今回限りにする。いつも助かるとは思うなよ？」

ぶっきらぼうに答える上条を見て神裂はやさしく微笑んだ

「あなた、変わりましたね」

「変わってねえよ。俺は生まれてから一回しか変わってねえ」

「そうですか。それでは私はこれにて失礼させていただきます」

「おう、帰れ帰れ」

神裂が退室するとお決まりのように誰かが部屋に入ってきた

「とーま！大丈夫？生きてる？」

「足はついてる」

「よかったぁ・・・！とうまってば、一人で敵のアジトに乗り込んじゃうんだもん。あとはイギリス清教が何とかするって言ったのに」

「言ってんだろ？今回は私情で動いたって。そういえば美静はどうした？」

「え？さっきまで一緒にいたんだけど・・・」

「とりあえず、お前は先に家に帰ってろ。家にいなかったら俺が探しておくから」

「うん、わかった。じゃあね、とうま」

ガララ

ピシャ

「さて、と」

上条はおもむろにベッドの上で立ち上がり、ジャンプして思いっきりベッドに衝撃を与えた

「イタッ！！」

ベッドの下から物音と同時にかわいらしい声がした

上条はそれを引きずり出すと

「やっぱりそこにいたのか」

「いつから気づいていたのですか？」

「ずっと起きてからだよ。何してやがった？」

「え、えっと、別に私はベッドに盗聴器とカメラを仕込んであなたのあんなことやこんなことを録画しようなんて思っていませんよ？と美静は思わず真実を話しつつ嘘を吐きます」

「そうかそうか、そんなに死にたいようだな！？この　変　態　がっ！！」

ギャーギャーワーワー

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

病院の外にて

ギャーギャーワーワー

外にもまる聞こえの上条の病室の窓を見て微笑む神裂

（上条当麻、貴方はぶっきらぼうに答えていましたけど、貴方は本当は誰かが困っていると何かと理由をつけて助けに行ってしまう恥ずかしがり屋さん）

クスッと笑う

（確かに、貴方は変わっていませんね・・・・だって、）

貴方は優しいいんですもの

番外編その弐：負けて勝負（前書き）

先に注意しときます。完全なるネタです
ただ何となく書いてみました。見ることはあんまりオススメしません、それでもよいという方のみどうぞ
携帯で書いたので話が少々雑です。

番外編その弐：負けて勝負

9月某日

「あ~，暇だ。暇です。暇なんですの三段活用」

このぶつぶつ呟いている少年は一見ただの高校生に見えるが、実は学園都市第一位の絶対能力者（レベル６）である。なぜ彼がこんな状態なのかと言うと・・・

「インデックスは小萌先生ん所、美静は調整でカエルん所」

だからである

そこへ何者かの影が迫る

「お前か？噂の絶対能力者（レベル６）ってのは・・・」

「誰だ？お前は」

「俺は夜刀神　弧影、この学園都市本当の最強の能力者だ！研究員どもは馬鹿だから俺を強能力者（レベル３）ってつけてるけどよ、俺が本気出せば学園都市第一位の能力者なんか赤子も同然なんだよ」

「ふーん、んで？どんな能力なの？」

「答えてやるよ、俺の能力は確率変動（ゴッドダイス）だ。純粋な１００％と０％以外の確率を自由に操れる能力だ。例えば、今お前の所にトラックが突っ込んできて、お前に衝突する確率は０％じゃないってことは？」

キキィーッ

「!?」

突如突っ込んできたトラックで上条の姿が見えなくなった

「おやおや、お前につっこむ確率は0%だったようだな。お前運がいいな」

なんと上条は平然とそこに立っていた

「ったく、行きなり攻撃してきやがって。つまり、お前は俺を倒して強さを証明し、絶対能力者（レベル6）になる。そういうことか」

「ご名答!俺はお前を倒して学園都市最強になるんだよ!!研究員どもは俺を強能力者（レベル3）止まりになるとかほざいていたけどよ?それが間違いだってことを証明してやるぜ!」

「お~ け~ お~ け~、そんなに妄想《幻想》を証明したきゃ。相手をしてやる・・・だが一つ言いたいことがある」

「?」

「お前、その能力が本当にあると思ってんのか?」

「どういうことだ!?」

夜刀神は明らかに動揺している

「例えば、上から鉄骨が降って来るとしよう、その鉄骨が降ってく

るのは１００％だから降ってくるんだろう？だったらテメエの能力で操作できるはずがないだろ？つまり、さっき俺にトラックが突っ込んでこなかったのは、テメエの能力はニセモンだったってことだ」

「そ、そんなはずは、お前の頭上にそこの工事現場にある鉄骨が降ってくる確率は０．０００４３％！だからその鉄骨はお前の頭上に降ってくるッ！！！」

夜刀神がヒステリックに能力を発動させた。しかし、上条の頭上に鉄骨は降ってこず、夜刀神はさらに動揺した

「何故だ！？何故発動しない！？」

「だぁから言ってんだろ？お前の能力はニセモンだったんだよ。テメエの確率変動（ゴッドダイス）はお前の妄想（げんそう）だったんだよ」

「そんなはずはっ！たしかに俺には能力が――「なかったんだよ，いいぜ、まだそんな妄想（げんそう）抱いてるってんなら。俺がその夢（げんそう）から引きずり出してやる」

上条は夜刀神の懐に潜り込んでいた
それに気づいた頃にはもう、遅い。上条の拳が夜刀神の顎を砕いた

バギャ

「オ、オレニ、は最強ノ、ノウ、リョクがアルン、ダ」

「研究員の言う通りだよ。俺のハッタリに動揺して自分だけの現実（パーソナルリアリティ）が崩れているようじゃ、お前は超能力者（レベル５）はおろか、大

能力者（レベル４）にすらなれねえよ」

ピリリ

上条の携帯が鳴っていた

『とーま！今何処にいるの！早く帰ってきてよ！』

「って・・・もう帰ってきてんのかよ」

『お腹好いたんだよ！早く帰ってこないと冷蔵庫の中身全部食べちゃうかも！！』

「何ぃ！？そうはさせるか！！」

携帯を閉じ、上条は夜刀神の『脱け殻』を無視して家まで全速力で走っていった

番外編その弐：負けて勝負（後書き）

ちなみに確率変動（ゴッドダイス）という能力はどこかにあったコピペが元ネタです。なんと言うか、納得できなかったものでして、とりあえず能力を否定してみました（全身全霊をかけて）

それと、ラストでインなんとかさんが普通に携帯を使っていたことには目をつぶってください

案内人（前書き）

ハショルべき所と、そうでない所がいまいちわからずな今日この頃
続きを書かせていただくぜぇい！まあ、基本的にアニメ版を参考に
しています。

案内人

「ねえ、とうまとうまー」

「あん？」

「地図に年輪みたいなものが書いてあるけど、これって何？何でこんなもので明日の天気がわかるのかな？」

「そりゃ、等圧線っつってな。同じ線の所は気圧が同じで、その線が密集しているところは気圧の変化が激しいってことだから、風が強くなる。それで雲の動きを予測してるんだろう。よくわからんが――――「にゃー」よお、アヌビス。元気か？」

「スフィンクスね。でも、たまにこのお姉さんは時々外れたことを言ったりするけど、おっちょこちょいなのかな？」

「調べるのは別の人がやって、お姉さんはただそれを伝えるだけだ。お姉さんは悪くねえ。あ、オシリス。ちょっとこっち来てくれ。そういえば美静は？また、調整？なんか多くねえか？」

「スフィンクスね、なんで冥界つながりなのかな？美静？調整じゃないみたいだよ。確かにカエル医者の病院に言ってるけど、何かを作ってるみたい。何かニヤニヤしていたけど、何なんだろうか気味が悪いかも」

「安心しろ、すぐに元に戻る。ほーら、ツタンカーメン。試食タイムだ」

「ス・フィ・ン・ク・ス！　それはエジプトの王様！それと、ずるいよとーま！私がつまみ食いすると怒るくせに！」

「お前のつまみ食いは最早つまみ食いじゃねえだろ！んじゃ、俺ちょっと買い物行ってくるわ。飯はここに置いとくからな」

「ムグムグ。いってらっしゃーい」

「もう食ってるし・・・」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

路地裏にて

「いやー買った買ったー。まさか、たまたま特売がやってるなんてな。ぜってー不幸がやってくるんだろうなー」

上条がこれからやってくるであろう不幸に落ち込んでいる（といっても簡単に回避できるが）とちょっと遠くから争うようなと何かが倒れるような音がした。どうせ不良(スキルアウト)どもの喧嘩だろうとそこを覗いてみると、数人の男達が二人の少女の下に倒れている。上条はその片方の少女をしっている、白井黒子、風紀委員(ジャッジメント)だ。足元に転がっている銃はどれも外部の銃。技術泥棒だろうかと考えているといつの間にか白井黒子の方はキャリーケースに座っている少女の前に跪いた状態でいた。その少女は白井黒子に何かを話している。その中にひっかかる“ワード”がいくつかあった。

『御坂美琴』『残骸(レムナント)』『樹形図(ツリー)の設計者(ダイアグラム)』『実験』

それらのワードで思い浮かぶ実験といえば・・・上条の足は自然と彼女らの元へ向かった

「“アレ”が復元されれば終わった実験は再び行われる。悪あがきしたくなる気持ちはわからなくもないわ」

「実験？」

「第二次絶対能力者進化実験ってことだろ？」

ふいにかけられた声で二人が声の主のほうへ目を向ける

「学園都市としては絶対能力者（レベル６）が二人いるに越したことはない。だから『実験』は再度行われる・・・そういうことだろ？」

「あら、あなた実験関係者？」

「まあ、そんなとこだ。質問に答えてもらおうか、その実験で妹達（シスターズ）は何人殺される？」

「さあね、でも少なくとも一万体は殺されるんじゃないかしら？」

「させねえ・・・」

「は？」

「そんなことはさせねえ・・・」

上条は駆け出した
その上条に向かって少女は躊躇なく持っていた鉄矢を三本とも上条の脇腹へ転移した。

カランカランカラン

しかし、路地裏に響いた音は空間移動（テレポート）による“性質の音”ではなく、鉄矢が地面を転がる音だった。
彼女がそれを理解すると、目の前にいた上条は腕を振りかぶっていた。それを見た彼女は咄嗟に車を目の前に転移させた

一方上条は突如目の前に現れた車に眉一つ動かさずに振りかぶっていた腕を下げ、車を思いっきり足で蹴った。
蹴られた車は車の裏にいるであろう彼女の方へと吹き飛ばされた。
地面を転がった車が止まり、上条はその車の周囲を確認したが、その少女の姿は見当たらなかった。

「ちっ！逃げられたか・・・！」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

上条は例の少女を追跡中である。
その前にいくつかの彼女に関する情報を入手していた。
名前は結標淡希（むすじめあわき）
大能力者（レベル４）の空間移動系『座標移動（ムーブポイント）』直接物体に触れずに転移が可能で、空間移動系ではトップであり、本来なら超能力者（レベル５）に認定されるはずだが、とある事故で負傷してしまい、

自分の転移で体調を狂わすほど精神を削られるために大能力者（レベル４）となっている

空間移動系は幻想殺し（イマジンブレイカー）とは相性の悪い能力で、普通に闘えば勝つことなど容易いが下手をしたら先程のように逃げ切られてしまう。今度逃げられたら“オシマイ”、だからこそ次の対峙で決着をつける必要がある。そして上条は相手に逃げられないように、相手の“弱点”である『よっぽどのことがない限り自身を移動できない』つまり一撃必殺系の攻撃を無闇に仕掛けない。あくまで一撃必殺はフィニッシュ技として繰り出す

（今、美静に調べさせているが、それじゃあ遅すぎるっ！間に合わねえ・・・）

上条が頭を抱えていると、ちょうど御坂美琴が電話ボックスで何かをしていた。おそらくハッキング（クラッキング）だろう。様子からしてこの事について把握しているようだ。

「おい！ビリビリ！」

電話ボックスから出てきた美琴に上条は話しかけた。

美琴はそれに振り向いた

「何よ？」

一瞬戸惑いの表情を浮かべたがすぐに冷静な顔に戻った

「結標淡希の居場所を教えろ」

「っ！何で、アンタがそんなこと聞くのよ」

動揺して問い詰めてくる美琴に上条は冷静に答えた

「残骸（レムナント）」

「っ！？」

「今回は利害の一致だ。教えろ・・・知ってるんだろ？」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

結標　淡希は追い詰められていた。

それもそのはず、夕方に会ったあの不気味な少年。確実に少年の胴体にテレポートしたはずの鉄矢が全て少年の衣服すら破かずに外れた。その後、なんとか少年から逃げ切った先には超能力者《レベル5》であり、常盤台のエースである御坂美琴の攻撃を受けたからである

「なんなのよ・・・！超電磁砲（レールガン）の方はともかく、あの男は何！？能力を使うそぶりすら見せなかった！なのに何故？！どうやって、座標移動（ムーブポイント）避けたの！？」

ガスッ

その音がした時、頭の中で？が浮かんだが、自分が攻撃されたことはわかった。しかし、痛みはすぐには感じず、徐々に痛みを感じてきた。

自分を攻撃した武器を確認する。それはコルク抜き、見覚えのあるコルク抜き。白井黒子からキャリーケースを奪うときに使ったコルク抜きだ。

「それは、あの方があなたよりもずっと高い能力（レベル）にいるからですの」

結標が振り向いた先には、白井黒子がいた

ガスッガスッドブッ

直後、自分の脇腹、太股、脹脛に激痛が走った。
見ると痛みの源にはそれぞれ鉄矢が刺さっていた。どれも何故かしっくり来る場所に刺さっている

「慌てることはございませんわよ、全て急所ははずしておりますので。まあそれもそのはず、あなたが私にやった場所にそのままお返ししただけですからね」

思い出した。あの時、白井黒子に刺した場所だ
結標は何かを思い出し、周りを確認した

「御安心くださいまし、あの殿方はここにはいらっしゃいません。仮にも私、風紀委員（ジャッジメント）ですので」

黒子が腕の腕章を指しながら言った
その手に握ったチューブを結標に投げた

「どうぞ、ご自由にお使いなさって？私は一切の邪魔をしませんので。止血剤、案外効くんですのよ～？無様に床に這いつくばって傷

の手当てをしてくださいな。それでようやくオアイコですのよ？」

目の前の少女は邪悪に笑う
別に悪役なわけじゃないよ？

「この子供みたいな仕返し、嫌いじゃないわ」

窓際においてあるキャリーケースにゆったりと座る結標
相変わらず笑顔を崩さない黒子が言った

「あらら～、そんなに悠長で大丈夫なんですの？こんな空間移動能力者（テレポーター）の争いであることをハッキリと示してしまったら、お姉さまならすぐに駆けつけてくるでしょうね」

「！？」

ここでようやく結標の動揺が表に出た。そして、黒子の次の言葉で動揺が全て表に出た

「それにあの殿方、あなたの計画に都合が悪い事でもあるようですし、可能性は薄いですが、ここにやってくるでしょうね」

結標　淡希のあせりはピークに達していた。
どれほどなのかと言うと、心の準備もないまま御坂美琴＋上条当麻に遭遇したら速攻で能力で逃げ出すくらいだ

しかし、いくら能力で逃げ出すといってもその後の辛さは計り知れない。ここは二人のタッグに遭遇せずに速攻で白井黒子を退けて逃げ出したいところだ。黒子もそれを察したのか座っていたテーブルにあった皿を砕いて手にとり戦闘態勢に入る

「はいっ！！そこまでぇぇぇぇー！！！」

二人がビクッ！として声のした方に目がいった
そこに立っていたのは

「あー・・・こういう時なんて言ったらいいのかな？」

上条当麻だった

そう認識したときには結標はすでに隠し持っていた拳銃を発砲していた
油断していた上条があわてて転がって回避して立ち上がるころには結標はすでにいなかった
しかし、上条はそれに対して大した反応はせず、ただ何かを待っているようだ

「何をしてらっしゃるんですの！？早く彼女を追いかけませんと！！」

上条はそれに見向きもしない。ただ黙って何かを待っている
黒子はそれにイライラした。と、その時、上条が大きめの声で呟いた

「来た」

「？？何が来たんですの？」

怪訝な顔をしてそれについて尋ねると、突如大きな揺れがきた
黒子はすぐに把握した。自暴自棄になった結標淡希が最大重量である量の重い物体をこのビルに転移させようとしている。この数分間、きっと何度もそれを計算したはずだ

「何をしていますの！？さっさとここから離れてくださいですの！」

上条の体を揺するが上条は余裕の笑みでいた。風紀委員（ジャッジメント）として彼を見過ごすことはできない白井黒子は揺すり続ける。彼は持っていた携帯耳を当て、誰かと話した。携帯はさっきっから誰かと通話中の状態だったようだ。

「よし、ビリビリ。この階の天井をビルが崩れない程度にぶっ壊せ！」

『よし来た！』と携帯からかすかに聴こえた親愛なるお姉さまの声

ふと窓の外を見ると向かいのビルに微かに青白い光が反射して見えた。そのリズムはまるで電気がバチバチとなるように・・・

「お、姉、さま？」

そして、

橙色の線を引いた鉄片が窓を突き破り、このフロアの天井を突き破った。その線を引く鉄片は何故認識できたのかが不思議なくらいな速さで視界から消えた。そして、この威力・・・まさしく超電磁砲（レールガン）

上条は突き破られた天井の上にある空間の歪み、まるでトランポリンを裏側から見ているような歪みを見ながら超電磁砲（レールガン）の爆風で吹き飛ばされて自分に向かってきたテーブルを蹴って床に落とし、立った状態にした。そのテーブルにジャンプして乗っかって更にジャンプをした。身長こそ３０ｃｍほど足らないが、マイケル・ジョーダンに匹敵する跳躍力で超電磁砲（レールガン）によって突き破られた天井の穴の縁に捕まり、勢いをつけて飛ぶように空間のゆがみに手を押し付けた。空間の膨らみは上条の右手によって押し戻されていった。上条は縁に足をかけ、さらに“膨らみ”を押した。そして、その“膨らみ”が平らになると同時に・・・

ドゴン！！！！

何かが爆発するような音がした

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

どこかの道にて

結標淡希はくたくただった
自分を追っていた謎の少年から逃げるために今日三度目の自身の移動を行い、精神は既にボロボロだった

「でも、もう安全なはず、今頃あいつらはペシャンコよ・・・」

それでも、不安は拭いきれなかった。あの少年が何故か生存しているような気がしてならない。だが今はそんなことを気にしている場

合ではない。たった今、連絡しようと仲間に無線機で連絡をしたが、
仲間は既にダメになっていた
でも今は逃げるしかない

ビルに囲まれた広い道に出たその道を半分ほど割ったとき、

「よお、素敵な贈り物（プレゼント）・・・ありがとよォ」

今日何度目かの聴きたくない声を聴いた
それは自分が今いる道路の向こうから聴こえた
だが、結標は冷静だった。もう何度も聴いている声、それにいくら
アッチが不気味だからといっても周囲をこっちの得意な地形に変え
てしまえばこっちのものだ。あっちも苦戦するはず、そして逃げら
れるはず

「そうそう、ここみたいなとこが良かったんだよ。あんな狭い路地
裏やレストランじゃ話にならねえし、白井もいないほうがいい」

「へえ・・・でも、私が近くから“物”を取り寄せればこんな地形
なんかすぐに変えられるけど？それならアンタだって――」

結標の言葉は途中で途切れた。

カツ

カツ

カツ

靴の足音のようだ。上条が来た方向とは反対から聴こえる
その人影が立ち止まり、道を塞いだ

「おいおいおいィ。何なんですかァ？このふざけた光景はァ！？こちとら無理して出て来たってェのによォ」

一方通行（アクセラレータ）
学園都市最強の能力者

「何で既に別の奴が捕らえてんだァ？わっけわかんねェ」

その姿を見て結標は絶句した

（まさか・・・一方通行（アクセラレータ）・・・？あの超電磁砲（レールガン）ですら敵わないっていう、学園都市最強の超能力者・・・！！む、無理よ・・・あんな奴に・・・あんな奴（バケモノ）に敵いっこない！！）

一方通行（アクセラレータ）は涙目になっている結標を無視して上条に言った

「おい三下ァ！こちとら無理して出勤したんだァ！だからお前が引き下がれ！」

それに対して上条は学生の喧嘩の前にある争いの時の学生の顔で反発した

「はあ！？こっちだってさっきこいつに殺されかけたんだぞ！その程度の理由でやっかよ！」

「うるせェよ！こっちだってなァ！飼ってるくそガキが煩くて迷惑してたんだよ！」

「なんだとぅ！こっちなんかなあ！――」

（何かわからないけど・・・チャンス・・・？）

この恐ろしい二人は今は口喧嘩に夢中でこっちは蚊帳の外の状態だ。

（ならば、二人とも頭に鉄片でも飛ばしてあげれば・・・！！）

結標は迷わず二人に攻撃を仕掛けた・・・が、

パキン

キュイン

二人とも妙な動きをしただけでそれ以外は何も変化がなかった

「な、何で？何でテレポートされてないの？」

両者とも同時にニヤリと笑った

そして答えた

「「何って？俺はただ」」

「『右手』で髪を」

「首の『電極』を」

「「いじくっただけだが？」」

それを聞いた結標は絶句

「さァーてェ！さてさてェ！」

「男と男の闘いにぃ！」

「水さしてくれちゃったねェ！三下くゥン！？おい、ツンツン！言いたいことはわかってるよなァ？」

「ああ、わかってるさ」

うん、と頷く変人二人組

「「そういう悪い娘にはお仕置きが必要だよなぁ（ァ）！？」」

「ひ、ヒィ！！！？？」

今宵、仲の悪い悪魔が二体。何故か手を取り合った

案内人（後書き）

あわきん「私が悪かったわ、反省する。次は絶対反省する」

以上、ツンデレ悪条さんの回でした。

ツッコミはナシでお願いします。できればでいいです。ちなみにボケツッコミはオーケーですよ

番外編その参：非道にたてつく紅い刃（前書き）

とある魔術の禁書目録（インデックス）のＳＳ２巻を見た方々にはわかると思いますが、原作９巻の大覇星祭の使徒十字（クローチエディピエトロ）を使ったリドヴィア＝ロレンツェッティはこの物語で死んだ上条（かみじょう）　刀夜（とうや）の影響で穏便に済ませられる使徒十字（クローチエディピエトロ）を使ったわけですから、次話は遅れることになると思いますので、その繋ぎとして番外編を書かせていただきます。

番外編その参：非道にたてつく紅い刃

上条当麻は不幸だ。しかし、今この状況ではその不幸が嘘のような出来事が起こっている。何故か？それは、気まぐれで買った宝くじ一枚が当たったのだ。詳しい額は言えないが5桁は当たった

「何か嫌な予感がする・・・」

こんな大きな幸福を手に入れてしっぺ返しがこないはずがない。きっと、風が来たりするなどして宝くじを飛ばされてぬか喜びさせられるかもしれない。いや、もっと大きな不幸がやってくるかもしれない

「す、捨てちまおうか？いやいやいや・・・しかし・・・そうだ」

何かを思いつき、上条は宝くじ券を手のひらに乗せてみた、すると、相当強い風が吹いた

（これで券が飛べば・・・）

案の定、宝くじ券は風に連れ去られた。上条はため息を漏らすも、心の奥では安堵していた。

が、

「あれ？」

しばらく、開いていた手のひらにまた同じ宝くじ券が乗っかってきた
さすがにこれには上条も観念した。なんせ大金なのだから

「よ、よーし！さっそく換金しにいくかー・・・」

大金を手にしたと思えないほど目は渇いている

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

銀行にて

「で、こうなるわけね・・・」

上条はやはり不幸である。
道を歩けばトラックが突っ込んでくる、建設中のビルの下を通れば鉄骨が降ってくる、レストランで食事に行けば食中毒となる。なら、銀行に行けばどうなるか？

「おい！そこのテメエ！何ぶつぶつ言ってやがる！！」

目だし帽の男が上条に怒鳴る

「おら！さっさとこの袋に金詰めろ！！」

銀行に行けばどうなるか？
A：銀行強盗に遭遇する

（やっぱこうなるのですかー！？）

もちろん上条の不幸はこれだけには止まらず、銀行強盗が金を奪っ

たあとにある警察の行動を制限させる効果のある盾選び、もとい人質選びに上条は選ばれてしまった

「おいそこの！さっさと立て！」

リーダーらしき男が銃をつきつけながら言う

「俺達の盾になってもらおうか？」

それに上条は

「イヤなこった」

男の銃を持った手を掴んで捻って銃口を自分から外し、その腕を引き寄せて男の腹に膝蹴りをかました

ドパンッ！！

と何かが破裂する音がした。もちろん、その音は上条が相手の腹を蹴った音である。その尋常ではない音がする程蹴られた男は当然吐血した

上条は周りを見た。銀行強盗は３人、こいつを含めれば４人。

スチャ

一人が上条に向けて銃を向けた。それに気がついた上条は、倒した男の銃を盗って構えた男に向けて撃った

パン

パン

二つの銃声が響き渡った。
一つは上条を狙った男に当たり、もう一つは上条に重傷を負わされた男に当たった

（残り二人！）

今度は残った二人が同時に銃を向けてきた
片方に男から奪った銃を投げ、もう一人の方に弧を描くように走った
上条が走ってきて男は反射的に引き金を引いた。

パァン

ブシャッ

上条には当たらず、代わりに上条に銃を投げられた男に命中した

「あ！！す、すまねぇ！」

あわててその仲間に駆け寄ろうとしたが、

ゴギャッ！！
いきなり横から飛んできた拳が顎に当たり、男は拳と壁に顎が挟まれる形で下顎を粉砕された

男が倒れて数秒後、ウオォォォォォ！！！と周囲から歓声、を無

視して上条はカウンターに宝くじ券を叩きつけて、

「すいません、換金お願いします」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「いや〜、一時はどうなるかと思いましたが、よかったよかった」

財布に換金した金を入れつつ言った

「さて、どこに使いましょうかねえ」

とりあえず最初はコンビニで何か買おうということになった

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「・・・・なんでお前が？」

「・・・こっちが聞きてェよ」

コンビニに入って遭遇したのは白い髪、白い肌、赤い目、ウルトラマンみたいな――「血流操作と生態電気操作どっちがいい？」あ、すんません。電極の付いたチョーカー・・・ご存知のとおり学園都市最強の超能力者（レベル５）、一方通行（アクセラレータ）である

「んで？またコーヒー大人買いでもしてんのか？アセロラベータ」

「それ前にも聞いた。別にィ、お前にはカンケェねェだろォが」

「つーか少し痩せた？大丈夫かアクセロリータ」

「一方通行（アクセラレータ）だ。誰がロリコンだよ。ちなみに8月31日に脳にダメージを負って演算能力と言語機能に障害を持った。それで今は演算は外部に任せてる」

上条のからかいにイライラした様子で答える

「脳にダメージって・・・お前しぶといんだな。さすがセロリたん」

ブッチン

「そォーか！そォーか！！テメェ死にてェようだな！！相手になってやるよォ！！」

「まぁーて！待て待て！落ち着け！上条さんだってわざとじゃ――」

「知るかボケェ！！！」

「ギャーーーー！！」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「くそぉ・・・なんでこんな目に？」

所々に“すす”を付けた上条が呟く。ついさっき黒翼を発動した一方通行（アクセラレータ）から命からがら逃げてきたところだ。さすがの上条も黒翼とはもう闘いたくないから逃げてきた

「とりあえずスーパーにでも行くか・・・コンビニより安いんだし」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

スーパーにて

（こちらスネーク（上条）、敵兵を発見した。とりあえず隠れる）

スーパーに来た上条だが、そこで思わぬ人物に遭遇した

フレンダ＝セイヴェルン
上条が以前潰し損ねた暗部組織『アイテム』の構成員
発見され次第、彼女は上条を攻撃してこようと爆弾の嵐を繰り出すに違いない。もしそうなったら店が大惨事になり、弁償として宝くじの金を失ってしまうかもしれない。それだけはなんとしてでも避けなければいけない。

（この上条当麻には任務がある！それは奴に見つからずに買い物をすることだッ！！）

別に無理して買い物なんてしないでそのまま店から出て行けばいいのだが、なんやかんやで楽しんでいる上条にそんな考えなんてものはないッ！

「フッ・・・チョロいぜ「誰がチョロいって？」・・・あ」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

つい先程、スーパーでB－29からの爆撃から逃げてきた上条が今向かっているのは映画館

「と、とりあえず、できるだけ人気のない映画、C級映画とか・・・

」

それでいいのか・・・？上条・・・

そうして見えてきた映画館、やはりいたのは『アイテム』構成員、絹旗（きぬはた）最愛（さいあい）。姿を認識した上条は速攻で回れ右して戻ろうとすると、

ガンッ

ドカーーン

すぐ前にある車の上に後ろから跳んできた車がぶち当たって大きな爆発が起きた。振り返った上条の見たものは、絹旗の満面の笑みだった

「超見つけましたよ。その汚い××××を超ヒキチギッテやりましょうか？」

「・・・・」

〜〜

「くそっやっぱりこうなると思いましたよ！結局上条さんに幸福なんてありえないのさ！！」

ウルトラマン、Ｂ―２９爆撃機、賊刀『鎧』からの襲撃に会い、上条はもうヤケクソになっていた

「よーし！！！こうなったらヤケ食いだぁぁぁぁぁ！！！！」

そう叫ぶ上条を見て道行く通行人は上条を哀れむような目で見ていた

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ファミレス　『Ｊｏｓｅｐｈ』にて

「いらっしゃいませー、一名様ですね」

「はい、そうです」

「お煙草はお吸いになり――――」「吸うわけねぇだろ！さっさと案内しろよハゲ！」

暴言を吐かれても店員は相変わらず笑顔で接してくれている

「すいません、今席が満席でして、相席でもよろしいですか？」

いつもなら拒否して待つか帰るかしているが、上条は「もうどうとでもなれ〜」状態なのでそれに承諾した。案内された席には客が二人座っていた。店員がその二人に事情を説明すると、二人とも頷いた。どうやらＯＫのようだ

「それではお客様、ごゆっくｒ――――」

バシュン

店員が言い終える前に上条に光線が放たれた。それを当然のように打ち消す

「また会ったなぁぁぁ！！この×××野郎！！！」

『アイテム』リーダー　麦野（むぎの）　沈利（しずり）

同じく『アイテム』構成員　滝壺（たきつぼ）　理后（りこう）

「ブ　チ　コ　ロ　シ　確定ね！！！」

バシュンと放たれた光線の嵐

「うわっ！来た！麦のんビーム来た！！」

「だぁーれが『麦のん』だこのヤロー！！！滝壺！！起きろぉ！！」

この日、さすがに諦めて帰った上条だが、結局、宝くじの金は全部インデックスに食いつぶされることになった

「不幸だ・・・」

番外編その参：非道にたてつく紅い刃（後書き）

『アイテム』と上条さんを再会させたかった、悪条さんに不幸だと言わせてみたかった。という願望からこの番外編は生まれました途中、面倒くさくなったので文が雑になりましたことを謝罪させてもらいます。ごめんなさい

恩師（前書き）

今回も相当手抜きな文章ですが、繋ぎのようなものなので、良しとしましょう。

恩師

「今日は大覇星祭ッ！！！」

「・・・・・・・・」

意気込んで叫ぶ美静を尻目にパンをモグモグと頬張っている上条

「大覇星祭ッ！！！！」

「ぶげらっ！？」

二度目の叫びで美静は上条の頬にビンタ――――ではなく、掌底を叩き込む

「何しやがる！！」

「それはあなたが聞かないからです！！」

「だってさー、運動会とかだるいじゃん？どうせうちの高校は弱くて楽しめないんだしよー」

「いいじゃないですか！スラ●ダンクだって弱小のバスケ部が全国レベルまで強くなったじゃないですか！！」

「そうだよ、とうま！『あきらめらたそこで試合終了』なんだよ！！」

二人がやかましいので上条は耳に指を突っ込んで音を塞いだ

「何がスラム●ンクだよ・・・漫画なんかに影響されてんじゃねえよ！つーか、美静、語尾はどうした？語尾は」

「いや、あの、なんか面倒くさくなったので、語尾とってもいいですか？と美静は無理して語尾を一時的に復活させます」

「いやいやいや、やめとけって。ほかの丁寧語を喋るキャラの立場がなくなる」

「・・・わかりました。では、語尾を完全復活させますと美静はしぶしぶ復活させます」

「んじゃ。大覇星祭楽しんできてね〜」

上条は机に落としたパンを拾い、再び頬張る

「何言っているんですか。あなたも来るんですよと美静は引きこもりのお母さんのごとく引きずります」

その首根っこを美静が引っつかみズルズルと引きずっていく

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「あああっづうううう・・・」

開会式が終わった直後に上条が目を魚のように見開いて汗ダクダクで呻いた

「何だ何だよ何なんですか三段活用ォォォォ・・・！校長先生（エンドレス）の挨（ストーリー）

拶百連発とか聞いてねえよ・・・！！」

更に汗を噴出し、頭を抱える上条

「大体よォ・・・一体学園都市に何百人校長先生がいるんだ？つーか別に各学校で一人で挨拶すればいいじゃん・・・！！何でイッペンにやるんだよ・・・」

そんな彼の叫びなど誰も聴いちゃいない。何故ならみんな同じく暑いのだから。こころなしか水分が全部枯れたように見える人もいた。

その中で上条に答える者は一人

「定めなんですよ。大きい学校ほど校長先生の挨拶（エンドレスストーリー）は長くなる。学園都市は最早ひとつの学校なんですよ。と美静は悟ったように語ります」

平然と喋っているが彼女もまた、顔が真っ赤で目はいつも以上に据わっている

「とうまー！」

「あ・・・？」

ミイラのような風貌で声の主の方へ顔を向けるが、

「おなかすいたー！」

本人はそれを見ていないかのように明るい笑顔で告げた

「何で、んな糞暑いのにそんなに喰えんだよ！！」

「それは、私の日ごろの行いのおかげで主が私に加護を与えているんだよ！！」

上条のツッコミに胸を張って自信満々に答える

「それにしても、日本食って言うのは、まさに誘惑の塊かも・・・！」

インデックスがジュルリと涎をたらす。その目はいつしか、食料が尽きたときにインデックスが三毛猫（スフィンクス）を見る目と似ていた・・・・・ような気がした

「ああ、後でな」

「“後で”？」

インデックスの目が突如死んだ魚のような目に変化した

「えーと、・・・私達は最初の協議に出るんで、それがもうすぐ始まるのでもう行かなきゃならないんですよ。と美静はインちゃんをかわいそうと思いつつも背を向けます」

インデックスの目が更に見開かれた。もう見開きすぎて目がカッサカサになるくらいだ

「・・・あー、とりあえず焼きそば３つくらい買っといてやったからこれでも食っててくれや」

インデックスは多少機嫌が直ったようだが、まだ不機嫌なようだ

（（いや、三つで充分だろ・・・））

こころのなかでツッコンだ

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「「・・・・・・・・何だ？この有様は・・・（と美静は呆れたようにそれらを見つめます）」」

「うっっっだーー・・・やる気でねぇー・・・」

上条のクラスメート達はまるで運動会終盤の競技を終えた後のような空気になっていた

「いやいや、何があったんだよ？！」

死に状態ながらそれに答えたのや青髪ピアス

「いやー、カミやんも体験したからわかるやろ？校長先生の挨拶百連発（実際は１５連発）、お喜びの電報五十連発。カミやんは体力あるから耐えられたけど、わいらはもうだめやねん・・・」

言い終えた直後に青髪は力尽きた

「どうします？私たちもグダグダしちゃいますか？と美静は提案します」

「ああ、そうだな・・・」

そう言って上条が後ろに倒れようとした瞬間

「何なの!?その無気力感は!!」

後ろに倒れた上条がフリーズした。表現するならマ●リックスのアレみたいなポーズだ

「まさか貴様がだらけきっているからこうなったのんじゃないでしょうね!?」

「なんだと?俺はなあ!最早やる気を出しすぎて殺気までだしちまうほどやる気を出してたんだよ!!それなのに、この有様さッ!!!」

吹寄の問い詰めに対して上条が反論する

「それは貴様がみんなの元気を吸い取ったやる気じゃないのか!?」

「んなわけねえだろ!!暑さでハイになっただけだ!!」

さっきまで炎天下で天国へ行きかけていた者の言い争いとは思えないほど白熱していた。周りでは野次が飛び交っている

しかし、やはり疲れてきたのかどんどん勢いは弱まっていき、最終的には青春ドラマにありがちな殴り合いの後みたいな感じになった。

(絵が)

しばらく二人が黙っていると、近くでなにやら男女のいい争いが聴こえてきた

「違うのです・・・絶対に・・・のです!!」

「ふん、馬鹿馬鹿しい・・・に決まってる・・・」

上条らがそこを覗いてみると、そこにいたのは上条のクラスの担任の月詠小萌だった。

「だから!!ウチの設備や授業内容に不備があるのは認めるのです!でも、それは私達の責任であって、生徒達の責任ではないのです!」

「はん。お宅の不足は全て生徒の質が悪いのが原因でしょう?聞きましたよ?お宅の能力測定もボロボロだったとね。やれやれ、失敗作を抱えると苦労するんですねえ」

男は味方でさえイラつかせそうな調子で言った

「せ、生徒さんに良い悪いもないのですよ!あるのはそれぞれの個性だけなのです!」

「己の力量不足を隠すための言い訳ですか?はっはっは、なんとも夢のある意見ですが、私がそれを打ち壊してみせましょう。ウチのエリートクラスで、お宅の落ちこぼれどもを完膚なきまでに叩きのめしてさしあげましょう」

「なっ・・・」

「ま、一応手加減はするつもりですが、弱すぎた場合はどうなるか保証はできませんがね」

はっはっはーと立ち去って行った

「違いますよね？・・・」

小萌先生がポツリと呟いた

上条は小萌先生から目を離した。
見る必要がないからだ。小萌先生は涙を流している。上条は去っていった男の先生のあとを追った

「おい！待てよ！」

「ん？・・・おやおや。月詠先生の所の負け犬君じゃないか。何しに来たんだい？まさか敵討ちとか？」

「いや、・・・あんたと賭けをしに来た」

毒気を抜かれたように眉を上げる男の教師

「賭け？で、内容は？」

「この競技、アンタんところの生徒をぶっ殺して、勝利したら、倒した生徒の数×一秒だけグラウンドの真ん中で土下座しろ」

教師は、はあ？とでも言いたげな顔をした

「それで、君の負け条件とその罰ゲームはなんだい？」

「競技に負けた場合、俺が倒した数＋そっちの特定の奴が倒した数の分だけ俺がお前にグラウンドの真ん中で土下座してやるよ」

「ほう、大した自信だねえ。楽しみにしているよ、君の土下座をね」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「もう一度だけ聞くぞ？本当にやる気がねえのか？」

クラスメート数人の胸倉を掴んでそいつらを代表に上条は言った

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

棒倒し開始直前

先程の賭けをやるために、自軍の棒を守るグループと敵軍の棒を倒しに行くグループで、上条は攻撃側を選んだ。スタートの合図の直後、上条は真っ先に棒――ではなく、敵を粉砕するために敵軍へと突っ込んでいった

「「「「「「「おお」」」」」」」

上条はそうとうな量の殺気を出しているが、他の仲間もそれに負けず劣らずな殺気をだしている。

「おおおおおおおおおおおおおおおおって、テメエらなに人の影に隠れてんだよ！！？」

上条の右側の影に隠れるように後に続く二人、土御門と青髪ピアスだ

「だってぇーなー」

「カミやんの影に隠れてれば能力があたらないからだにゃー」

「自分の身ぐらい自分で守れや！！　さっさと離れねえと第一、第二の防御にテメエらを使うぞ！！」

「ちぇっカミやんったら、いけずやわ〜」

上条が再び前を向くと敵は既に十数メートル先まで来ていた。そして、自軍の先頭の上条と敵軍の先頭が激しくぶつかり合った

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

勝利

上条の高校

相手の被害

１３０人

上条の成果

１０８人（ウチ３人の自分だけの現実（パーソナルリアリティ）にダメージ）

賭けの相手の罰ゲーム

上条がやった人数１０８人×１秒＝１０８秒

ちなみに、そのＤＯ☆ＧＥ☆ＺＡ映像はやっぱり放映された

恩師（後書き）

とりあえず、皆さんが上条さんの非道さを再確認したところで、次話を書こうと思います。

追跡者（前書き）

結局、リドヴィアは最初から使徒十字（クローチエディピエトロ）を使うということにしました。だって、リドヴィアが使いそうな物騒な学園都市制圧作戦で、しっくりくる方法（オリジナル）が思いつかないもんですからね。だからと言って、この話を無視して上条さんの大覇星祭を楽しむだけの話だと、つまらないし・・・

追跡者

上条当麻は今ピンチだ。
いや、死亡フラグが立ったといった方がいい。上条が不幸の直前に感じる妙な感覚、それを上条は感じた。つまり、死亡フラグである。
そう考えていると、警備員（アンチスキル）が目の前に“通行止め”の看板を持ってきた

「あーごめんねぇ。ここ、もうすぐ吹奏楽部の複数校合同パレードが始まるじゃんよ。そろそろ人の流れをせき止めておかないと整備が間に合わないじゃん」

なんと非情なお言葉なのだろう、と上条は心の中でどこぞの大根役者風に呟いた
さっき、自分達の競技の前にインデックスに焼きそば3つほど置いてそのまま放置して、インデックスのお腹は最早限界

こういう時、上条は自分がどうなるかを悟った。

噛み付かれる

前に一度だけ、インデックスに噛み付かれたことがあった。（くわしくは、第十一話『転入生』を参照）

「向こうまで渡りたいのですけど、どうすれば迂回できるのでしょうか？と美静は渇いた表情で尋ねます」

そりゃそうだ、だって美静は朝、大覇星祭で浮かれて朝食をとらず

に行ったのだから

「この辺は歩道橋もないじゃんよ・・・。一番近くて、西に三キロ行ったところの地下街から横断できるじゃんよ」

「3キロ・・・・・」

3km

中学校で男子が走る長距離走と同じ距離、持久走を走る速さでなら15分くらいかかる。上条と美静は15分どころかそれよりも早く着くが、インデックスは別だ。それに、15分より早く着くと言っても、インデックスがそれを待てるわけがない

三人が絶句した。

（美静、お前はいいよな。だって腹が減って死にそうなだけなんだからな。俺なんか死亡フラグ立ってんだぜ？）

「う、ううー・・・。手を伸ばせばそこにあるのに、決して掴むこともかなわず」

インデックスからは黒いオーラが漂っている。ついでに美静にも黒いオーラが漂っている。つーか、テメエはただの八つ当たりだろ！

（だめだっ！二人ともTウィルスに感染していやがるっ！！ゾンビ化しとるっ！！）

二人がこちらを振り向いた

その時、上条の頭に三つの選択肢が浮かんだ

1、ハンサムな上条さんは突如名案を思いつく

2、何故か通りすがりの救世主が助けてくれた

3、誰も助けに来なかった、現実は非情である

美静とインデックスが飛び掛ってきた

瞬間。

上条に走馬灯というものが見えた

走馬灯、それは人間が死ぬ前に見る人生の思い出。本来、それは走馬灯にある今までの経験（おもいで）の中からその状況を打破するものを探すためのものである。しかし、上条としてはこんな喜劇（コミカル）になど遭遇したことが0に等しい。今まで悲劇（シリアス）にばっか遭遇してきたのだから・・・。

故に必然的に1の選択肢は消え、3の選択肢を選ぶわけにもいかず、上条は2の選択肢を選ばざるをえなかった

（2！！2ィ！！！2ィィィィ！！！！）

美静の手が、インデックスの牙が

『3、誰も助けに来なかった現実は非情である』

上条に――――

「アッーーーーーーーーーー！！！！」

触れた

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

先程、美静とインデックスの食糧問題の後、土御門に呼ばれた。呼ばれた所に着くと、そこにはステイル＝マグヌスがいた。つまり、

『案の定魔術の話』だ

話が長いのでまとめると、

学園都市に魔術師が二人侵入したらしい。一人はローマ正教のリドヴィア＝ロレンツェッティ。そいつに雇われた運び屋、オリアナ＝トムソン。両方女だ。連中の目的は霊装の取引

刺突杭剣（スタブソード）

曰く、あらゆる聖人を、一撃で葬むる代物らしい。

故に神裂はこの件に首を突っ込むことができない

使い方は簡単。対象に切っ先を向ければいい

たとえ核シェルターに閉じこもろうが、地球の裏側にいようが、冥王星まで逃げ延びようが、

そんなの関係ない、“切っ先を向ければいいだけの話”

そんなムチャクチャな霊装、“有効に使う”としたら一つしかない

戦争

一度闘った上条はわかる。聖人というのは核兵器のような『者』だ。人間の身体能力を超越している？いや、超越どころではすまされない。そんな代物を『破壊』する。

だが、問題はその『聖人』を『葬る』じゃない、聖人を葬むっても充分戦力になる人材なんて腐るほどいる。しかし、それでもその人材は聖人には到底及ばない、それで聖人があっさり殺されたら？

当然、最大戦力を殺した側は強気になって、『自分の無様な敗北』を後先考えずに相手を攻撃する。そして、それが火種になって、さまざまな場所で戦争が起きるかもしれないそうだ。必要悪の教会（ネセサリウス）としてはこれを見逃すわけには行かないそうだ

インデックスに協力を仰いでみたらと提案したが、どうやらダメらしい。土御門曰く、ここ数ヶ月で上条が『そげぶ』した事件では、『上条当麻の周囲で事件が起きる』ではなく、『禁書目録の周囲で事件が起きる』と認識されているらしい

つまり、『事件の陰にやっぱり矢●』ならぬ、『事件の陰にやっぱり禁書目録（インデックス）』

『コ●ン＝新●』ならぬ『コ●ン＝禁書目録（インデックス）』ということだ

「しかし、カミやんも良い気はしないだろ？自分の手柄が彼女に回っているなんて」

「認められねえのは慣れてる、むしろ学園都市（ここ）に来る前よりはましだな。認められないどころか、『自作自演野郎』って蔑称までつけられた」

土御門、ステイルの眉が少し下がった

「俺は参加しねえぞ。お前らでやるか、『暗部』にでも任せりゃいいだろ。ちっと金がかかるだろうが」

そう言って、上条はその場をあとにした

「やれやれ、ちょっと不憫に思った僕が間違いだったよ」

ステイルがため息をつき、煙草に火を点けながら言った

「駄目もとで誘ってみたけど、やっぱダメだったかにゃー。ま、『強制戦闘』とか、『自分の目的ため』に動くことを祈りながら始めますか」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「あんたねー、あんな仕事断ってどーすんのよ・・・・・」

不意に声をかけられた。最初はさっき襲ってきたビリビリ中学生か？と思ったが妙に声が大人っぽい

「だったらアンタがやりゃいいだろ？」

麦野沈利（むぎのしずり）

上条が暗部時代に渡り合った組織『アイテム』のリーダー

「わかってないわねー・・・。私みたいな破壊だけしか能のない能力で上手くできるわけないでしょう？私がアンタだったら、報酬の多い少ない関係なく引き受けてるわよ？・・・・・ま、それでも

7桁はもらうけどね☆」

麦野がため息をつきながら言い、付け足すように言った

「超能力者（レベル5）が何言ってんだか・・・・」

吐き捨てるように上条が言った

「私はこの学園都市が好きよ?表舞台の方を見ればだけどね?だから暗部をやってるのかも・・・。そこまで金に拘るのは、やっぱ軽く見られるのがイヤなんでしょうね」

何か軽くたそがれてる

（あー、結構タイプだな・・・）

上条は顔は表情変わらずのままだが、内心ではそう思っている。つーか話聞いてんのか?

「ところでさー」

「ん?」

「あそこで屋台泣かせてる女の子達は一体何なのでせう?」

上条が指した三方向を見ると、彼女の同僚がそれぞれ自分の能力や技術を駆使して屋台を泣かせている。それを見た麦野が言った台詞は・・・

「知らない」

だそうだ

その時、

「上条君!!」

クラスメートの一人が血相を変えて走ってきた。どうでもいいが女子なのは、やはり上条クオリティなのだろうか?よほど重大らしく、息切れで数十秒しゃべれない状態になるくらい走ってきた

「何があったんだ?」

彼女が回復したのを見計らって上条が問いかけた

「吹寄さんと、土御門君が倒れた!」

追跡者（後書き）

麦のんをだしたのは特に意味はありません。
強いて言うなら、上麦ｓｓをもっと出してほしいってくらいですかね
私としては、上麦タッグを続けてみたい（ｗａｎｔ　ｔｏ　ではなく、ｗｏｕｌｄ　ｌｉｋｅ　ｔｏ程度なんだからね！／／／／か、勘違いしないでよね！！／／／）のですが、皆さんに悪いので要望があったら考えます。

番外編その四：裏切無用（前書き）

本当にごめんなさい！ちょっと色々と壁にぶつかっちゃいまして、
本編の話はもうちょっとかかるかもしれません！

番外編その四：裏切無用

ある昼下がり、小雨の降る中、一台の大型のワゴン車が走行していた。パッと見普通の車だが、中にいる集団は普通とは大分かけ離れていた。

暗部組織『ブロック』
学園都市の裏に潜む暗部組織だ
統括理事会直属の組織であり、彼らの主な任務は学園都市の外部協力機関との連携を監視すること。　しかし、今回の彼らの任務は違った

「今回の任務を説明するぞ。今、学園都市で薬物売買を行っている武装集団（スキルアウト）『バースト』を壊滅させる。以上だ」

熊のような大男、佐久辰彦（さくたつひこ）が3人のブロックの正規構成員とその他十人弱の武装した男達に言った

「ん？ちょっと待て。それなら、もっと適任が、いるんじゃないか？」

筋肉質で長身の女性、手塩恵未（てしおめぐみ）がそれに返す

「それが無理だそうだ。『アイテム』『スクール』は今、手が離せないらしい。そして、『メンバー』は数日前、“ある一人の少年を潰す任務”の時に壊滅した」

「『災厄』か・・・」

三人目の構成員、山手が呟く

ここ十数日で学園都市の『裏舞台』で流れた噂、“敵であろうが、見方であろうが壊滅させてしまう男”その男の入った組織は瞬く間に潰れてしまうらしい。中でも有名なのが、実力と悪名ワースト１である人身売買を生業とする武装集団『トリック』をたった２日で“何もせずに”壊滅させてしまったことだ

「そうだ。上層部は奴ら（バースト）が『災厄』と組んで好き勝手させて街に大ダメージを負わすわけにもいかず、だからといってこれ以上暗部組織を潰させるわけにも行かないから、今のうちに壊滅させておきたいそうだ」

佐久が窓の方に目を向ける。ちょうど上から伝えられた『バースト』のアジトが見えてきた

「それじゃあ作戦を確認するぞ。まず、鉄網は車に残って待機しろ。そして三分の二は突撃、残りの三分の一は奴らのアジトに爆弾を仕掛けろ」

熊のような大男はまず陰気な少女を指差し、次に如何にも実力派と思われる奴らを何人か指差し、残りのあまり戦闘向きでなさそうな奴らと、その護衛役である奴らを指差して言った

「撤退するときはお前らの首についたその首輪が激しく振動する。その時は作戦が成功していようが、いまいが撤退しろ。ここに戻ってた奴は必ず鉄網の『安全確認』を受けろ。いいな？」

それに全員が頷く

それと同時に車が停まる
アジトに着いたようだ

「それじゃあ、作戦を開始するぞ。準備ができたら即出ろ」

車内にいる連中は一人また一人、準備ができ次第車内を出た
今、車内にいるのは陰気な少女の鉄網と運転手だけだ

そして、数十秒後に鉄網は異変を感じ取った。

運転手の様子がおかしい。鉄網はそっと運転席を覗いた

「運転手がいない？」

運転手が消えていた。
しかし、その数十秒間、ドアの開く音など聞こえなかった。第一、運転席の扉は鍵がかかっているのだ、気づかれずに開けられるはずがない。運転手が気づいて鉄網に知られるはず

ならどうやって？

不審に感じた鉄網はグロック17をモデルとした学園都市製の拳銃を握り、車から降りた。車を出たとき、すばやく左右に銃を向けて確認をした。しかし、侵入者はいない。それどころか、運転手も見つからなかった

鉄網はしばらく周囲を探したが、侵入者も消えた運転手も結局見つからなかった。もっと、探せば見つかるかもしれないが、そうするわけにはいかない。彼女の能力である『意見解析（スキルポリグラフ）』で帰ってきた構成員と株構成員の安全確認（チェック）を行わなければならない。

組織内でたった一つだけ役に立つ彼女の能力。読心能力（サイコメトラー）の一種で、握手した相手の『個人情報（プロフィール）』を見ることができる。この能力があれば、変装した敵などを見つけることができ、尚且つ組織内の『疑心暗鬼』を防ぐことができる。逆に言えば、彼女がいなくなってしまうと、組織は『疑心暗鬼』に陥りやすくなってしまう。そうなってしまわないようにも、彼女はできるだけ長生きしなければならない。

鉄網は周囲に注意を払いつつ、車内に戻ろうとした。ドアの前でも警戒を怠らず、ドアに斜めに向いて銃を両手で持ち警戒していた。

だがそれがいけなかった・・・

ザシュンッ！

ポロッ

「えっ？」

彼女は自分の手を見た。

だが見えなかった。

何故？それは・・・

彼女の手がなかったから

手首と手首の間が広がり、彼女の『手のない手首』と『手首のない手』が同時に見える。“学園都市製のグロック17をモデルとした拳銃を両手で握り、”『何時』『何処で』付いたかもわからない治りきらなかった傷跡、間違いない――自分の手だ。

そう認識したとき、彼女の手首に突如激痛が走った。痛みが遅れてやってきたのだ

「あ゛あ゛あ゛あ゛あ゛ん゛んん゛ん゛んんん゛ん゛ん゛ん゛ん゛ん゛ん゛」

鉄網は一瞬だけ悲鳴を上げたあと、何者かに口を押さえられ、気を失った。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ブロックの作戦は順調に進んでいた。
バーストの戦闘員に善戦、爆弾の設置も滞りなく進んでいる

「そっちはどうだ？」

下部組織の戦闘員（以後A）が無線で爆弾班の様子を聞く
『順調だ。これでアジトの三分の二が吹っ飛ぶ』

「そうか」

Aが適当に返事をし、無線を切った

ふと、Aが気がついた。一人足りない

「おい！Bはどうした？」

「え？知らねえよ」

三人いたはずが二人になっていた。少人数だったからわかった

「くそっ！空間移動能力者（テレポーター）でもいやがったか？早くここから撤退するぞ」

しかし、返事は返ってこない。Aはすぐに悟った。Cも消えたと、そして『災厄』がいると・・・このままじゃ、自分も消える。その上、他の仲間も殺られる。Aは無線機を佐久に繋げた

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「どうした？」

『今すぐここから撤退しろ！『奴』が来た！！『災厄』だ！！！』

ブツンッ

それだけ言い残して彼の連絡は途絶えた

「おい！おい！！クソッ！」

佐久は無線機を片手に、撤退命令のスイッチを取り出して押した。
その次に、無線機を全員に繋ぎ、爆弾班に向かって言うように話しかけた

「今すぐ作業をやめて三分で爆発させろ！そしてこの無線を聞いた奴は今から三分以内に撤退しろ！」

佐久が無線機を床に叩きつける

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

撤退命令を出しただけに、佐久と、佐久と行動していた手塩と他の戦闘員は一番乗りでついた。佐久がワゴンのドアを開けて入った

「鉄網！さっさと安全確認をしろ！」

しかし、彼が中に入ると車内には誰もいなかった。運転手も、鉄網もその時、佐久は何かをグニィッと踏んだ。それを拾い上げてみると手だった

拳銃を両手で握り、手首から下がない誰かの手・・・

ちょうどその時、他の仲間が全員到着した

「今すぐ出発するぞ！！さっさと乗れ！！俺が運転する！この手首が誰のかを調べるぞ！！！」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

病院にて

「ん？こりゃまた珍しいね。君が誰かを連れてくるなんて」

カエル顔の医者が少年を出迎えた
出迎えられた少年の背中には、女の子が背負われている

「こいつの斬れた手の義手をできるだけ本物っぽく作ってくっつけてくれ。『無理』なんて言わせねえよ？２回も人の手をくっつけたんだからな」

上条当麻
そして、その背中に背負われているのは両手首がない鉄綱だった

「できるけど、金はあるのかい？君」

片方の眉を下げてカエル顔の医者が言った

「ああ、あるよ？たっぷりとな・・・」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

『バースト』アジト（半壊）にて

上条は『バースト』の生き残りであり、リーダーと幹部である６人と対峙していた

「テメエのせいで仲間の大半を失い、アジトも使いモンにならねえ・・・どうしてくれんだよ！！」

リーダーが上条の胸倉を掴み、怒鳴りつける

「おいおい、こりゃ俺のせいじゃねえぞ?単にあんたらの運が悪かっただけだろうが」

その手を振り払い、上条は答える

「とぼけんじゃねえ!裏でテメエが糸引いてたんだろ?知ってんだぜ?お前が『トリック』を潰したってのはよぉー、お前、運が悪かったな。生き残ったのが全員強能力者（レベル３）大能力者（レベル４）なんだぜ?今からテメエをツブス!!!」

男がそういった途端、周りの男達は手に炎や水や竜巻を出したり、周囲の倒木や鉄パイプを浮かせたり、明らかに重そうなものを軽々と持ち上げたりした

上条はそれを見ておびえる様子もなく、

「はあー、ツイてねえなぁ」

と呟いた

「ああ、そうだな!お前ツイてねえよな!!?ギャはハッハハハハハ」

男達が愉快気に笑う

「いや、お前らがツイてない」

「は?」

「だぁーかぁーらっ、？お前らがツイていないんだよ”」

上条の余裕の答えにリーダー格の男の額がヒクヒクと動く

「ぬかせコノヤロォオォォォ！！！！」

それでも上条は動揺せずにゆっくりと立ち上がり、右手をいつものようにパキパキと鳴らした

「ま、すぐにわかるよ」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

病院にて

「退院おめでとう」

冥土帰しが上条が数日前に届けた女の子に言った

「はい、お世話になりました」

鉄網が頭を下げる

彼女の両手はまるで手がまた生えたかのような義手がついている

「これからどうするんだい？」

「とりあえず、これから同僚のところに向かいます。生存報告をしないと・・・」

「そうかい、気をつけてね」

「はい、それじゃあ。さようなら」

もう一度冥土帰しに頭を下げ、彼女は背を向けて去っていった

彼女の後姿を見守る

そして、もう一人が入り口から出てきて彼女の後姿を見つめた

「いいのかい？挨拶をしなくて」

上条だ

「別に、俺はアイツを助けるつもりで助けたわけじゃない」

冷めた目で上条は語る

「？」

「アンタ次第だが、すぐにわかるだろ」

そう言って上条は歩き出す

5，6歩、歩いたところで上条のポケットからヒラヒラと封筒が落ちた。冥土帰しがそれを拾い上げた

「君、これ落としたよ？」

「ああ、それ？いいよ。別に・・・どうせ落ちなかったら出して、落ちたら出さないつもりだったから」

ヒラヒラと手を振り、去っていく
上条が去った後、冥土帰しはその手紙を開いて読んでみた

「まったく、僕を利用するなんて・・・ひどいじゃないか」

カエル顔の医者は深いため息を吐いた

ブロックのクソ野郎共へ

俺の置き土産はお気に召しましたかな？

今回のアンタ達の敗因は、あの女に頼りすぎたってことだ

気づいても後の祭りだけどな

『ブロック』が壊滅すんのも時間の問題、

いや、文の内容からして読むころには壊滅してるだろうな（笑）

それじゃあ、『疑心暗鬼』になって死ね

上条当麻（かみじょうとうま）君より

番外編その四：裏切無用（後書き）

ちなみにこのネタはＢＯ○Ｋ　ＯＦＦで恨み●本舗を見て思いついたネタです。
かなり謎の残る終わりでしたね。ｗｗ
解説がほしいなら、感想でどうぞ

仇（かたき）（前書き）

気がついたら一ヶ月以上たっていたでござる。
やばいな、まだオリアナ追跡の文が仕上がってないのに・・・

仇（かたき）

医務室にて

ベッドにまるで軟体動物のように力なく横たわる吹寄。医師は重度の日射病と言われていたが――でも違う、上条はわかった。長年、異能の力を消し続けたことによる勘だろう。吹寄の日射病は異能の力が関係している。上条の指先が吹寄の額にチョンッと触れ、弾かれるように手を引っ込めた。

パンッ

上条の右手にいつものように手ごたえを感じた。やはり魔術だったようだ。

「こりゃマキャヴェリも驚きだな・・・」

そう言いながらその場をあとにした

医務室を出るとそこにはステイルがいた。

「土御門は脱落（リタイア）だ。魔術を使いすぎて、今は峠を越えたが、これ以上魔術は使えない。」

そう言ってステイルは煙草を一度深く吸い、上へフゥーと吹いた。

そして、彼は持っていた白い布で包まれた看板のようなものを上条の足元へ投げた。

「開いてみろ。土御門が“命を懸けて”オリアナ＝トムソンから奪った『刺突杭剣（スタブソード）』とやらだ・・・」

上条はその包みを開く

「!?・・・こりゃぁ・・・たまげたな・・・」

土御門が我が身を捨ててまで奪った物は――ただの『看板』だった

八つ当たりをするように上条がその看板をステイルの足元へと蹴る

「奴らが本物の作戦で使う本物の霊装は・・・『使徒十字(クローチェディピエトロ)』・・・まあ、説明は後回しにするとして――」

ステイルの足元にあった看板がガンッ!と蹴り飛ばされた。

すばやく反応した上条は裏拳を繰り出すように腕を横薙ぎに振るい、

弾き飛ばす

が、

ガシッ

と上条の胸倉が?まれる

「貴様の力を認めるようで悔しいが、お前があの時!僕らに協力していれば土御門はあんなにならなかった!!あの娘もそうだ!貴様が『ＹＥＳ』と答えれば、被害はでなかった!!」

パシッと掴んでいた手がはらわれた

「別に俺はテメエらがどうなろうと知ったこっちゃねえよ。だがな、」

上条が浅く溜息をつく

「敵である俺の知り合いに手ぇだすってんだったら、話は別だ。俺はこれを挑戦状として受け取る」

「だが、どうやって?どうやってオリアナを捕まえる?土御門がいなければ居場所も特定できないんだぞ」

「はっ。たかが『何でもありの鬼ごっこ』が得意って程度で俺からは逃げられねえよ。」

上条が目を細める

「それに、チャンスなんていくらでもあるんだぜ?見えないだけでな・・・・」

「どういうことだ?」

上条がほんの少しだけ、声を小さくして話し始めた

「あいつは俺らのことを警戒している。だから俺らのことを監視する必要がある。お前、オリアナと何らかの形で接触しただろう?例えば、あの看板とか・・・例えば、オリアナの罠の魔術にかかったとか・・・」

ステイルがハッとなる

「つまり、俺らが奴にたまたま近づけば、奴は俺らの様子を見に来るってわけだ。今俺らがいるのはどこだ?」

周りの景色を見渡して、ステイルは答える

「ずっと文章だったからわからなかったが、第七学区の駅前だ」

シーン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「えー、おまっ、キャラが薄いからって・・・・メタ発言はないわ・・・・」

「う、うるさい！とにかく、オリアナは今ここのどこかに僕らの様子を伺いながら潜んでいるんだな？」

「ああ、そうさ。このまま、オリアナを探しているフリをしていればいい。アイツがまた運送を再開したら、追跡を開始するぞ」

上条たちから少し離れた所にて

「ふぅ、居場所がバレちゃったって焦って濡らしちゃったけど、大丈夫みたいね」

『それでは引き続き続行しなさい』

「りょーかいっ」

オリアナが懐から彼女の武器でもある『単語帳』を取り出す

「でも、一応念のために・・・・・」

『単語帳』を片手でピラピラとめくり、一つのページを横に押し出した

そのページを咥え、

「“張っておかないとね”」

ピッ

『単語帳』のページをちぎった

仇（かたき）（後書き）

祝！！禁書目録映画化！！！
あのポスターが正しいとしたら、映画の内容は、「かまちー」書き下ろしのオリジナルストーリーでしょうかね？
ｗｋｔｋが止まらない！！

行間（前書き）

「おお、ディスプレイよ・・・壊れてしまうとは情けない・・・・」

ＰＣのディスプレイが天寿を全うしました。ｗｗｗ

しかも、テスト１週間前に臨終したので、合計１１日書けない状態になりました。

行間

「ねえ」

「あ？」

問いかけるステイルを尻目に上条はオリアナの罠（トラップ）を解除する

「さっきの娘、かなり危ない状況だったけど、なんで君はそんなに平然としていられるんだい？クラスメートなんだろ？」

「あそこには美静がいる。救急車を呼べと言っといたから大丈夫だろう」

そう言った後に発動した罠を上条は殴り飛ばす

「日本の救急車の到着時間は平均五分と聞いたが、あれはどんなに前向きに見積もっても、五分と持たないんじゃないか？」

「心配ない、あいつは戦闘知識は熟練の軍人並だ。救急車がつくまでどころか、病院に着くまでに生命（いのち）をつなげるはずだ。後は、医者の腕前と姫神の生命力しだいだがな」

「随分信頼しているみたいだな」

「当たり前だろ？あいつは元々この俺を打倒するために、つーか、力量を見るために作られた、いわば、測定器みたいなもんだ」

「作られた？彼女は人造人間（ホムンクルス）か何かか？」

「近いけど違う。美静は『クローン』だ」

「木の枝（クローン）？」

「人間の細胞を使って、もう一人の人間を作ることだ。テレビで聞いたことはねえか？」

「ああ、２００３年の新聞で『クローンの羊が死んだ』という記事を見たことがあるね」

「美静（あいつ）はこの学園都市で最強の女の遺伝子マップを使って生み出された複製人間（クローン）だ」

「何のために？」

「元々の目的は知らんが、俺が参加した実験では、学園都市最強を『神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの』へと昇華させる実験で経験地稼ぎのために２００００体ほど使われて、内１００２７体が実験に使われて――消えた」

ステイルの走る足が止まる

「まさか、君もそのクソったれたことをしたわけじゃないよね？」

ステイルが怒りを含んだ軽蔑の目で上条を見据える

「いや、俺はたまたまその実験で問題になることをやらかして、試されたわけだ」

上条が立ち止まって続ける

「俺はその実験の責任者と交渉して実験に参加、被験者との蟲毒で勝って実験を成功させただけだ」

上条がステイルの方へ振り返る

「その後だよ。禁書目録（インデックス）が転がり込んできたのは」

「・・・・・・・・・」

「俺はそんとき泣いたよ。一滴（ひとしずく）だったけど、2年ぶりに泣いた」

「・・・・そうか・・・・・・・追跡に戻ろう」

「ああ・・・・・・」

行間（後書き）

うまく悪条さんを書けない
いや、やっぱり辛い
はやくこの回を終わらせないと
るんるん気分になれない
カットしまくりなの
わ許してください
いい訳ごめんなさい
インなんとかさんかわいい

礎を担うもの《Ｂａｓｉｓ１０４》

ピリリリリピリリリリ

この広い場所で携帯の着信音だけが響き渡る

ピッ

「美静か？」

『はい、報告したいことが・・・』

上条がそれにいつものように出る

「そうか、わかった」

携帯の電源を切り、上条は目の前のオリアナ＝トムソンへと目を向ける。鋭い目で――

「姫神は一命を取り留めたそうだ」

見つめながら・・・・

「そう、よかったじゃない？」

「ちょっと聞かせてくれねえか？お前らがそこまでして成し遂げようとする『それ』を」

「別にお姉さんはね、目的が果たせればどっち側についてもよかっ

たの」

「目的だって？　なんだ？　１８禁の王国でも作って、そこの女帝にでもなるつもりか？」

「いいえ、お姉さんがほしいのは、絶対の基準点。坊やにはわかる？親切心でお年寄りに譲ってあげた席が爆発したって、迷子だと思って教会に預けたら処刑塔（ロンドン）に幽閉されてしまったって、後から聞いたときの気持ちが・・・お姉さんはただ、この惑星の主義主張をうまくまとめてほしいだけなのよ。誰でもいいから・・・」

「はん、その“ためだけ”にか？」

上条はオリアナの言い分に対して鼻で笑い、一蹴する

「何・・・？」

「安っぽいって意味だよ。動機が・・・。世の中にはな、相手のためを思って行動しても、結果が良くても、認められないって奴がいるんだよ。本当に逃げ場がない奴がいるんだよ。お前なんかよりも辛い思いをしている奴なんかその主義主張信仰思想善悪好悪の数ほどいるいんだよ。テメエらなんかよりも『それ』を真に必要としている奴らが大勢いるんだよ」

「坊やは見たことがあるの！？　希望も持てない子供と、絶望すらもてない老人のあの表情を！！」

「ああ、見たことねえ！　だがな、“聞いたことはある”！！　俺の行動を認めてくれた老若男女、みんなが死んだよ！　生き残った奴に『疫病神に関わってしまったから』って愚痴を吐いてな！！！

それでもまだふざけたこと抜かすってんなら――――まずはその幻想をぶっ殺す！！！！」

右手の拳（イマジンブレイカー）を追跡封じ（ルートディスターブ）に向けて上条が吼える

「やれやれ、上条当麻君・・・どうやら、交渉は――――」

少しだけ落ち着きを取り戻したオリアナが速記原点を取り出し、その中の一枚を口にくわえる

「決裂だな。オリアナ＝トムソンッ！」

ダッと上条とステイルが駆け出す

ビリッ

単語帳の一ページが切り離され、そこから溶岩のような火球が現れだす

その現れる火球に右手を上条は思いっきり伸ばす

ＶＳ『追跡封じ（ルートディスターブ）　オリアナ＝トムソン』

パンッ！と火球が急激に膨らみ、風船が割れるように消滅する

ゲシッ

「クッ！？」

伸ばしていた右手を蹴られ、弾かれる

「ハッ！　いいねぇ・・・！　久しぶりにマジの素手喧嘩ができそうだ・・・！」

恍惚の表情で上条が呟く

「ああん、だめよ・・・・そんなに鋭い瞳で見つめちゃ・・・・・・。お姉さん、濡れちゃう・・・」

「スティル！　テメエは手出しすんじゃねえぞ」

「なっ！？　言ってる場合か！？　僕達には時間がないんだぞ！」

「安心しな。すぐに終わらせる」

上条が右手をパキパキといつものように鳴らす

「あら、随分余裕のようね？」

「ああ！　余裕さ！」

ダッと上条が右拳を構えて駆け出す

ガンッ！

オリアナの顔を狙った拳はオリアナの腕によって阻まれた
そして、そのまま両腕を交差させたガードを開き、上条の拳を弾き返す。それによってバランスを崩した上条はわずかに後ろによろけ、胴ががら空きになる。

「あら？　蹴らせてくれるの？　ありがとう？」

オリアナの膝が上条の腹と胸の間、すなわち鳩尾へと打ち上がった

「おっと！」

それにいち早く気づいた上条は上体を反らす。
チッという音がして体育着の胸部分を掠る
そのまま、上体を反らしたついでに押し蹴りを放つ

だが、

ゲシッ
と内腿を狙った押し蹴りは足の付け根付近を先ほどオリアナが放った足による踵落しによって打ち落とされた。足が付け根を打ち落とされた上条は、当然オリアナにお辞儀をするような形になる。
そこをオリアナは見逃さず、上条の後ろ首にエルボーを落とす。
ガッ！
しかし、落としたエルボゥは上条の首に当たらず、腕は上条の両手に?まれた

「あら～？　あれ～？」

オリアナの腕を掴む両手に力が入る。

「おおおおおおおおおおおお」

上条はオリアナの胴体に自分の胴体をくっつけ、そこを支点として投げ飛ばす

「っらあああああああぁぁぁぁ！！！」

グルンッとオリアナが宙返りをする。
そのままオリアナは地面に叩きつけられる――――はずだった。

スタッ・・・

ガシッ！

投げた場されたオリアナが体をエビゾリに反らし、地面に着地する。
その体制からバック宙をするように飛び、上条の頭部を足で挟んだ

「ぐあっ！？」

「ふふっ、お姉さんからの、サ・ア・ビ・ス？」

グルンッと一回転、ニ回転、三回転。コイル発条（バネ）の軌道を描くように、ポールダンスをするように、オリアナが回り、上条も回る。

何回目か回り、オリアナの体が地面すれすれまできたとき、
ダッ！とオリアナの両手が地面につき、足を振り回すように上条を投げ出す。

ブワッと上条が投げ出され、地面を転がる。
だが、その程度で地面に這い蹲ったままになる上条ではない、転がりながら体勢を立て直す。

「ッ！！」

オリアナのフロントキックが立ち上がった瞬間の上条へ放たれる。
上条はそれに気づいていたかのように腕をクロスさせる。

ガンッ！！

ビリビリと腕が感じる。重いキックにたまらず上条も後方へ後退する
そして、上条はゾクッと何かを感じ取った

ビリッ

ゴオッ！と空を切る音を聴く。
聴いた上条は右手を前に伸ばす

バキィィン！！

「グッ！！」

オリアナが放った魔術は物理的に質量があったのか、触れてから打ち消すまでのほんのわずかなタイムラグにより、上条の手のひらから、肘、肩までの関節に衝撃が加わる。

その痛みをこらえて上条が再びオリアナの方へ向き直ると・・・

カチッ

パラパラパラ

オリアナが次の魔術を放とうとしていた、今度は一枚なんかじゃない、単語帳（それ）を束ねる一つのリングを外した。

「これで決める」

宙を舞う紙吹雪の上に筆記体で文字があわられた

『Ａｌｌ　ｏｆ　Ｓｙｍｂｏｌ』

「我が身に宿る全ての才能に告げる――」

掲げたオリアナの手の上に青白い閃光の球が現れる。

上条は直感した。

一回の戦闘につき、一回の予知・・・

闘いの最中に得た情報、学習。それらを整理して思いつく予知が、

上条は後ろにいたステイルの胸倉を掴み、オリアナへと突っ走る

「お、おい！？　何をするッ！！」

「――ーその前例を開放し目の前の敵を討て！！」

オリアナが大きく腕を振るい、球状の爆発が上条らの方へと投げられる瞬間、

上条はステイルをオリアナの方へと押し出した

「ぐっ・・・！　何をするんだ――ーぐおっ！？」

ステイルが頭を上げる瞬間、上条はステイルの背中を踏み台に大きく跳びあがった。

（僕を、踏み台に！？）

側宙をするように上条は青白い爆発を飛び越えた。

そして、球体がステイルに届く前に、

パキィィン！

球体は飛び越えた上条によってガラス球が割れるように飛び散った。

そして白い中で溜まって圧縮されたものが噴出そうとしていた

（ほらな・・・予想通りだ・・・）

「っ！！？」

急に爆発の上から飛び出した上条が爆発を解除したことにオリアナは驚愕する。

だが、オリアナが驚愕しているうちにすでに上条はオリアナの背後へ飛び越えていた。

「！！　しまった！！」

オリアナが振り向く頃にはもう遅い、

上条のドロップキックがオリアナに炸裂した

ドゴッ

「グハッ！」

オリアナが後方へと吹き飛ばされた瞬間。

ゴッ

という鈍い音と爆風のようなものがオリアナを再び上条の前に差し出した

「これで終わりだボケ！！」

すでに立ち上がっていた上条が拳を構えていた・・・

ゴンッ！！！

オリアナが再び後方へと吹っ飛ばされた

「正義は“死なない”のだ」

礎を担うもの《Ｂａｓｉｓ１０４》（後書き）

今回はちょっと長くなったので二つに分断します。というわけで、後半（エピローグ）へ続く

礎を担うもの《Ｂａｓｉｓｉ１０４》エピローグ

「正義は“死なない”のだ！なんてな」

ゲホッゲホッと咳が聴こえてきた。

ステイルのものだ

「あれ？お前まだ生きてたの？しぶてえな？」

ステイルはそのまま倒れたままだ

「このっ・・・！　人を囮にしやがって・・・！　テメエマジぶっ殺す！！」

ステイルは興奮状態なのか英語で話しているため、上条には何を言っているのかがさっぱりわからなかった

「日本語でおｋ」

「くぅっ！　君のせいで危うく死に掛けた！　だから病院まで運んでくれ！」

「元気じゃねえか」

「叫ぶだけでも精一杯なんだよ！」

『ならば我々が直して見せましょうか？』

「「！？」」

突如誰かの声が聞こえてきた

「誰だ！」

『尤も、それがローマ成教にとって最も有益だと判断できればですが』

「テメエは今どこにいやがる」

「あわてるな。リドヴィアはきっとこの近くにいるはずだ――――」

『誤解なきように告げて起きますが』

ステイルの声をさえぎるようにリドヴィアが続ける

『「使徒十字（クローチエディピエトロ）」は現在学園都市にはありませんので』

「何？どういうことだ」

『そちらは学園都市内の「天文台（ベルヴェデーレ）」を調べていたようですが、それらは全て我々が誘導した結果に過ぎないので。どうやら、外にある「天文台」にまで手が回っていなかったようですが』

「つーことは、あの女（オリアナ）はただの囮・・・？」

『そうなりますので』

「なるほど、だから丸腰の俺達でもアイツを簡単に追跡できたわけだ・・・」

『ええ、「使徒十字（クローチェディピエトロ）」発動まで、残り１０７秒となりました。チェエクメイトです』

「それがどうした」

突如上条がリドヴィアの言葉をさえぎる

「俺のもともとの目的はオリアナを潰すことだ。いまさらテメエなんざ興味ねえよ。」

『・・・・・・』

「あるとしても、テメエが今回の事件の主犯だってことでぶっ飛ばすってだけだ」

『負け惜しみですか？』

「いいや、違うね・・・もとからテメエのその計画は失敗することが確定していたんだよ！」

『？　言っていることがよく理解できないのですが？』

「星座を利用した魔術、必要なのは夜空に移る星座の絵が必要なんだ」

『それらを塗りつぶせると？　一体どのような方法で？』

「『できるんだよ』それが」

その直後
ドガッと夜空に打ち上げ花火があがった
そのほかにも強烈な光がいくつも夜空の星座を塗りつぶした
『ま、まさか・・・！！』
「ナイトバレードだ」
上条は続ける
「俺がインデックスや美静に無理矢理約束させられたやつだ。時刻は午後１８時３０分ジャスト。要は、テメエの作戦（くろう）も、オリアナの行動も全て無駄なことだったってことだ」
上条はリドヴィアとつながっていると思われる単語帳のページを左手で拾い上げた
「ワリィけど、俺は他に用事や競技があるんだ。追いかけっこなら他の奴とやってろ。」
上条は最後に息を吸い込んでハッキリクッキリこう言った
「クソババア」
それだけ言って上条は左手に持っていたページを右手で握りつぶす
～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
病院内　姫神秋沙の病室にて

姫神が目を覚ますとベッドの両脇には自分の友人達が眠っていた。
ふと横を見てみると、見舞いの花束が置かれていた。
彼女は誰がそれを置いていったのかがわかった

（それにしても。野漆（のうるし）と夾竹桃（きょうちくとう）って。私に対するあてつけだろうか？）

ズーンと言う効果音が聞こえてきそうなくらい姫神は落ち込む
野漆。花言葉は『控えめ。地味』
夾竹桃。花言葉は『油断大敵。用心』

だが、ある花を見てそれは吹き飛んだ

『黄菖蒲（きしょうぶ）』。花言葉は『幸せを掴む』

なんだか彼らしい花をみて彼女はクスッと小さく笑った

（あの人らしいな・・・）

礎を担うもの《Ｂａｓｉｓｉ１０４》エピローグ（後書き）

だれか僕に文才をください。

観光客

皆さんはこんな経験をしたことがあるだろうか？
ゴールデンウィークや、夏休みや、冬休みなどで、朝の四、五時くらいに目が覚めて、そのまま二度寝もする気がなく、みんなよりも早く起きてしまうことが、

上条当麻は今、そんな感じである。

大覇星祭初日から疲れるような依頼を受けて学園都市中を走り回り、それが解決した後はいつも通りビリビリ中学生や、以前殺し合った暗部組織『アイテム』のリーダーの全身ビーム砲に追い掛け回され、また学園都市中を走り回る。

そんな事をやっていたにもかかわらず、上条当麻は何事もなかったかのように早起きをしている。

「不思議なこともあるもんだな～」

そう呟き、いつものように玄関にある郵便受けに手を突っ込むしかし、今日は何時も手に受ける新聞紙の感触のほかに、何か別のものが手に触れた

「ん？　手紙？」

表にはちゃんと自分の名前が書いてあった

『上条当麻様』

誰からだろうと裏を見てみると、

『学園都市統括理事長』

ちょっとだけ嫌な予感を感じつつ、上条は封筒を開ける

そこにはこう書かれていた

『拝啓　上条当麻様
このたびは、学園都市を外部の者の手から救っていただき、感謝申し上げます。
お礼として、「来場者ナンバーズ」の一等賞の商品、「北イタリア旅行5泊7日の旅」をご笑納ください
学園都市統括理事長　アレックス＝クロズリー（偽名）』

手紙の中に入っていた一枚のチケット
それには『来場者ナンバーズ』に置いてある一等賞の見本と“同じような”ものが書かれている

『北イタリア5泊7日の旅　3人と一匹チケット』

「って何でピンポイントでウチの家族構成なんだよ！？」

上条がもう一度手紙を見てみると、まだ何か書かれていたことに気づいた

『P．S
一度こういうのを作ってみたくて、ちょっとがんばっちゃいました。
ワープロって意外に難しいんですね（笑）それとも、一台５６００円のＰＣじゃスペック不足なんでしょうか？』

「作ったのお前かよ!?　つーかワープロで個人で作れるような物じゃねえだろ!?」

「もー、煩いんだよとうま！　今何時だと思ってるの？」

我が家の暴食シスターが目をこすりながら上条に怒鳴る

「もう6時半だろーが！　さっさと起きろやニート！」

「え？　ニーチェ？　神は死んでなんかいないんだよ？　ところでそのチケットは何かな？」

「『北イタリア旅行5泊7日の旅　3人と一匹チケット』だ」

「三人と一匹……？　ってことは！みしずに、スフィンクスに、とうまに、私のみんなでイタリアに行けるのかな!?」

目を恐ろしいほどキラッキラさせているインデックスに若干引きつつ上条は答える

「お前が『パスポート』を持っていればの話だけどな。美静はパスポート発行したあとに学園都市に残ることに変更されたからな」

ほら、これだ。とインデックスに何回か使われた自分の『パスポート』を見せる

「とうまって、ヨーロッパのほうに何回か言ったことあるの？」

「ああ、むかし父さんと母さんと一緒に行ったからな。俺はヨーロ

ッパ圏の語学なら話せっから、通訳とかを頼まれた」

「え？とうまは喋れるの？」

「独りの時間を全て鍛錬に費やしたっつっても、やっぱり時間はたっぷり空いちまうからな、暇なとき、例えば超回復期間とか、主にヨーロッパ圏の語学を勉強してたな」

「英語は喋れないのに？」

「それが上条さんクオリティだ。ところで『パスポート』はあるのか？」

「うーん、その『ぱすぽーと』っていうのが何なのかはわからないけど、似たようなものならもってるかも」

そう言ってインデックスは修道服の袖をゴソゴソと漁る。

はい、こんなの。とインデックスが英国式のパスポートを上条に差し出す

「ほー、こりゃ新しいな。一回も使われてねえ」

「いやいやいや、そもそもイギリスから来たはずのインちゃんがパスポートを一回も使ってないて言うのも変でしょう？　と美静はあなたのボケに的確にツッコミます」

いつの間にか起きていた美静をしばらく見続け、上条は呟く

「そういえば……そうだったな……」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

空港前バスターミナルにて

「「「来ない（と美静は少々起こり気味に言います）」」」

「とうま……もしかして私達って置いてk――」

「言うな。まだ希望はある」

不意にポンと肩に後ろから手が乗せられた

「現実を見ようぜ？　と美静は半笑いで語りかけます」

ドヤ顔と半笑いを足して２で割ったような顔で上条に語りかける美静

「とりあえず、今お前は俺達と同じ状況だということも現実だと思うが？」

額にいくつかの青筋を立てながら美静に現実を突きつける

「しかたねえ……とりあえず、いったんホテルまで行くか」

とりあえずホテルまで行くことに決めた三人と一匹はバスに乗ることにした。外の気温とは違い、バスの中の気温はやはり快適だった

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ホテルに続く道にて

「それにしても、食いモンばっかだな。インデックス、美静、食いモンはホテルについてからな」

「わかってますよ。ただ私達はちょっと計画を立ててただけですよ。と美静は涎を拭いながら否定します」

「説得力のかけらもねえ語尾だな？おい」

「ねえねえ、みしず！　みしず！！　まずはどれにする？　私はやっぱり『イカスミジェラート』を一番最初にしたいんだけど」

「修学旅行の女子グループか？　テメエらは」

キャイキャイワイワイ騒ぐ二人のテンションに上条はげんなりする

その時、
ドンッ

「おっと、Ｓｃｕｓｉ（すまねえな）」

上条より一回り幼く小さな少年が上条の腕にぶつかる

だが上条はあることに気づく。
イタリアに来たのは久しぶりであったのか、それとも旅行と聞いて気が抜けていたのか、
上条はイタリアにはスリが多いことを失念していた

「あのヤロッ！！」

上条の声に二人がん？と振り返る

「ちょっとバック見張っててくれ！　Ｆｅｒｍａｔｅ（まちやがれ）！！」

何が起こったのかもわからず、ポカンと上条の後姿を見送る

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

数十秒後

先ほどのスリを追いかけていると、スリは橋のところで減速し、止まった

「Ｌｏ　ｒｉｎｕｎｃｉｏ（あきらめたのか）？」

上条が歩いて彼のもとまで歩いていくと、スリが口を開いた

『兄貴！　頼んだ！』

スリの少年が上条の後ろの方を見てイタリア語で言った
後ろ？

「ん？」

上条が後ろを向くと、そこには上条より一回り大きい屈強な男がいた

『よお、ジャポネーゼ。ただのスリだと思って油断したろ？　今からお前から金をふんだくるついでにボコってやるよ！』

「あ゛ー？」

ドカッ！バキッ！グシャッ！グチャッ

「Ｒｅｑｕｉｅｓｔ　ｃａｔ　ｉｎ　ｐａｃｅ（安らかに眠れ）」

グッタリとした男の首根っこを掴み、上条は川へと投げ込もうとする。

その時、

「待つのでございますよ！」

「ん？」

どこかで聴いたことのある声がした

声のするほうへ目を向けると、そこには……

「オルソラ……？」

「イタリアではスリくらい日常茶飯事なのでございますから、今回くらい多めに見てあげても良いのでございませんか？」

「いや……俺狙われたんだけど……」

「まあまあ、なのでございますよ。この子もまだ幼いんですから、お兄さんをなくされてはかわいそうでございますよ」

『まあ、金さえ返してくれればいいや』

完全に毒気を抜かれた上条はとりあえず、財布を返してもらうことで事を収めることにした。けどスリの少年から財布を受け取る際、

「二度とするなよ?」

日本語で言った。

殺気を感じ取り、何を言ってるのかがなんとなくわかった少年は上条が財布をしまうのを確認すると、兄貴を引きずって駆け出した。

とても上条より一回り幼いとは思えない力だった

「ところで、何でこんなのところにいんだ?」

「あなたは学園都市在住でございましたよね?何故このような所に?」

「イタリア旅行権をもらった」

「ああ、私はちょっと引越しでまだ前の住まいに荷物を残しているので、取りに来たのでございますよ」

「相変わらず話づれえな……」

相変わらず、究極にマイペースな人間が苦手な上条のため息をスルーしてまたオルソラはマイペースな会話を始める

「ちょうどよかったのでございますよ。引越しのお荷物運びで、少々人手が不足してしまいまして、時間に余裕があるのでございましたら、ちょっとお時間よろしいでございましょうか?その代わりと言ってはナンでございますが、お昼をごちそうするのでございますよ」

「まあ、悪くはねえけどよ……(人とあんまり関わりたくねえんだ

けどな……）」

「ため息をつくと幸せが逃げると、日本では言われているのでございますよ？」

「ツッコマねえぞ？　オルソラ。ツッコマねえぞ！？」

「そういえば、インデックスさんと美静さんはどうなさんたのでございますか？一緒ではないのでございますか？」

「インデックスと美静なら、ほら、向こうに……ってあら？」

「あら？あそこのジェラート店にいるのはインデックスさんと美静さんではございませんか？」

オルソラが指差したほうを見るとインデックスと美静がジェラートを頬張っていた

「イィィイィィィィィィンデェェエエェェェェッックス！！！！みぃいいいいしぃいいいいいずううううううううううぅぅぅぅぅぅ！！！！！」

この大空に一人の男の雄叫びが響き渡った。

観光客（後書き）

最初のアレイスターの手紙の敬語がかなり苦労しました。多分敬語は間違っていると思いますが、アレイスターは外人さんなので大丈夫だろう！

それと、ちょっと事情により、悪条さんはヨーロッパ圏の語学に堪能という設定を追加します。

サブストーリー　家族（前書き）

実を言うと、早く０９３０事件編と武装集団（スキルアウト）編を書きたいと思っています。鬼畜が書きやすいので

サブストーリー　家族

Someone had said “we are meant to lose the people we love. How else would we know how important they are to us?”

誰かが言っていた。『愛する人は必ずいなくなる。失って初めてその人の大切さがわかる』と……

―ベンジャミン＝バトン―

イタリア　どこかの道にて

上条当麻は散歩に出かけていた。

オルソラの引越しの荷物整理が一段落して昼食をいただいたいて別にすることもないからだ。

（結局関わっちまったよ……最近こんなんばっかだな、俺）

他人（ひと）と関わることを拒絶する上条にとって誰かと関わることは何よりも恐ろしいことだった。

いや、恐ろしいのはただ誰かと関わることではない。

関わった人が自分の不幸に巻き込まれ、あるいは自分の不幸の材料となることが恐ろしいのだった。

誰かを不幸にする度に上条は思い出す。
家に突っ込んできたトラックに自分を護るために命を失った両親を
……
巻き込んでしまった人を引きずり上げようとするたびに思い出す。
今の自分の家族を“あんな目にあわせてしまった”ことに
（やっぱり、俺は独りでいた方が良かったのか？）

そう考えていると反対側の道にある路地裏から何かが見えた

それは強盗だった。
外国というのはそういうものだ。スリ、強盗、ひったくり、詐欺
ｅｔｃ
上条はそんなのは見慣れている。学園都市とそう変わらない。
ちょっと路地裏に入ればすぐに絡まれる、誰かが『強姦されている』
『強盗されている』『殺し合っている』。路地裏を利用することが
多い上条にとってそれは当たり前の光景だった。

だが今の上条心情では、
それは彼の過去を思い出させるきっかけとなった

・・

皆さんご存知のとおり上条の異常なまでの身体能力は元々周りを助けようとする彼の努力の賜物だった。
自然と増えていった彼の『独りの時間』を彼はフル活用して体を鍛錬していった。

ある日、彼がいつも通り学校で忌み嫌われながらも授業を受けている時だった。
ちょうど上条の地元を拠点にしていた某新興宗教のテロのようなものが起こった。大体昼休み頃だろうか、１０人くらいの老若男女が手製の凶器を片手に学校へ乗り込んできたのだ
ちょうど上条のクラスが占拠されてしまった。

しかし上条が隙を見てその場にいる全員を拘束した

『テメエらの思想を広めるのにコツコツと広めるのは別に構わねえ……けど、こんなことをして広めようとするなんてのは間違っている！　こんなことをしなきゃ広められない思想なんて誰も信用なんかしねえよ！！！』

彼の説教の内容は記録には残っていないが、拘束された何人かは改心した
オマケに人質は誰一人かすり傷すら負っていない
彼の努力は報われた

かのように思われた

『何言ってんだよ！　もとはといえばお前のせいじゃねえか！』
『くたばれ！　「自作自演野郎」！！』
『二度学校に来るな！！！』

みんなの反応はやはり酷いものだった
上条は『ヒーロー』になりたいと思ったわけじゃなかった。
ただ『不幸に巻き込んでも安全は保障するから仲良くしてほしい』
だけだったのだ

だが人間というのは酷い生き物だ。猿だ。
自分の身の回りにあった嫌なことなどを常に誰かのせいにしていな
いとやっていけない

『こんなに不幸なのはコイツのせいだ。だからコイツをやっつけよ
う』

この考えを免罪符に嫌なことの八つ当たりをする

上条は『疫病神』『自作自演野郎』として全員から嫌われているわ
けじゃなかった。
みんなにとって彼は藁人形（サンドバッグ）だった

ここまでされて上条がそれでも学校に通い続けたのは事件の人質の
ほんの一握りの家族による感謝の言葉だった。

『子供（弟）（妹）（兄）（姉）を救ってくれてありがとう』

この言葉が上条を救い、後に苦しめた

その一年後、上条の両親が死に、彼は約二年間漂流し、とある学園
都市（むじ）（んとう）へと流れ着く

『「失って初めてその人の大切さがわかる」か……みんなは俺がいなくなった後そう思ってくれるんだろうか』

そんな淡い希望など自然に消滅する

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・

「とうま〜！」

上条が物思いに耽っていると不意に声をかけられた

振り返るとそこにはインデックス、美静、オルソラがいた

「オルソラがオススメのデザートのお店を教えてくれるんだって！！　とうまも行こうよ！！」

「みんなでいただいた方がおいしいのでございますよ」

「大丈夫ですよ。オルソラさんが半分だしてくれるらしいですから。と美静は大丈夫なのかどうか微妙な報告をします」

(何言ってんだろうな……俺は)

「はいよ」

こいつらから逃げられるわけないじゃん

サブストーリー　家族（後書き）

あ、悪条さんの鬼畜を書かせてくれぇ〝え〝え〝え〝え〝え〝

女王

太陽が沈んだ暗い夜道を四人は歩く

「あー！　おいしかったね！　とうま！　みしず！」

これ以上とないくらい満面の笑顔を浮かべるインデックス

「オルソラ！　ありがとう！」

オルソラのほうを向いて彼女は礼を言う

「どういたしましてなのでございますよ。今日は手伝ってくれて本当にありがとうございました」

キレイな笑顔でオルソラはお礼を返す

「では私はこれで。機会がありましたら、ロンドンのお部屋にも招待するのでございますよ」

「はい、楽しみにしてます。オルソラさんも、日本に来ることがありましたら是非お越しください。歓迎いたしますよ。と美静は無愛想なご主人様の代わりに言います」

その時、インデックスがハッと何かに気づいた

「まさか……」

突然彼女は叫んだ

「みんな伏せて！」

バン！と銃を撃ったような音が響く

その音がした瞬間、上条は頭を少し下げ、頭のすぐ右辺りを何かの軌道を掴むように右手で掴んだ

ブシッ！！！

「くッ！！」

上条の拳から血が噴出すと共に何かが飛び出し、オルソラの顔の前で消えた

ダダダダダダダ！！！

と美静がどこからか取り出した狙撃仕様の『おもちゃの兵隊（トイソルジャー）』で応戦する

「だ、大丈夫でございますか！？」

オルソラがハンカチを取り出し、上条の手のひらにできた抉れた傷跡を覆う

その後に指の傷に布を巻こうとするが

「今はそこまでしてる余裕はねえ！　さっさと逃げろ！」

上条によって拒まれた

その時、

「とうま！　もう一人！！」

インデックスが叫ぶ頃にはもう既に上条の首根っこが運河から飛び出した何者かに？まれていた

「しまった！！」

何とかそいつを引きずり出そうとするが、湿った縁に付いた苔に足を滑らせ、運河に引きずり込まれる

（クソがッ！！　返り討ちに……ッ！？）

運河の中にはもう何者もいなかった

（ちっ！　一手遅れた！！）

上条が運河から這い上がると、オルソラが上条を運河に引きずり込んだと思われる者に襲われていた

オルソラを襲っていた小柄な男は刃渡り１０ｃｍほどの槍だった。

オルソラは鳩が豆鉄砲を喰ったように動かない

そうしている内に槍の刃がオルソラへ向かう。

ガン！！！

槍の刃を振り下ろす男の腰に上条がタックルをかまし、男を壁に押し付け、男の腕を捻って片方の腕を背中に回し、槍を取り上げる。

その状態でもう片方の腕の肩辺りを上条の左拳に殴り、もう片方の腕も背中に回され、掌を合わせる形となる。

グサ
と生々しい音と共に男の両手が上条によって槍に串刺しにされる

「が、あああああああああ！！！！」

槍は柄の方まで貫かれ、ある程度刺さった後、上条は槍を折り、まるで裁縫をするようにもう一度男の掌を合わせた両手に突き刺す。
今度は両手首を突き刺した

グサ
とまた生々しい音が響く

「うわあああああああああああ！！！」

言う必要はないが、刺した刃物は抜いてはいけない。
それによって傷口が広がり、ヒドイ激痛が来る。よって男はそのまま手を動かすこともできず、拘束された状態になった。

「何モンだテメエ……俺達に何のようだ？」

掌を二度串刺しにされた男の耳元で上条が囁いた

「……」

しかし、襲撃者は口を閉ざしたままだ

上条は掴んだ刺さっている槍を握る手に力を入れる

「今狙撃している奴にやめるように言え。じゃないと次は背骨を突

き刺すぞ」

その時、上条の拷問がインデックスに止められる

「大丈夫だよとうま。それなら私がもう済ませた」

「あ、ががががががががっがッ！！」

突如遠くの方で男の叫び声が聞こえた

「みしずのおかげでオルソラが攻撃される前にできたんだよ」

その時、通りの角から男が飛び出してきた
側頭部を押さえ、何かしらのダメージを負っているあたり、先ほどの狙撃主だと思われる

『前衛は見捨てる！　今すぐここで撤退の船を出せ！　あの女は――』

イタリア語で喚く男の後ろから上条が飛び掛り、二人とも運河へダイブする
そして上条の手は男の後頭部と背中を掴んでいる

「逃がすと思うか？　この俺を襲っといて？」

まるでプロレスの技をかけているような体勢のこの状態、水と言えども腹打ちをすれば相当痛い。ましてや顔を叩きつければ日にはしばらくプールに入れないだろう

その時、

ドパァ！！！！

と水面がまるで爆発でもあったかのように跳ね上がる
そこから現れたのは氷のような床
ただでさえ水に打ち付けられるのは痛いのに氷の床なんかでやったら『腹打ち』なんかではなく、最早プロレスにおける『フェイスクラッシャー』だ。
グシャッと鈍い音がして床に叩きつけられた男の顔と床の間からドロっとした赤い血が流れる
さっさと立ち上がった上条がその男の後頭部に唾と共に

「まったくいい部下を持ったもんだな」

と、皮肉な捨て台詞を吐いた。

ふと、上条が横を見てみると誰かがぶら下がっていた。

「すいませーん。ちょっと手を貸してもらえないでございましょうか？」

オルソラだ

なんでこんな所に引っかかってんだと考えつつ上条は彼女を引き上げる。途中、船が急に動き出して「ゲフッ！」てなったが、なんとかオルソラを引き上げることができた

オルソラを引き上げた後、気休めで下までの高さを見てみたが、どうがんばっても２０ｍくらいあった。

「この高さから落ちたら少なくとも『ボキッ♪』だな。いつ襲ってくるかもしれないわからないし、やらないほうがいいな」

「それでは、これからどうするのでございますか？」

「決まってんだろ。ここでジッとしているよりも、中を探索して脱出の方法を探した方がいいだろ」

そう言いながら上条は船の内部の入り口へと足を向ける
オルソラもそれに続いて歩き出す

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

氷の船内部にて

船の船内を歩く修道服をきた少女
身長は１５０ｃｍ後半と言ったところか
その少女は見張りとして船の廊下を徘徊している
彼女が廊下の突き当りまで言って角を曲がったその時、突如一般人の服装をした少年と鉢合わせした。少年も一瞬ギョッとしたがすぐに気が付いて少女より一瞬早く出た。
少女の頭を掴み、その顔を壁に打ち付ける

メキッと鼻柱が折れる音がした。
壁から顔が離れる時に、腹に一発膝蹴りを入れられた後、胸部に強烈なフロントキックを受け、少女は後方に飛んだ。ちょうど後ろにあったドアに突っ込み、その少女はその部屋の中でのびた。
そして男はその扉を閉める

「あのー、あの方、手当てをした方がよろしいのでございませんか

？」

その男、上条に怯える様子もなくオルソラは尋ねる

「そんな暇あっかよ。誰かが気づいて手当てでもするだろ」

そのオルソラを尻目に上条は歩き出す

（つっても、やたらにぶっ飛ばしてやるのは得策じゃねえな）

しばらく様子を見ようと上条は近くにあった部屋に入る

「なあ、この船、どこに向かってんのか見等つくか？」

「さあ、キオッジアから北上しているということは、おそらくヴェネツィア方面へ向かっているのでございましょうか。そちらの窓から見えるのではないでございましょうか」

オルソラの指差した窓を見てみるとそこには広大な水平線が広がっていた。

その窓を見た直後、海面のあちこちから先ほどこの船が現れたようにドパァと次々と船が現れた

「こりゃあヘタに外にでないほうが良さそうだな」

「そうでございますね……」

がちゃり

二人が呟いていると後ろでドアが開いた

開いたドアから出てきたのは少女
上条は咄嗟に彼女のもとへと駆け寄って部屋へ引きずり込み、ドアを閉めて閉まったドアに押しつけた。幻想殺しが何かを壊したような気がしたが気にしてられない

「またテメエかアニェーゼ。今度は何をたくらんでんだ？」

「さ、さあ、何のことやら。いえ、私はただ侵入者の捜索の手伝いですよ。まさかあなた達だったとは。そっちこそ一体何をたくらんでいるんですかい？」

「私達はいきなりローマ正教の方々に襲われ、成り行きでこの船に乗ってしまったのでございますよ」

「おい！」

その言葉を聞いたアニェーゼはなにやらたくらんでいる顔をした

「ほう？　つまりここには何も知らずに来ちまって、あなた達は今敵地のど真ん中でピンチと？」

「はい、そうなのでございますよ」

「おい！　余計なことを言うな！」

「なるほどなるほど、（これは利用できそうですね。）上条さんって言いやしたっけ？　ちょいと取引をしちまいませんか？」

今上条の状況を察したアニェーゼは取引を持ちかけた

「言うと思ったよ」

「ええ、こちらの条件さえのめば、私もここで大声を出さないし、脱出方法もお教えしちまいましょう」

「そっちの条件はなんだ？」

「まあ、焦りなんさんなって、なあに、簡単なことですよ。あなた方には“二人”ほど救出してもらいたいってトコです。二人は私達を解放しようと一度脱獄したんですよ。でも……」

「お説教ってか？」

「それだけならまだいいですよ。ここは牢獄、脱出の方法を潰す。つまり、二人が脱獄に使った術式を二度と使えないようにしちまうことです。似たような能力（ちから）を使う学園都市（そちらさん）にはもう分かっちまってんでしょう？」

上条が思い浮かべる学園都市の能力者から能力を引き剥がす方法、それは『自分だけの現実（パーソナルリアリティ）』の崩壊、剥離

すなわち

「脳みそぶっ壊すってか？」

アニェーゼとオルソラの顔が曇る

「ご名答。私とて頭の壊れちまった労働者を見ていい気分になるようなサディストではないんで――二人の救出を頼みたいってわけなんですよ。ここからの脱出方法はその二人から聞いてもらうって

わけです」

「一応聞くが、その二人の名前は？」

「シスター・ルチアとアンジェレネ。あなたも会っちまったはずでしょう？」

そういえばと上条は思い出す

「あの『シャム猫』と『そばかす』の凸凹コンビか？」

「はい、『シャム猫ベジタリアン女』と『そばかす甘党幼女』の“いろんな意味で”凸凹コンビです」

「選択の余地は無しか、交渉成立ってとこか？」

もう押さえる必要のなしと判断した上条がアニェーゼから手を離すただちょっと引っかかることが上条にはあった

バサッ

さっきの幻想殺しの反応だ

アニェーゼの体からバラけた修道服が落ちた

「ああ、幻想殺しの反応の正体はお前の修道服か」

「どうも変わったデザインの修道服かと思ったら、その装飾が拘束効果を与えていたのでございましたか」

そういいながらオルソラがアニェーゼの口を塞ぐ

「ンーッ！！」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

さて、現在上条らはある部屋の前まで来ていた。部屋の前には巨大な氷の鎧がドアを塞いでいた

上条は救出する二人がどこにいるのかとんと見等がつかないが、少なくとも目の前に迫る氷の鎧がいる部屋を探せば手っ取り早く見つかると考えた。

そうこうしているうちに目の前の鎧は手に持っているを上条の脳天へ振り下ろす

ガンッ！！！と砕いたのは上条の頭部ではなく床だった

バギン！！！と上条の手刀が棍棒をへし折る。上条の力で負ったわけでなく、上条の右手（イマジンブレイカー）が折ったのだ

棍棒が折れたのを確認して、上条は鎧の胴へストレートをかます

バギン！！！

鎧の体が拳を受けたところから崩れていく

「大丈夫でございますか？」

「ロボットごときで俺を殺せるわきゃねえだろ。それより、この部屋にいると思うか？」

「それは分かりませんが、少なくとも、何人か術者がいると思われ

ます」

「別にそんな情報俺には関係ないね」

そう言って上条はドアの方へ歩いていく

バタン！！

上条がドアを蹴破ると中には7人ほどの男女がいた

そのうち2人は女、上条らが探していたルチアとアンジェレネだ

残り五人は男、上条は確信する。

敵だ

ゴギッ！

彼らが動く前に上条が動き、はじめに目の前に背を向ける形で座っていた男の頭を掴み、一気に捻り折った。そして男が倒れる前にその向かいに座っていた男を引き寄せ、机に力いっぱい顔を叩きつける。

グシャと血しぶきが飛ぶ。3人目の犠牲者は上条に床に仰向けに引き倒され、イスの背もたれを首に押し付けられた

残る二人、

怯えた目で上条を見る。

それに上条はドスのキいた声で話しかける

「なあ……もし、もしお前らにまだ歯向かう気力があるってんなら

……」

ゆっくりと二人に近づく

「爪は何枚剥がしてほしい？？？？？」

殺意しか見えない瞳を向けて……

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

残る二人の男は観念して上条に楽に気絶させられた

拘束するという手もあったが、なんせロープになるものがない、拘束できるものとしたら男達の腰に巻かれたベルトぐらだ。さすがに男の腰からベルトを剥ぎ取るのは気持ちが悪いので結局上条は気絶させることにした

「さて、単刀直入に言おう。助けに来た」

とはいっても元々敵であった上条が言っても二人は警戒したままだった

「その言葉を信用しろと？」

「まず俺らが今気が付いたら敵地のど真ん中にいたって状況。脱出するにはお前らの使った術式とやらが必要。アニェーゼに頼まれた。あとはわかるな？」

「そう言って、脱出したら私達を始末しようなんて魂胆でしょう？」

上条はそれに呆れたようにため息を吐き、頭をぽりぽりとかく

「あのな？　俺らはここから脱出さえできればそれでオーケーなの。わかる？　お前らを殺す理由なんてないっつうの。俺はただホテルに帰ってあったかいふかふかのベッドで寝たい、ただそれだけ。お前らにマイナスな事をしてメリットはないわけ。おわかり？」

「助ける価値がなければ素直に見捨てている、という訳ですか。……余裕ですね」

ふん、と鼻で笑うルチア

「ああ、お前らがここから脱出する術（すべ）を持っていなければわざわざこんな危ない橋渡ってこねえよ。今の俺達はたとえお前らが俺に暴言を吐こうがここから脱出する手伝いをしなければならない」

ルチアが上条へ目を向ける

「それは悪くない条件ですね。ただ、問題があるとすれば、私達のこの修道服でしょうか」

「さっきちょっと試してみたらしっかりと迎撃術式が施されていました」

「そんなん後で解除してやるから我慢しろよ」

「そんな殺生な……」

オルソラが彼を宥めるも

「そもそも世の中にはどんなに平凡な日常で生活していても『我慢』

つーもんが必要なときがあんだよ。テメエらみてえな現在禁止されている刑罰をされている、ましてや――」

上条はオルソラを尻目に続ける

「――人殺しの件に関わっているクズなテメエらがそれを避けて通れるわきゃねえだろうが」

上条は二人に厳しい言葉を投げる

「わかったらさっさと行くぞ」

「ちょ、ちょっと待ってください！　シスター・アニェーゼはいつ合流するんですか？　いま何をしているんですか？」

アンジェンレネに呼び止められた

ある必要なことをしているアニェーゼを……

「アニェーゼは今――陽動してくれてる」

「「えっ？」」

「わからなかったか？　陽動してるんだよ」

「何で、ですか？」

アンジェレネが口を開く

「それじゃああなたはシスター・アニェーゼを見捨てたというのですか！？」

次にルチアが少し怒鳴り気味に言う

「ああ」

「何でですか！　何で見捨てたんですか!?　シスター・アニェーゼから聞いたはずでしょう!?」

「聞いてはいないが、大体予想は付いていた。その様子じゃお前ら――」

「――アニェーゼが現在ヤバイってことだよな」

「あなたはそれを分かっててここまで……」

ルチアが悔しそうにギリと歯を鳴らす

「なんでわかってて見捨てたんですか!!!」

ルチアが上条の胸倉を掴み、怒鳴り散らす。だがそんな彼女を上条は

「言ってんだろ？　アニェーゼを助けるのは取引にない。俺はただここから脱出して、ホテルに帰って、暖かいベッドでさっさと寝たい。ただそれだけだ。アニェーゼはお前らを助けさえすれば、俺らのことは黙っててくれるって言うし、助ける義理はない。」

キッパリと上条は切り捨てた

「なら、あなた達は今もシスター・アニェーゼと取引をしていたときと状況は変わらないはずです。私達がシスター・アニェーゼも助けると言う条件を足してもいいはずです」

ルチアが上条らに取引を持ちかけようとしたとき、

ゴガッ!!と突如氷の壁を破る音が聴こえた

「悪いが、“タイムオーバー”だ」

現在他の艦隊は上条らの乗っている船に集中砲火をしている

砲弾が艦隊に当たるとそこが砕けるだけじゃなく、ヒビが広がっていく

船が沈むにはそう時間はかからなかった

女王（後書き）

途中、見当という感じを見等と間違っていますが、面倒くさいので修正はしません

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3996u/

とあるＩＦの幻想殺し

2011年12月24日02時55分発行